CRTP（Community-work Reflection Training Project）研究会報告書

コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング

―リフレクションによる共有の場を求めて

CRTP 研究会

2020 年 3 月

はしがき

―読み物にとどまらないための試み

アジア福祉社会開発研究センターの研究メンバーによって、編訳書『地域アクションのちから―コミュニティワークリフレクションブック』（平野隆之・穂坂光彦・朴兪美 2018）が出版された。この本は、長年にわたって脈々と続いてきた、日韓住民運動交流の成果でもある。その成果の上、「コミュニティ組織化」の長い経験をもつ実践家集団の CONET※（韓国住民運動教育院：Korea　Community Organization Network for Education & Training）がまとめた本の編訳作業が行われたのである。

※CONET は、韓国の住民運動の歴史・伝統を継承し、コミュニティ組織化を発展・トレーニングさせるために、活動家（実践者）が集まって 1996 年設立した団体である。

しかし、編訳作業を続ける中で、一つ難題があった。原著には、極めて実践的なグループの CONET の「お勉強のための読み物ではない」というアクション性が込められていた。彼らは自分たちのコミュニティ組織化の実践を省察（リフレクション）し執筆した原著をもとに、独自のトレーニング・プログラムを開発し現場に還元していた。編訳者たちは、原著の日本の現場への汎用性には疑問を持っていなかったが、具体的な活用方法の提示に踏み込むには限界を感じていた。

本の活用方法について一つの工夫が始まるのは、ある会合での偶然な話し合いからである。編訳書の編集デザインを担当した北川郁子氏（七七舎）は、本の内容をカード化したワークショップ方式というアイデアを提案した。その提案を受けて、編訳者側（朴兪美）、出版社側（宇城絵美）がともに検討を始め、まず実験的なカードワークショップを実施してみることになった。寄せ集め方式で 10 名に呼びかけて行ったカードワークショップの実験から、本の活用方法の開発に向けた新たな場、すなわち CRTP（コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクト）が構想されるようになる。

―場の相互作業、そして CRTP の構想

カードワークショップの場は参加者に新鮮な刺激を与えた。立場が異なる人々（住民、社協、行政等）が、しかもステークホルダーではない自由な立場から、同じ場で話し合うことは意外とない。たまたまそれが実現できたカードワークショップの実験の場は、参加者に次のような気づき促した。「こんな行政職員がいる」、「こんな社協職員がいる」、「こんな住民がいる」等のように、普段の現場ではみられなかった互いの認識や振り返りがあった。カード（本の内容）を媒介としたワークショップの場では、豊かな相互作用が体験された。

その気づきから連想されたのは、CONET の「現場を大前提としたトレーニングの原則」ということと、当センターの「メタ現場※」という考え方である。CONET のトレーニング・プログラム（3～6 か月）は、単に本の内容を学ぶということではない。参加者は自分のアクションの現場とトレーニングの場とを行き来しながら、「アクション－省察－アクション」という循環を体得する。それ故、参加するための条件は「現場有り」である。そのプログラムは、なぜ今ここ（現場）にいるのかという自分のアイデンティティを、リフレクションを通じて問い続ける「メタ現場」の形成として受け止められる。

※メタ現場とは、日々の業務から一定の分析的枠組みを活用して俯瞰的に現場を振り返ることで、実践にフィードバックできる「もう一つの現場」を意味する（穂坂・平野・朴他編『福祉社会の開発』（2013）の第11 章参照）。

CONET のようなトレーニング方式を提示できるのであれば、原著に込められている単に読み物に終わらないというアクション性のミッションを具体化できるのではないか。カードワークショップの場が見せてくれたように、相互作用による新たな気づきとともに自分の現場の振り返りができれば、省察（リフレクション）と現場実践（アクション）との伴走も可能ではないかということである。

―CRTP の展開

再び、本の活用方法を考える場が設定された。リフレクションをキーワードとしたトレーニングを開発する、CRTP の場である。CONET が示した、実践者発信のトレーニングを目指しつつ、CRTP は寄せ集められたメンバーでスタートした（2018 年 9 月）。

CRTP への最初の呼びかけは、編訳書の活用方法を提案できるとの考えから、編訳者側・出版社側等の 3 名によって行われたが、回が重なるほど、CRTP メンバーの相互作用によって場が方向づけられ展開された。本の活用方法を考えるという漠然とした最初のねらいも、カードワークショップのさまざまな工夫を経て、事例を用いたリフレクションの検討等につながった。とくに、その展開への分岐点となったのは、「鳩のフンから女子大生」という事例の登場である（永坂氏の36頁参照）。こうした場の相互作用等により、CRTP の場は思いがけない展開を体験しつつ、新たな展望につながっている。

本報告書は CRTP のこれまでのプロセスによる記録であり、ここまでウォーミングアップしてきた CRTP の可能性を展望するものである。

２０２０年　3月

CRTP（コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクト）研究会

目　次

はしがき

第１章　リフレクションへの誘い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　１．CRTP 研究の基本枠組み　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　２．リフレクションのツールとしてのカードワークショップ　・・・・・・・・・・・7
　３．北芝でのリフレクション・ワークショップの展開　・・・・・・・・・・・・・11
　（１）ワークショップの位置づけと概要　<11>
　（２）第１回のリフレクション・ワークショップ　<13>
　（３）第２回のリフレクション・ワークショップ　<19>
　（４）第３回のリフレクション・ワークショップ　<28>
　（５）ワークショップのアンケート調査等　<33>

第２章　事例によるリフレクションのトレーニング　・・・・・・・・・・・・・・・35
　１．地域づくり版わらしべ長者物語－鳩のフンから女子大生！？　・・・・・・・・・36
　（１）物語スタート　<37>
　（２）コミュニティ組織化の 10 段階にみる展開　<39>
　（３）フローチャートによるリフレクション　<41>
　（４）リフレクションの演習　<42>
　２．あきらめない、見捨てない コミュニティワーク　・・・・・・・・・・・・・・45
　３．役割が転換・循環する「ごちゃまぜ」空間　・・・・・・・・・・・・・・・・51

第３章　リフレクション・プロジェクトのふりかえり　・・・・・・・・・・・・・・57
　１．マイカードづくり　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
　２．研究会の場のふりかえり　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67

【参考資料】
　１．『地域アクションのちから』の第１章のカード　・・・・・・・・・・・・・・・73
　２．研究会の記録等　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

CRTP 研究会の展開
CRTP 研究会メンバー

第１章　リフレクションへの誘い

１．CRTP 研究の基本枠組み

CRTP は、編訳書『地域アクションのちから―コミュニティワークリフレクションブック』（平野隆之・穂坂光彦・朴兪美 2018）をもとに展開される場であり、原著者 CONET が示す枠組みを採用してきた。現場の長い経験をもつ実践者集団である CONET（韓国住民運動教育院：Korea Community Organization Network for Education & Training）が、「コミュニティ組織化」のトレーニングにおいて重視してきた考え方がある。そのうち、CRTP 研究会の基本枠組みとなる内容として、大きく２つの内容を紹介することができる。

■一つは、コミュニティ組織化の基本方法としての「アクション－リフレクション」の循環である。これまでも実践者は実践現場だけではなく、研修・事例研究等の学習現場ともいえる場と行き来しながら、自らの実践を研いてきた。そのとき、リフレクションというのは、実践現場と学習現場とが循環しつつ、それがアクションにつながるように働きかけるものと想定される（図）。まさに CONET が提起した「アクション－リフレクション」の循環である。こうした循環を促すトレーニングということに着目し、研究会が進められてきた。

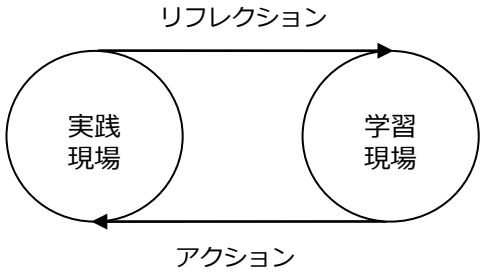


図１　「リフレクション－アクション」の循環を促すトレーニング

■二つは、自己開発・組織化方法開発・ビジョン開発という３つのバランスによるコミュニティ組織化の推進である。リフレクションは、コミュニティ組織化のトレーニングにおいて重要なツールとして示されるが、そのリフレクションは何を軸に行われるのかということである。上記の３つのバランスというリフレクションの軸が明らかに示されている。

表１　自己開発・組織化方法開発・ビジョン開発のバランスによるコミュニティ組織化の推進

自己開発	組織化方法開発	ビジョン開発
自己理解や自己覚知の推進	出会い・つながりの方法開発	地域や社会の変化指向

自己開発は、人は自分自身でできる力と可能性をもっているということを、実践者自ら覚知していくことであり、コミュニティ組織化はそこからスタートする必要がある。

組織化方法開発は、個人ではできないが、人々の力を合わせることで動かす力が発揮されるという組織化を進めるために、人々の出会いやつながりの方法を開発していくことである。

ビジョン開発は、地域課題というのがその地域だけでなく、他の地域や国、さらには世界の課題にもつながり得るということを理解し、「なぜコミュニティ組織化を進めるのか」という社会変化へのコミュニティ組織化のビジョンを探ることである。

こうした３つの内容をリフレクションするトレーニングが目指されるのである。

■これまでの研究会では、CONET が示した上記の枠組みを取り入れながら、参加者それぞれが自由に安心してリフレクションすることができるような場の設定として進められてきた。流れ去った物理的時間（クロノス※）の中で、 意味づけられる質的時間（カイロス※）を探り、自分の気づきや、逃してしまった何かを改めることができる場ということである。

それゆえ、研究会の場を通して、リフレクションの共有や、それがもつ意義が体験されてきた。そのプロセスの一部分を、断片的ではあるが、研究会の記録として本報告書にまとめておく。今後、さまざまな現場においてリフレクションやその共有が拡がり、それによってコミュニティ組織化の可能性もより拡がることを期待してみたい。

※ギリシャ語には 2 つの時間があり、量的に計測可能な物理的時間のクロノス(Chronos)と、意識化される主観的・相対的時間（チャンスやタイミング等）のカイロス(Kairos)が示されている。

２．リフレクションのツールとしてのカードワークショップ

（１）カードワークショップの概要

ＣＲＴＰ研究会は、『地域アクションのちから―コミュニティワーク・リフレクションブック』という本をもとにスタートしたものである。以下、「本」というのは、『地域アクションのちから』を指していることを断わっておく。

ＣＲＴＰ研究会がコミュニティワークのリフレクショントレーニングプロジェクトとして進められてきたことも、『地域アクションのちから』をもとに、現場でどのようにリフレクションを進めるのか、さらにそのトレーニングの必要性に着目してきた経緯がある。

まず、その一つの実験として始まったのが、カードワークショップである。本の各章は、概ね20 前後の小見出しで構成されているが、この小見出しをカード化しワークショップを行うことである※。コミュニティ組織化におけるさまざまな思いがこもっている小見出しのカードは、普段の仕事や生活の中で流れ去っていくさまざまな出来事を思い起こしてくれるツールとなる。「言語化」されている小見出しによって引き出されるさまざまな思いや考え等の再認識。そのようなリフレクションを促すツールとして、カードワークショップを用いることができる。

※ワークショップのカードづくりの例として、本の第１章のカードを参照できる（73 頁）。カードの片面印刷で使用する場合（表に小見出しのみを示す）と、両面印刷で使用する場合（表には小見出し、裏にはその内容を示す）がある。

以下、その進め方を簡単に紹介する。さまざまな現場や場で実験的に、または研修のツールとして用いられたカードワークショップは、一定のツールとしての効果が検証されてきた。さまざまな現場の状況や文脈に合わせて、カードワークショップの進め方も変わる。ここで紹介するのは、基本的な進め方であり、さまざまな現場や場で、多様な形で応用して活用することができる。

（２）カードワークショップの進め方

基本的に、本のなかで、一つの章を選んで※、４～５人のグループワークで進める。以下のワークショップの展開においては、場の設定に応じた柔軟な時間設定が可能であるが、個々人の発表時間の配分に留意した時間管理が求められる。

※一つの章の全ての小見出しをカードにする必要はない。いくつかのカードを選択しワークショップを進めることも可能である。

①アイスブレイク

基本的にアイスブレイクは何でもよい。自己紹介を兼ねることもあり得る。自己紹介は単なる所属や名前の紹介というより、いまどのようなことを考えているのかなど、各自の思いを少しでも互いに知らせることがポイントとなる。

個人ワーク：「私」と地域の関わりをふりかえる
・地域との関わりにおいて「心がけていること」や「悩みや課題」を改めて思い起こしましょう （最近、自分の中で気になっていることや日常での小さい出来事などを思い起こしましょう）

ふりかえりのためのイントロとして、シートを用意してもよい。例えば、個人ワークとして、「活動している中で、心がけていることはありますか」、「活動で記憶に残るエピソードがありますか」等を、シートに簡単に記入してもらう。その上で、その内容をもとに自己紹介を行うことができる。時間は一人当たり３～５分程度とする。

②カードの選択

本格的にワークショップに入る。まず、カードを広げてもらう。そのカードをよく見てもらい、各自が「自分の気になるカード」を１枚、心の中で決めるようにする。カードは取らずに、机の上に置いたままにする。記入シートがある場合は、選択したカードの番号を記入してもらう。

個人ワーク：カードの選択
・カードが重ならないようにテーブルに広げます ・いま、あなたに「一番気になるカード」を１枚、心に決めましょう カードは手に取りません

また、カードの選択においては、場の設定に応じて、「一番ピタッと来るカード」「違和感があるカード」等、さまざまな選択をファシリテートすることができる。

③選択カードのグループ共有

時計回りに進める等にして、各自が自分の番が来たら、「自分の気になるカード」を手に取る。グループの他の人に見えるように胸の前に出して、「どうしてこのカードが気になったのか」を話す。一人につき３～10 分の時間設定が可能である。

例えば、10 分を設定した場合、話す内容がないという人には、他の人が質問したりして、与えられた時間に話を続けるように進める。但し、係の指示が出たら、お話の途中でも、「自分の気になるカード」をテーブルに戻し、次の人にバトンタッチする。

グループワーク：選択カードの共有
・お互いに選択したカードを共有しましょう ・記入シート有）記録係りを決めましょう ・選んだカードの紹介（カードはかぶってもＯＫ） ・選んだ理由（そのカードを選んだ理由やそれを裏付けるエピソードがあればお話しください） カードは手に取って説明し、終わったら戻します

なお、他の人と同じカードを選んでもかまわない。グループ全体の記入シートがある場合は、それぞれが選択した番号やその理由等について簡単に記入する。グループワークが始まる前に記録係り等を決めておく必要がある。

④グループカードの選択

全員の発表が終わったら、「自分の気になるカード」に選ばれなかったカードを片づける。机の上には、グループのメンバーが選んだ「自分の気になるカード」だけを残す。その中から、グループ内での意見交換を通して、「グループのカード」を１枚決める。制限時間は概ね５～10 分にする。

グループワーク：グループカードの選択
・メンバーが選んだカードのみ残します ・その中から、互いに意見交換しながら、グループで１枚のカードを選びます ・記入シート有）記録係りは意見交換の内容等を簡単に記入する

さらに、グループカードの選択後、そのカードの小見出しの内容を本から探して（両面カードの場合は、裏面の説明を活用）、グループメンバーみんなで読んでから、再び話し合うことができる。選択したグループカードについて議論を深めるという「グループカードの深化」である。そのカードについてのグループ以外の人々の考え方や観点を、本等から取り入れることである。この過程を進める場合、概ね 10 分前後の時間設定が必要となる。

⑤全体共有・まとめ―各グループの報告

各グループが話し合った内容を 3 分ずつ発表できるようにして、全体の共有を行う。これで終わり、アンケート等を取って終了することができるが、「マイカードづくり※」を行うことも可能である。全体の過程を通して、参加者各自のまとめとして、自分のカードをつくってみることである。自分自身のふりかえり、また他人との共有等から、カードに出てくる小見出しのようなものでもよいし、キーワードのようなものでも構わない。

※マイカードづくりについては、CRTP 研究会メンバーが作成したもの（第 3 章の 57 頁）をご参照ください。

全体共有・まとめ
・選んだグループカード ・選んだ理由（グループ内で話し合った内容等について発表する） ・（マイカードを作成する）

さらに、マイカードのグループ内での共有や全体共有もできるとよい。自分のアクションに向けての 1 枚のマイカードをつくり、カードに込めた思いやその理由・背景等を互いに語り合うことで、ふりかえりのカードワークショップが終了する。

３．北芝でのリフレクション・ワークショップの展開

北芝とは、「NPO 暮らしづくりネットワーク北芝」等が活動している小さなコミュニティ、被差別部落の名前である(大阪府箕面市に位置)。以下、紹介する北芝でのリフレクション・ワークショップは、上記に示したカードワークショップの実例であり、CRTP 研究会メンバーと北芝の職員（NPO 法人等）とが学び合う場「現地研究会」（全３回）として設定された。

（１）ワークショップの位置づけと概要

１）ワークショップの位置づけ

・ＣＲＴＰでは、異なる組織からの参加によるワークショップを試行してきた（兵庫県社協や奈良県社協での研修：参考資料ニューズレター特集号の７・８頁を参照）。そこでは、日常から離れ、ひたすらテーマについて考え、意見交換を行うことで、自分の実践や思考について確認をすることができたという声が多く、リフレクション・ワークショップの一定の効果が認められた。

・北芝でのワークショップは、上記の効果が、同一の組織・チーム内でも実現できるかというチャレンジでもあった。

・第１回ワークショップの事前案内で池谷氏は以下のようなメッセージを出している。

「・・・北芝で働くスタッフがそれぞれの個性を生かしながら、社会的な役割をもって業務にあたり、よりよい地域づくりの一端を担うものとして取り組んでいけるように、省察（リフレクション）する時間をもつ場面をつくります。・・・」

個性／社会的役割／地域づくり・・　これらのキーワードは、北芝スタッフのなかでどのように意識され、日々の実践のなかに息づいているのか。

・チーム内でのワークショップについて何をねらいとするかは、時々のチームの状況によって異なるが、北芝では日頃から業務上のやりとりだけでなく、チームや地域の方向性やあり方について本質的な議論が存在する。それは他の組織と比較しても機会が多いという。

・北芝のように、日常の議論やコミュニケーションの度合いが深いチームにおいても、「非日常的な対話」の効果が期待できる。

２）ワークショップ・プログラムの概要

・北芝の組織は、多様な法人格を持っており、多重的な法人運営によって成り立っている。今回のワークショップに参加した北芝の組織は、４チーム体制（①統括：総務・企画、②地域支え合い推進室、③地域教育子ども支援推進室、④合同会社）である。毎回のワークショップでは、概ね 25～30 名の職員が参加した。

表２　北芝での「現地研究会」（全３回）の展開

第１回 ７月８日	・テーマ：本の１章（住民の力によるｺﾐｭﾆﾃｨ組織化） ・進　行：導入（事前アンケート概観、地域アクションの力概説等）→カード選定（転機や印象的な実践を想起）→共有→深化（全員分）→全体共有 ※マイカード作成の宿題 ・形　態：グループワーク（北芝４－５名＋CRTP1 名）
第２回 ９月９日	・テーマ：本の３章コミュニティワーカーとは？ ・進　行：導入（前回ふりかえり、第３章概観）→カード選定（気になる・皆で深めたい）→共有→深化（全員分）→北芝の特性・大事にすべきもの→全体共有 ・形　態：グループワーク（北芝４－５名＋CRTP1 名）
第３回 12 月 16 日	・テーマ：組織内のコミュニケーションとは何を共有するものか ・進　行：導入→ワーク①（仕事とプライバシーの時間比を考えた上で共有）→全体共有→ワーク②（グループごとにテーマを決めて話し合い）→全体共有 ・形　態：グループワーク（北芝４－５名＋CRTP2 名、宝塚市社協３名参加）

・第 1 回においては、「第 1 章の住民の力によるコミュニティ組織とは」についてカードワークを行った。コミュニティ組織化そのものについてカードの言葉をもとに考えてもらい、互いの考えを共有した。ワークの後、アンケートとマイカードづくりを宿題として提出した。

・第２回においては、第１回の事後アンケート等をふまえて、北芝チームから寄せられた以下のメッセージをもとに企画された。

「・・・第３章（コミュニティワーカーとは？）を通して、（前回よりもさらに）自分自身や自分の仕事と結びつけることをめざしたい。コミュニティワーカーや住民という立場だけではなく、（役割の）グラデーションや、しっくりくるところ、違和感、などを話すことで自分の立ち位置が整理できたり、言葉にできたりする場にしたい。・・・」

第３章はワーカーにとって自分や日々の業務につなげて考えやすいテーマであるが、単に考えやすい項目だけでなく、ひっかかりのあることや、意見が分かれることを取り上げることで、日々の業務のなかに埋まっている何かを深めるという意味で実施された。

・第３回では、1・2 回のアンケートからあげられた「言語化」と「話し合う機会」という、ワークショップの意義に着目し、ワークショップを実施した。とくに、話し合う機会ということでは、職場内でのコミュニケーション（共有の対話）の問題が大きく指摘されていたため、ワークショップでは、職員同士で共有したいと思っている内容は何かについてふりかえり、各グループに深める内容を選択し話し合いを進めた。

（2）第１回のリフレクション・ワークショップ　―「私」と「北芝」の解きほぐし in 北芝

１）ワークショップから選択されたカード

第１章「住民の力によるコミュニティ組織化」の小見出しカードを用いて（Ⅱ～Ⅴ、Ⅶ、Ⅹのカード、表３を参照）、５グループ（25 名）でワークショップを実施した。

カードの選択においては、「あなたにとって、転機になったことや、とても印象深かった出来事や実践を思い浮かべてください。それらの出来事や実践に引き寄せて、共感できたり、何か引っかかりのあるカードを１枚決めてください」とファシリテートされた。

その結果、選ばれたカードは、以下の通りである。

表３　第１章「住民の力によるコミュニティ組織化」において選択されたカード

第１章の内容	カードの番号・小見出し内容	25 名（100%）	
Ⅲコミュニティ運動は何を達成するのか？	9：主体的な生き方―私たちの生活を私たち自身が責任を負う	4	11（44%）
	10：共同体―人間は他者とともに生きていく	6	
	11：民主主義―すべての権力は住民から出る	1	
Ⅳコミュニティ組織化とは？	12：自分と地域を正しく認識し、住民意識を持つ	2	5（20%）
	14：住民自ら行動する実行力のあるコミュニティ組織を立ち上げる	2	
	15：多くの活動団体と連帯協力し、他のコミュニティ組織とともに連合組織を立ち上げる	1	
Ⅴなぜコミュニティを組織化するのか？	16：意識化―住民意識が主役・主体をつくる	2	6（24%）
	17：パワー化（力を発揮する）―結集した力が変化をもたらす	1	
	18：人間化－人間は人間らしい暮らしをしなければならない	3	
その他：Ⅶ基本原則（22～25）、Ⅹ類型（40～43）	22：コミュニティ組織化とは住民自身の利害関係から出発する	1	3（12%）
	25：コミュニティ組織にとって不条理に対する抵抗と戦いは不可避である	1	
	41：日常的な地域生活課題のための組織化	1	

選択されたカードの内容をみると、「Ⅲコミュニティ運動は何を達成するのか？」が最も多くの人によって選ばれた（44%）。一方、「Ⅱコミュニティ運動とは？」を選択した人はいなかった。

2）各グループの発表及びＣＲＴＰメンバーのコメント

	グループ発表	ＣＲＴＰメンバーのコメント
1 Group	ストーリーは異なるが、3 人が同じカードを選んだ。 他のカードもつながり合うキーワード。 自分の権利＝共同体	表面から裏面になったときに、同じカードを選んだ人のつながりを感じた。 カードに書かれていることと現場での悩ましさ？
2 Group	メンバーがそれぞれのカードを選ぶ。 それぞれが引っかかっていたものが共有でした。 メンバーの話⇒自分自身のふりかえりになった。	北芝の皆さんそれぞれが、他のメンバーのことをよく知っている。 それぞれの取り組みを理解し合っている。 言葉に詰まっても、お互いがフォロー⇒それぞれをよく知っているからできる。 ここ自体がコミュニティで共同体
3 Group	しっくりくるものがない！　住民兼 COW の人の視点。 自分の立ち位置　普段あまり意識していない。 職員意識と住民意識の違いは？住んでるか否かか？！	どのカードもそれぞれ引っかかっている。 体験に引き付けて裏面の意味を感じとる。 この本は CW・住民・カテゴリが分かれているが、北芝の皆さんはシャッフルされていて境界があいまい。
4 Group	カードをきっかけに語られるエピソード。 メンバーの思いの再認識。	「コミュニティワーカーとしてのセンス・技量ではない」「テクニックを磨くものではない」・・・グループメンバーはそれが分かっていた。 話をすることで自分の立ち姿が見るようなものだが、メンバーですでにできていて心の開き方が上手。 主体の形成はこうしてできていくものか。
5 Group	北芝チームの取り組みと地域住民の取り組みのズレ。 具体的なエピソードで共有。	共同体―ともにキーワード 差別意識があったが、子どもが普通に接して自分をふりかえった。 他者とともに生きる…一人で暮らすことが自立ではない。他者とつながる。 みんなで協力し合ってると思っていたが、パーツはいいものを持っているが組み合わせがうまくいっていない場合があると感じることも。

３）職員によるカードの解釈　－グループワークの記録から

09　主体的な生き方－私たちの生活を私たち自身が責任を負う

・我々が様々な場面で関わりすぎることが結果的に人任せになりすぎる関係をつくったり、主体性を奪っている、もしくは住民力を奪ってしまっているのでは？反省

10　共同体―人間は他者とともに生きていく

・この組織の中でゆるいと感じることがあり、どこまで引き締めるか悩む。他者に対してこうして欲しいと思うが自分と一緒でない、自分の思い通りにはならない。必要なのはわかるがゆるいままではいけない。

・子どもとの関わりを通じて、特に重度障がい児とともに過ごす子どもたちは偏見もなく、身の回りの世話を自然とできていた。共同生活の中で、子どもたちが障がい児のことを受け入れ、ともに生きていく姿から支援者としての本当の支援を見つけることができた。

・自立した生活は就労して一人で暮らせることではなく、他者とつながって暮らすことができるようになること。一人で生きていける社会はない。

・対象の小２の子も役立っていることがうれしいし、4、5 年生が 1、2 年生をフォローするなど巻き込む活動をしている。どの人にも力がある。子ども食堂などに大人にシェフなど活動の場を作り、孤立しがちなお母さんが来る。

・初めのころは、「他者とともに」に意味があるのか？と、思っていた。しばらくしてから、（他者とともにを）拡げたいと思うようになってきた。若者の中で、排除の中で生きている。矛盾を感じた。

・疑う感じで選んだ。住民、利用者である他者と、切っても切れ離せないが、他者が自分を判断する。発達障がいの子は一人でいるほうが楽。どうかかわっていいかわからない。働いている人たちは共同体だろうか？ちゃんと他者だと思っていますか？わかってもらっていると思って、知ってるよね。って感じのなれ合いになっていないか。相手を大事にしていないところから始まっているから。

12　自分と地域を正しく認識し、住民意識を持つ

・住民意識→今まで日常だったイベント　自分が住んでいる意識は何か。ここに住んでおっちゃんに服をもらっている。働いて　受け入れられる。服は形見受けか。見ず知らずの若い人に服をやる。テクシーありがとう。４月から３か月間住んで物を介して距離感が近くなった。人の行為をありがたく受ける。住んでいるところが近くなった。

・異動を何度か経験している。それぞれ環境が違っていて、らいとぴあは多種多様な人と関わるが、いこいの家は知り合いだらけ。セカンドステージとして北芝に住む。おばちゃんたちの地域の側面を聞けたのは為になった。

14　住民自ら行動する実行力のあるコミュニティ組織を立ち上げる

・昔はあったのではないか。今はお客になっていないか。5 月 GW に保護者主体のイベントを行った。参加している PTA はやらされている？大阪の地震のあとも避難所等でご飯を食べることが増えたが、来るのは力を持っている層。本当に誘いたい層が来ない。「芝樂市（朝市）」一年間休んだ。住民はご飯を食べれないとさみしいといい、ご飯会の再開の相談があった。

17　パワー化（力を発揮する）－結集した力が変化をもたらす

・放課後デイの卒業イベントを通じて、初めて行ったが、いろんな方々に協力いただき、声かけし、行ったことで、結果的にいい空気を生み出すことができた。組織にもいろんな特技をもつ人が多く集まっているのに、組み合わせがうまくいかないため、うまく機能していないのかな？力合わせはよくも悪くもいろんな変化を生み出す。

18　人間化―人間は人間らしい暮らしをしなければならない

・ここに来る前の職場が人間らしくなかった。ここの合同会社は総菜を特定の人だけでなく住民だから活動をする、なんでもあり。で、地域の人へ場所の提供、こども世界があってよい。自分もゆるくなる。

・「人間は人間らしい」ってなんやねん？という意味で否定的な感じで選んだ。5、6 年前に世の中のこと知らんことに気が付き、貧困差別がリアルになる。「人間らしい」とは、「ちゃんとしている」という、その五角形で例えると、へこんでいるところがあったら人間らしくないみたいな。解釈。5 角形の項目は聞いていません。

22　コミュニティ組織化は住民自身の利害関係から出発する

・社会課題や生活をよくしたいという思いは、必ず、利害関係が発生する。もしくは生活をおくるうえで利害関係は避けて通れない。水利組合、し尿くみ取り組合など

41　日常的な地域生活課題のための組織化

・教育を担当している。小さな困りごと（例：宿題をさせる力がない・一緒にできる力がない）→授業に入れる→住民の困りごとを解決するのにグループを立ち上げる。先生はまわりできく（役割が返還するクルクルクローゼット）、おやおや探知機：ちょっとしたことでも気が付く。支えるだけではなく、支えられる。自分たちの感覚でできることを大切にする。

４）ＣＲＴＰメンバーの気づきメモ

永坂）

・まず驚いたことは、メンバーだれもが、地域のことを意識していること。住民の表面的なことだけでなく、深層意識までもくみ取ろうとする視点だった。若くても、経験が違っていても互いに認め合い、知る限りの中でカバーし合える仲間意識であった。一つの例に、グループワークの最初にある職員が A4 用紙に名前とニックネームを書いて、はじめて会う私にわかるように常に持っていてくれた。人に対する優しさゆえの、組織に対して違う面からの不安を持っているのではないかと感じた。古着をもらっている人、これまで人間らしい生活をしてこなかったという人、教育を担当で福祉はわからないという人がいたが、これまでに聞いたことがないような福祉の視点を備えていた。

・豊かな彼らの感性は、確かにこの地域の歴史が彼らの意識を変えていったのかもしれないが、それだけであろうか？さらに深く知りたいと思う。

岡本）

・ひとり 10 分の「カードの共有」時間は、「長いなぁ、まだある」という声が聞こえてきたが、グループの協力で一定の語りがなされた。語られる実践の幅や深さについては、職員の経験や日常的な業務によって差異があったようだが、ＣＲＴＰメンバーがグループにいることによる非日常性が一定の効果を生み出したのではないかと感じた。

・理事長が「1 章は、北芝だからこそ取り上げることができる内容だと思う」と述べられたことが、印象的であった。コミュニティ運動ど真ん中のカードを取り上げる人はなかったが、コミュニティ運動が達成するもの（9～10）が多く選択されていたということから、理屈ではなく「身にしみている」実感があるのだと感じた。

・事後のアンケートでは、予想以上に「話合いの場・機会としてよかった」という声が寄せられた。北芝に限らず、本質的な議論の場があったとしても、その議論への参加度や発言度には自ずと差が出やすい。議論が核心に迫れば迫るほど、年数や経験や自信が発言の多少に左右してしまうことがある。ワークショップでは、「10 分はあなたが主人公」という制約があり、それぞれが何かを絞り出す時間を持つ。またＣＲＴＰメンバーという外野がいることで、非日常性が出る。どちらが奏功したのかはわからないが、ふだんとは違う表情や発言が互いに垣間見られたことが、新鮮に感じられたのだろうか。

宇城）

・５グループ、１人ずつの発表に加わらせていただき、ファシリのタイプを考えてみました。大きくわけると、寄り添い型と引き出し型がありました。

・寄り添い型：　ご自身のご経験をまじえながら、その意義をわかりやすく解説、発言者の言葉をくみ取り、言葉にならない思いや経験の意味づけ、発言者の言葉を否定せず、共感することでさらに会話を広げる。

・引き出し型：　参加者の言葉が詰まるときでも、新しい切り口からその人の言葉を引き出す、明確な質問意図で、発言者が答えやすい質問で言葉を深化する。

・皆様のご経験・ご経歴が垣間見られるファシリで、とても勉強になりました。もちろん、どの形がいい、というものではありませんが、たとえばグループの討議が行き詰まりそうになったとき、ファシリの立ち位置や問いかけ方を変えることでまた新しい討議が生まれるのでは、と考えます。

山本）

・同じカードを選んだが、エピソードがそれぞれ異なっていた。

・支援者であるのか？住民であるのか？疑いながら、地域に入り込んでいる

・カードのそれぞれが断定的な表現で記載されている。

・テクニックはトレーニングでは身につかない。

・住民と北芝のスタッフ間にずれが生じているのでないか？

（3）第 2 回のリフレクション・ワークショップ

1）ワークショップから選択されたカード

第 3 章「コミュニティワーカーとは」のカードを用いて、6 グループ（27 名）でワークショップを実施した。第 3 章の小見出しの中からは、Ⅱ～Ⅴのカードに絞って用いた。

カードの選択においては、前回と同様の形で進められたが、カード内容についての違和感を含め、グループで話し合ってみたい内容という選び方も示された。

その結果、選ばれたカードは、以下の表 4 の通りである。

表 4　第 3 章「コミュニティワーカーとは」において選択されたカード

第 3 章の内容	カード（小見出し）の番号・内容	27 名（100%）	
Ⅱコミュニティワーカーとは誰か？	5：住民が住民意識を持つように介入する人である	2	6（22.2%）
	6：住民自ら行動するように支援する人である	2	
	8：住民がコミュニティ運動の価値を内面化できるように媒介する人である	2	
Ⅲ持つべき哲学	9：社会は常に変化する	1	5（18.5%）
	10：コミュニティが社会を救う	2	
	11：住民には自ら解決する力がある	1	
	12：ワーカーは前面に出ない	1	
Ⅳ基本的な役割	13：住民と話し合う	1	4（14.8%）
	14：コミュニティリーダーを見出し養成する	1	
	15：住民とともにコミュニティ組織を立ち上げる	1	
	16：コミュ運動のビジョンを作って活性化する	1	
Ⅴ基本的な姿勢	17：住民に関心を持つ	3	12（44.4%）
	18：住民の状況に関心を持つ	2	
	19：住民が自ら行動するまで待つ	2	
	20：私欲を捨てる	5	

選択されたカードの内容をみると、「Ⅴコミュニティワーカーの基本的な姿勢」が最も多くの人によって選ばれた（44.4%）。なかでも、「20：私欲を捨てる」については、違和感を感じる人が多く、気になるカードとして選ばれていた。いずれにしても、ワーカーとしての基本姿勢について、多くの人の関心が示されている。

2）各グループの発表及びＣＲＴＰのコメント

	グループ発表	ＣＲＴＰメンバーのコメント
1 Group	・「コミュニティが社会を救う」？！は、本当か？ そこにフィットしない人もいるのでは？ ・昨年の地震　すぐに地域回り、プライベートとのバランス ・自分のクラス地域での自分はどうか？	カード（表）と自分の活動との想起の広がり、深まり 住民のつぶやき→展開どうなるか楽しみ 災害を考えることは地域福祉を考えること
2 Group	・昔と今の北芝実践は変わった？ おかん世代…苦労している人を支える この人たちの活躍する場 人材育成ずっとテーマ ・「社会は常に変化する」 住民である自分の意識 社会、地域、そして自分も変化 ・「あるべき」「思い込み」にこだわらない	住民である自分、職員である自分、運動家である自分が共通して見えてきた。 グラデーションがある（垣根・役割への意識）。 不利益が顕在化しないと人は動かないものでは？ ＝行動の動機 私欲は（みんなで）シェアするもの
3 Group	・このワーク好き ーカード選びで「自分の思いが出てくる」 ・フリートークではなく、「自分の番」で話すことができる	この本すごい！という第１印象、目からウロコ！ コミュニティワーカー像 北芝では「揺らぎ」のある存在 Ex）濃淡あってよい 自分も居場所見つけてよい 「コミュニティワーカーはリーダーに見いだされて養成される」
4 Group	・ふだん、話しにくかったことに触れられた ・北芝の働き方のグラデーションがある ⇒北芝にとって必要な人材にいてほしい 自分の働き方や立場、役割へのプレッシャーを超えて、多様な働き方を認め合えるチームに	北芝的カードの裏面づくりが可能ではないか
5 Group	・カードを通して北芝への思いを共有 「コミュニティは世界を救う」 ・つぶやき⇒次の展開を住民と一緒に考える ・北芝らしさと日々の業務を振り返れた 「住民と一緒に」はどういうことか見つめ直したい、次世代へつなぎたい	カードを「北芝だったら」に置き換え、その思考過程こそ、リフレクション。 ごちゃまぜ（住民・スタッフ）
6 Group	・北芝好きやな～ ごちゃまぜ・多様性・混沌⇒皆な共通 「私欲を捨てる」減私奉公？！→ちがった	北芝ってどんなとこ？！ 楽しさ、おもしろさが伝わってきた 「育てられ感」がある «やりすぎ»ケースバイケース 仕掛けチャレンジ大切（椿）

３）職員によるカードの解釈　－グループワークの記録から

05　住民が住民意識をもつように介入する人である

・「住民意識をもつ」とは何か。コミュニティ活動に参加しなければ住民意識がないのか？そこに暮らしていれば住民。私は自分が暮らす地域の活動にいまは参加していないけど、住民だと思っている。わざわざ「住民意識を持つように介入」とは、問題意識をもつように介入するということか。「介入」という言葉も上から目線に感じる。住民みんなが同じ方向、同じ温度で物事をみるというのはかえって怖いように思う。グラデーションが当たり前なのが地域というとらえ方が大切ではないか。

06　住民が自ら行動するように支援する人である。

・違和感ではなく、まさにこれをやっている。芝樂市をやっている。スタッフの負担が大きかった。仕事としてだけでなく、ボランティアとして関わっていた感がある。10 年目このままでいいのかと気づいた。しんどいと楽しいが交錯している。スタッフでやり過ぎということになり、1 年休んだ。住民からはやってほしいということで、話し合いの場を作った。みんなで作る「芝樂市」となった。住民も汗を流す。市を出してくれる人を今までスタッフが探していたが、住民も来てくれる人を探すことになり、自由に参加してくれる人が増えた。参加者が広がった。朝一モーニングを若い親たちが動いてくれるようになった。

08　住民がコミュニティ運動の価値を内面化できるよう媒介する人である

・「内面化」とは何か。住民が内面化・・・。子どもたちと一緒に野外活動に行こうと保護者が思い、その企画づくりに一緒に入る。自分たちの子育てだけでも大変なのに、コミュニティみんなで企画をして実行する。周囲にも協力してもらって何とかしていく。それを応援しているのが私たちかな～。夜ごはんに困っているって子どもらは言わないけど、子どもの様子をみて大人が感じるのも内面化することかな・・・。内面化って普段つかわないから・・・。

・ワーカーが仕掛けて住民が乗ってくる形が多いが、ワーカーが先導するばかりじゃなくて、こうやったら社会がよくなるよっていうのを実感し、みんなでしていくのが理想である。住民にとって日々の暮らしがまずは大事だが、そのニーズの重なるところから、何か一緒にやること、動く事が価値があるということを無意識に実感する。そうすると、次は住民が仕掛け側になっていく。　活動を仕掛ける＆仕掛けられる構図をどう替えて行くか。経験を一緒にすることで、最終的には「こういうことが意味あるんだ」と実感して動く人が増えると、暮らしづくりネットワーク北芝の存在意味。あるいはなくなっても、住民がそういう活動をしていくことになるのが理想。その点で、住民と一緒にやったことのリフレクションも必要かも。やってみたことがどうだったか。自分たちが動くことで生活の何が変わったのか。それを、住民運動の中で「単語」としてじ

ゃなく、「実感」として住民がわかることが大事。だから、住民を信じてみることも大事だと思う。ワーカーたちの方向に持っていかない。「何が起こってもOK」みたいな姿勢は大事かも。

10　コミュニティが社会を救う

・よい意味ではOKなのだが、すべてではない。コミュニティに属さない人や、入りたくない人、入れない人は救われないのか？集団になると、排除があったり、同調圧力があり、ワーカーはコミュニティを超えて動く。コミュニティの考え方もバラバラ。意味が違う人と話すときに、食い違いが生ずる。人と人との関係性の中で、信じすぎると・・・たとえば、昨年の災害時に、家族を抱えている職員は、家族と家にいるか？ここに来るか？いろいろ葛藤があった。家族・家庭を見放して、コミュニティワークをするべきか？

13　住民と話し合う

・田んぼのおっちゃんと話していると楽しい。1時間でも話せる。地域の話とか、つながりも見えてくる。自分は、住民と話すことが好き。仕事の時間は気にならない。

14　コミュニティリーダーを見出し養成する

・全体的にこのテキストがワーカー養成のための本ということもあってなのか、「上から目線」に感じる。このカードも、「コミュニティワーカーはコミュニティリーダーに見いだされ、養成される」という表現がフィットする。経験豊富なリーダーと呼ばれる人との関係で、つめられたり、のまされたりしながら、育ててもらう。今でも、足を運んでキーマンにたたきあげられている。そもそもリーダーは養成されるのか。地域の教育力の循環ではないか。相互に育ちあう。

15　住民とともにコミュニティ組織を立ち上げる

・これを北芝がやっていると思っていた。つぶやきを拾って一緒にやっていると見えていた。つぶやきを拾うことは、これが大切。自分たちがやりすぎるのではなくみんなでやっていくと言う形がよい。やっていることを保っていこうとすると新しいことができない保育所の親たちの活動や、やり方を変えた。継続を意識すると何も変わらない。場か人が変わることで変えられる。

17　住民に関心をもつ

・どう入り込むか。どう関心を持つか。北芝がいろんなことをやっている中で、私自身はどこに関心を持つのか、ふわふわしてやっている気がする。子どもと関わる中で、住民の特性等を掴んでいた方がいいなと思いつつ。コミュニティワーカーということを考えた事があまりない中で、住民（自分も住民）とどう関わるかのバランスが、まずできていない。関心を持つというのは、初期段階と思うけど、そこでストップがかかっている気がする。関心を自分から持っていく前に

いろんな情報が入ってきて、先入観も出てくる。自分の立ち位置をどこに置いたらいいのか、どう関心を持ったらいいのか、というのが、流れているんだろうなという想いが日々ある。

・最初は生活のために割り切ってやっていた。のちのちアイデンティティになっていった。対象者にとって意味のあることだとフィードバックがあった時に、自分のライフワークと、地域にとってのニーズが合致することがある。自分がこの地域でできることはこれだと、はっきりとしてきた。自分が働いている認識がはっきりしてきた。

・石巻から来た時点で、地域の人間の顔ががらっと変わっていた。（５年間）自分の中で情報をアップデートしないといけないと思った時に、このカードを考えないといけないと思った。ここがなければ、他のこともないかなって。前提として自分が関わらないと。石巻にいたときも、ぽーんと入って、「あがらいん」(施設名)自体のコンセプトもわからないまま、住民と直接関わる事もないまま、そこにアプローチをするのは難しかった。そのとき、まずはどういう人がいるのか、ちゃんと顔を知らないと始まらなかった。たまたま仮設に入ってきた救急車の対応をしたときに、住民とつながりズブズブの関係（いい意味で）になってはいった。そこがはじまり。

18　住民の状況に共感をする

・肯定的に選んだ。実際の活動事例として、団地に住む高齢者男性のトラブルに対して、男性の心情に共感しながらどうしてこういう行動をとるのかを考え、また迷惑をこうむっているという住民の気持ちにも共感し、どちらの立場もわかって、高齢者男性にも、住み続けていけるようにコミュニティを構築していった。誰もが、いつそういう状況になるかわからないし、行動に対して否定するのではなく共感していくことが大事。そして、ある時を境に…少し良くなっていった。

19　住民が自ら行動するまで待つ

・つぶやきから始まっている。どうにかしたいをやっちゃおう。やってみたら協力者も出てくるし、コミュニティリーダーも発掘できる。とりあえずやっちゃおうが、ニーズに合う。待たなかったから北芝がやってお願いされることになるし、頼られる。規約作りを頼まれたが、そもそも本人たちがすることだが、待つと言う事は難しい。職員発信でも住民発信でもある。やりすぎることがよくないこともあるが、やることは楽しい。

・イベントや居場所を作ってきたが、住民からの提案を「待つ」のは難しい。いつまで待つのか？待っていると時間ばかり経ってしまうし、待っている間何をすればいいのかわからない。

20　私欲を捨てる

・私欲を捨てるのかな・・・。人のためにだと負担感があるように思う。自分も地域の活動の中で居場所を見出したり、住民と一緒に楽しんだりするということだってあると思う。自分は子どもたちに助けてもらっていて、それで落ち着く。もちろん楽しいことばかりではないけど。自分を殺して我慢するということではないのじゃないか。自分の欲を出してもいいと思う。

・「私欲」とは何か？疑問を持ち選んだ。何を「私欲」といっているのかわからない。「欲深」？「贅沢」？「滅私奉公（私利私欲を捨ててみんなのために尽くす）」？「自己実現」も私欲に入るのか？COW になった時点で「私欲はない」のでは？私欲ではできないことだから。

・生きるためのお金や良い生活をしたいとか、「欲」は、否定できない。そうなると、捨てる私欲とは、なんだろう？組織としての私欲もあるのでは？運営するためには資金も必要。

・「ワーカーは前面に出ない」との関係から：住民を巻き込んで企画をつくる中で、自分が前に出過ぎずファシリテーションするほうがいい。ただ、後ろに引きすぎるのは、住民にコントロールされていると感じさせることもある。平場で住民のひとりのように、参加して意見を言うことも大事であり、その点で、スタッフもどんどん私欲を出してもいいと思う。前面に出ないというのは大事だが、バランスが大事だ。住民と職員が対等に意見を言い合える関係ということである。自分の立ち位置が、場面によって変わるのである。

　もう１つの意味で、各自の私欲によって、いろんな意見が入ると想いもよらない方向に進む場合もあり、そういう意味で各自が私欲を捨てるのは大事だ。コントロールしようとする欲を捨てるのは大事ということだ。

・弁当屋をしている。みんなの「あれがいい」と言うメニューを入れると弁当がよく売れる。みんなの意見を入れるとふわっとできる。忙しくなると食欲・睡眠欲がなくなる。欲を捨てないようにちゃんと生活をする。誰かのやりたいことから始まったことが面白い。歯車のように働かない。暇があれば寝ている。みんなのやりたいと言う感じがすごい。

４）ＣＲＴＰメンバーの気づきメモ

岡本）

・「グラデーション」については、地域住民とスタッフの垣根が低く、相互に乗り入れている北芝ならではの特性を指す言葉であると捉えていた。しかし、演習が進む中で、創生期に比べ広がったスタッフの幅広さ、地域住民との距離の多様化、北芝という地域との距離の多様化、仕事との距離の多様化でもあるということが伝わってきた。ともに暮らし、語り合い、運動してきた正にコミュニティ運動・組織化という歴史をふまえつつ、多様性を認め合うワーカー像が模索されているように感じた。

・2 回のプログラムを通して、このワークショップのゴールはどこなのか？第 1 章と第 3 章を通して、北芝のコミュニティ運動のプロセスと、そのなかでのスタッフのあり様についてリフレクションし深めてきたのだとすれば、当初のねらいどおり北芝の原点をふまえてこれからを考えることが帰着点だと考えた。最後のワークは、グループによっては深めることが難しかったようであるが、むしろ今後の継続的なリフレクションにつながるとよいのではないかと感じた。

・心に残った声として、2 つがある。

「北芝のコミュニティは出来上がっていると思っている人は（内外に）多いのではないか」：　たゆまぬ積み重ねがあり、一定の成果も評価もある北芝ならではの捉え方である。一方で、コミュニティ運動は終わりがないようにも思う。地域は常に変化しており、現状維持だけではうまくいかないし、合わなくなったものを維持しようとすると互いに疲弊する。一周回って、ベテラン職員さんと一緒にそんな話をするステージが来るんだろう、と感じた。

「ある事業をしていると運営の当事者であるはずの住民がお客さん的になってしまっているように感じた。名前も替え、場所も変わる、そんなきっかけを通して主体的に関わってもらえるように意識して関わっている」（途中から聞いたので、おそらくそういう内容と推察）：　地域の組織や活動は、硬直化しやすいし、前例主義や、新しいチャレンジを避けるようなリスクを持っている。思い切って看板を書き換え、組織をリフレッシュすることで、参画度や主体性の変化をねらっている実践だと感じた。「そういう考え方って、北芝では当たり前のことですか？」と聞いたところで時間切れであったが、そのスタッフにしてみれば誰に教えられるでもなく創意工夫のなかでの自然な行動だったのかもしれない。そういった行動を生む土壌や文化こそが、北芝の強みというか、実践のすごさなのではと感じた。

　スタッフ一人一人の実践に染み渡っている・息づいている北芝らしさを、リフレクションを通して互いに発見・共有することができたら、次のステージへの準備になるだろうか。

荻田）

・ワーカー自身が住民に混じっていく、相互性を重視している。「コミュニティに育てられる」、「成長させてもらっている」、「助けてもらう」という発言が印象的（援助対象化し役割を固定し

ない)。
・地域内で〝ごちゃまぜにまじりあう〟上での自身の立ち位置や役割は認識されている。
・「住民意識」や「コミュニティ運動の価値」をめぐっては、差別や人権という面で一つの目標・価値を掲げる意義はあったとした上で、今の北芝はそういう時代ではなく、小さくても、様々な困りごとを取り上げて解決に向かうことを経験していくことを大切にしているという発言があった。「怒りの組織化から喜びの組織化」という穂坂先生の言葉が思い出された。

椿)
・スタッフの方と接するのが今回初めてなので、皆さんがどのような職種で、どのようなことをしているのかが分からないままのヒアリングとなった。住民と一緒になって事業を進めていることが良くわかった。
・正解のないところで、何が良いのかわからずに進んでいくところもあると思うが、そのあたりの判断は、スタッフ間の連携で行われているのか。
・北芝のスタッフ、ワーカーがやりたいことをやればいいというのが印象的だった。収入につながる・つながらないに関わらず、日本一弱い店長はスタッフに支えられているという。
・住民を信じて待つことも大切だが、待っても終わらないこともあり、その辺のさじ加減が難しいと思った。
・現在のことを保とうとすると、新しいことができないということに共感した。自分たちの活動でも同じようなことが言える。

朴)
・グループワークの中で、北芝スタッフに「自分はコミュニティワーカーだと思うのか、あるいはなりたいと思っているのか？」と尋ねてみた。「その定義を確立できていないから自分ではわかってないけど、自分の動きをそれと言われることがあると、そうなのかと思う」、「言葉って一人歩きして、その言葉で囚われたりしてしんどくなることがあるから、なりたいかと言われたらなりたくない」、「北芝はだいぶ楽な方だと思う。働き方のグラデーションもあるし、入社の時にそんな規則もない。・・・時間はかかるかもしれないけど、自分の関わりかたを見つけられたら、大丈夫になると思う」との回答が戻ってきた。このワークショップで使っている本の中では「コミュニティワーカーは資格や地位ではない」とはっきりと言っている。今回のワークショップがコミュニティワーカーになってほしいということではないが、そのような負担感を与えている部分があると感じた。こうしたワークショップの場を通して、コミュニティ運動に向けた北芝の信念が、北芝の構成員である職員に伝わり、共感され、さらに新しく創造されることができるのであれば、充分素敵だと思う。コミュニティワーカーやコミュニティ運動等、枠にはめられるものになってはいけない。今後のワークショップ等においても、リフレクションを促すワークショップや本の使い方について、そのねらいが何かをより明確にしていく必要があると感じる。

明石）

・グループでは昨年の震災時の北芝の動きの話しを続けた。それぞれのメンバーはどうしていたかを尋ねた。独身の男性は、招集に応えたが、家庭や子どもがいる女性陣は、待機し、それぞれの思いがあった。休職していた女性も、住民という立場での避難先の苦労やその後の家庭での子どものことなどを話してくれた。グループ以外のメンバーにも、それぞれの事情があり、俗にいう、被災した地域では、職員も被災者になる。しかし、COW として、地域に安否確認やサポートに使命感を持たざる負えない状況。また、住民・生活者としての被災の苦労もあるので、北芝の職員が被災した際に、それぞれの職員がどう動けるかという話し合いをする場があるといいと思った。発災時から被災後の職員の事業を鑑みての活動の仕組みを作る場を設けて、それぞれの事情の共有や職員同士の助け合いを確認し、また、「ワーカーとは？」というテーマで、地域力や住民一人一人の力を引き出すためのワーカーの立ち位置など話し合うことができるのではと感じた。そして、時間とともに、職員の立ち位置やライフスタイルも変化していくので、何度も確認作業をすることも必要であるし、常日頃から、自分自身でのイメージやビジョンを作っていく作業も大事だ。

・「防災学習は地域福祉（by 椿）」を実践すべく、住民を巻き込んで、職員が動けない場合は、住民自らが助け合い、地域を復興していく覚悟を持ち合わせていくことを啓発しながら、それは、カード№の 18 や 19、ほかのカード№11（住民には自ら解決する力がある）などの意味も深まっていくような気がする。毎日、平時の暮らしが、「ともに生きる力をつける」を実践していくという意識。

・「3－19：住民が自ら行動するまで待つ」の「待つ」を選んだ方には、その「待つ」ことでうまくいって、これが「待つ」ことかという体現が、まだなされていない、感触がないために、イメージがわかないのかなと感じた。もしくは、著書の中にもかかれている「成果のない日常に耐えること」（P18 ）につながるのかなとも思った。

・最後に、他の班からで出ていた「グラデーションを持つ大切さ」とともに、北芝チームが、「地域を変えることで社会を変える」という強い意志とミッションを持っていて欲しいと願う気持ちがある。住民一人一人が、人間らしい生き方とは？という問いを持った時に、社会（政治）のあり様に視点が移り、一人一人の住民が、どう生きるかという人間の生き方の原点を探る作業として、自分の意識改革から社会変革していく必要性を持つことにつながるからだ。そうして勝ち取ってきた運動が原点だということにも触れていてほしい。

（４）第３回のリフレクション・ワークショップ

１）グループワークショップでの話し合いの内容

・北芝の職員 23 名が参加し、5 つのグループ分けを行った。宝塚市社協から参加した 3 名も一緒にグループに入り、26 名の 5 グループでのワークとなる。それぞれのグループには、2 名のファシリテーターが入るようにした。

・グループワーク①では、職員が職場内で共有したいと思っている「仕事」とは何かについて考えることにした。まず、各自が普段の暮らしの中での「仕事：グレーゾーン（仕事とプライバシーの混ざり合い）：プライベート」の比率を考えた上で、なぜそのように思っているのかを共有することにした。グループによっては、仕事とプライバシーが混ざることがよいと思ったり（混ざり合いが多く出てくるグループ）や、それを望ましいと思わなかったりする等、意見の違いが現れた。日常の生活の中で、互いの「仕事」に関する考え方を共有する時間となった。

・グループワーク②では、職場内で何を話し合い共有したいのか、それぞれのグループごとにテーマを決めて意見交換した。それぞれのグループでのワークとなったため、ファシリテーターの役割に任された展開となった。

5 つのグループは、①ちっちゃいストレスを出し合う、②北芝の組織風土、③暮らしの場での働く中での人間関係、④無駄話と効率、⑤あなたの思いを受けとめるぞ～、をそれぞれのテーマとして設定し話し合った。

２）CRTP メンバーによるグループワークの記録とコメント

■　A グループ　（記録メモ：北川）

グループワーク①　　「仕事：グレーゾーン：プライベート」の比率をどう感じているか

・仕事７：プライベート６　（かぶっているグレーは３）

３は会社だけではない地域の行事への参加。これも仕事の枠の中で動くこと。地域の中での相談や運動のことは、仕事の時間でもプライベートでもある。それによって、プライベートが圧迫されているとは思わないが、満足はしていない。

・４対６　（グレーはない）

子育て中なので仕事の比重が低い。イメージでは４も仕事をしていない。これで、満足していいのかな？と思う。時短勤務なので、みんなに迷惑をかけているという感じ。地域活動は、子どもを連れているとプライベートだと思う。グレーはなし。

・仕事５：プライベート５

家に持ち帰るような仕事はないので、グレーはそんなにない。半分半分でグレーはない。実際は、もっと家族の時間を大事にして、８とかにしたいけど。プライベートに仕事があるってどういうことかがわからない。家と仕事ではモードが違うので、はっきりしている。

・７：１：２

自分のペースで仕事を決めることができるが、あやふやな位置にいると思う。つまり、いったりきたりすることが多いが、それを困ってはいない。

⇒仕事とプライベートを二分する人が多い。グレーゾーンの意味がわからない。休みの時に、地域活動に子どもを連れていくなどがそれに相当するのでは？という感じ。しかし、意外と「仕事」「プライベート」がはっきり分かれていると自覚している印象。

グループワーク②　「北芝の組織風土」について

・ファシリテーターから組織風土とは「性格」という意味があったと説明。県社協の場合は、フラットであること、安定を求めることなどの組織風土の例示があり、それに続いて、発言を促した。

・仕事をぽんとふられることが多い。自分の図り知らないところで決まったことを、ふられる。

・働きにくさを知ること。言語化とかコミュニケーションとか、そこまで考えて仕事をしていない。しんどいだろうなと思うこともある。プライベートであった辛さを出せる場があるとよい。サイボウズでの発信に頼りすぎていると思う。メールだと、見逃す情報が多い。

・会話に入らなければと思うが、すでに終わっていることが多い。自分から動いて入ったほうがいいのかどうか、迷うこともある。立ち話のような感じで、話が進むことが多い。ていねいさがないと感じる。イレギュラなことが多い。トップダウンのほうが楽だと思う。

・セクションを超えてのオーダはあまりないかも。お互いの気遣いで声をかけないことがある。たとえば、子どものいる人には、日曜出勤は外してあげたほうがいいと思っていたが、急に子どもが熱を出して休むことがあるので、出られる時は出たいと言われた。

・メールやラインだと、対話が抜ける。

・多様性とコミュニケーションについて：いろいろな思いの人が増えてきている、目的もバラバラになってきている。何を共有したいのか、何が共有できていないのか、お互いに探りあうそのやりとりが大事。

■Ｂグループ　（記録メモ：細井）

グループワーク①　「仕事：グレーゾーン：プライベート」の比率をどう感じているか

・４：４：２

自身のチームだけでは、取り組めない。だれかの手を借りないといけない。そのため他のセク

ションに「SOS」を投げかけないと人が集められない。この 1 年間、「地域福祉計画の推進」について各セクションと共有する取組(担当者の業務と結びつけられるような説明も含めて)を進めてきたが、伝わっていないと思う。伝わるための方法として、他のセクションのチーム全体に説明するのではなく、もっと小さく区切って(2～ 3 人)ディスカッションする方が良いのではと思う。その理由は、他セクションの事情(今は〇〇で忙しいから手伝えない・・とか)が分かるから。互いの事情の理解が進むと思う。

・４：２：２

発信の工夫として、「住民にどれだけ貢献できるのか」を加えることが必要。自分自身としては、他のセクションから呼びかけられたとき、「自分のこととしてとらえる」こと、受信する側に何かいる（使命感　かな）。

⇒「使命感」って何かな。「北芝やから・・・」という共通項？刷り込み？どうやら背景に「北芝やから」がありそうな感じがする。地域のおっちゃんたちからもそんな風に思われている？言われている？　受信する側は、「他人事ではなく自分事にできるか」。もし自分事としてできるのであれば、それはセンス(感性)か、スキル(能力)か？「北芝やから」という感覚・概念が気になるポイントである。

・６：２：２

他セクションから依頼があったとき、「仕事なのかそうでないのか」を考え、判断することがしんどいから、とりあえず「行ってみる」、「やってみる」。その時の「テンション」が大切。

だれに頼まれるかも大切。Ｔさんからの依頼は「断らない」。Ｔさんは自身のモデル。Ｔさん曰く「俺を真似たら北芝おわるわ・・」と。

・３：４：３

各々が違うことをしている。職人の集まり。空気を読んで動いている・・・つもり。手伝いたいけれど、していることが違うので、難しい。

・６：０：４

北芝のみなさんの割合を聞いて、「グレー」のイメージを初めて持てた。

グループワーク②　「共有（あなたの思いを受けとめるぞ～）」について

・「共有の裏側にある思い・メッセージ」について

どうしたら伝わるのか（発信）、どうしたら受け止められるのか（受信）について

■Ｃグループ　（記録メモ：鳥越）

グループワーク①　「仕事：グレーゾーン：プライベート」の比率をどう感じているか

・4：3：3　（現在）⇒　5.5：0：4.5（理想）

仕事は勤務時間の 9 時～18 時。グレーは 18 時～21 時。地区の役等業務に近い活動で、仕事づくりにもなっている。子どもをお迎えに行っても、ちょっと預かってもらって仕事をしている。

プライベートは子どもが生まれて増えてきている。コンテナが復活して、AB が混ざり合っている（グラデーション）。

・4：2：4（現在）⇒　5：0：5（理想）

グレーは、地域に住んでいるため地域行事等に多く参加していること。できれば、仕事とプライベートに分けていきたい。どうしても仕事に引っ張られてしまう。3 年目であるが、以前は 30 分かかって出勤しており、オンとオフがきっちりしていたが、北芝で住むようになってオンとオフが分けられたほうがよいかもしれない。定時部分を減らして、理想の 5：0：5 へもっていく方法もある。

・5：3：2　（現在）⇒　4：3：3（理想）

2 年目であるが、時間だけでなく切り替えがなかなかできず仕事のことを考える時間が多い。もう少し、プライベートの時間を持ちたい。グレーの 3 も楽しいので、プライベートの時間でモヤモヤすることを仕事の中で消化（ケア）していきたい。先輩へ聞きたいときに聞けないことがある。オンとオフの切り替えるコツは、読書、ごはん、生活を丁寧にしていくこと。

・5：1：4（現在）⇒　3：0：7（理想）

子どもがいるので、仕事を切り替えて生活（プライベート）を増やしていきたい。どうしてもズルズル仕事をしてしまうところがある。残業、ちょっとしたムダ話（勤務の中）、関係者飲み会がグレーの部分。子育て部分（生活）から仕事へ活かせることも多いと思う。仕事と生活は離れている。

・5：2.5：2.5（現在）⇒　4：1：5（理想）

勤務が 30 年になる。3 領域が混ざり合っている。休みでも集まりがあれば出て行ったり、記録をとったりしている。社会の問題から自分の生活を知り、自分の関りから地域へ戻すことができたときは喜びである（地域へ振り返りながら喜びを感じられる）。仕事面では定年を控えており見つめなおしたい。

⇒北芝の職員は、地域とのつながりがとても深いことが伺えた。地域とのつながりが希薄な私の思い描く「グレー」と、北芝の職員の「グレー」の描き方・考え方の違いに驚いた。「グレー」を大切にすることがよりよいものなのか、「グレー」をできるだけ「仕事」か「プライベート」に割り振ることがよいものなのか。これからの北芝の職員にとってどちらがよいものなのか、答えはでないが、自分自身と仕事を見つめなおす大切な時間だった。

⇒「グレー」だけでなく、「プライベート」からも「仕事」につながっていくというお話もあり、時間的に、「仕事＜プライベート」であっても中身（内容）的には「仕事＞プライベート」である場合も多く、満足度で振り返ることも楽しかったのではと感じる。

グループワーク②　「ムダ話と効率性」について

・ムダ話

意味がある。面白い時間―どこかへの移動するときの空間（例えば車内：生産性を求められない場、目的を伝えずに気を許せる空間）」で自分の体験や現状のことを話すことで仕事の意味が伝わる。目を合わせないで話す場―机上の横並びでなく、車という閉ざされた空間で、みんなが一方を向いているので話しやすい。自由さ―イヤなら話さなくてよいし緊張感がなく話せる、答えがなくてよい、ご飯をたべている時。

昔は、旅行や飲みに行く機会が多く、（全員）共通目標に向かって仕事をしており、家族間のことも考えたが、人数が増えてきて、制度上やらないといけない仕事も増えてきたので難しくなっている。

同僚間では、自然発生的に混ざり合って話す場が少ない。事務所内では仕事に追われて時間がなくなってきた。

喫煙所やおやつの時間もよい場となる。ムードメーカー必要（聞き役の大切さ）。

環境の大切。職場がカウンター越しに市民がいるので話せない。朝礼が義務化して型ばかりになってしまっている。楽しさが必要。

・効率

会議等が多くなってきている中、共有をどれだけ出すか。時間だけで行けば、定時（時間を決めて）でよいが、話が広がって（時間がかかって）効率に結びつくこともある。

企画前に「共有化（種まき）」することで、いろいろな視点が得られる。

事業を回すことだけであれば、業務量の把握等で効率性を上げられるが、その業務の先にいる地域住民・目的を大切にすることが重要。

悩めることの大切さ。悩まないことは何も生まれない。

お互いを思いやる心。共有できる対話。組織づくりも地域づくり。外との接触。

⇒北芝のように職員間がフラットな組織であっても業務量や職員数が増加していく中で、ムダ話というコミュニケーションをとる時間がとりにくい？とれない？ことが多く、様々な情報等の共有がされにくくなっていていることへの危機感が存在した。しかしながらムダ話から生まれ広がってくる職員間同士の思いやり・尊敬そして効率性の向上へも話題が進んでいく北芝の職員の温かさも感じられた。

⇒一見相反するムダと効率はどちらを追求しすぎても共倒れになりかねず、両輪として意識しながらバランスを取り続けなければいけない。

（5）ワークショップのアンケート調査等

1）事前アンケート調査

・北芝の組織は、多様な法人格を持っており、多重的な法人運営によって成り立っている。今回のワークショップに参加した北芝の組織は、４チーム体制（①統括：総務・企画、②地域支え合い推進室、③地域教育子ども支援推進室、④合同会社）である。毎回のワークショップでは、概ね 25～30 名の職員が参加した。

・ワークショップを始める前に、北芝の職員にアンケート調査を実施した（実施期間：2019 年 5 月 29 日～6 月 6 日）。4 つの設問について、22 名の回答が得られた。活動年数の設問①から、概ね 3 つのグループ分けにして、設問②③④とクロス分析を行った。

・「設問①　回答者の活動年数」によって 3 つのグループ分けを行うと、次のように現れる。

表 5　回答者の活動年数

活動年数	回答
11～20 年	6（27%）
6～10 年	7（32%）
1～5 年	9（41%）
合計	22 名（100%）

・「設問②　実践で転機となった、特に印象に残っているエピソード」からは、「支援対象者との関係」（8 名、36%）や「地域との関係」（4 名、18%）が多く挙げられていた。具体的には、「特定のケース（人）との関わり」、「困っているひとのリアルな声、社会問題の実感」、「地域の歴史」、「地域住民と自分との関係性や距離感」、「取り組みやプログラムの展開での成果や変化・壁」、「新たな業務、プロジェクトとの出会い」等の記述があった。

・「設問③　課題や行き詰まりを感じていること」については、個人の「仕事上の悩み」（7 名、32%）より、組織についての回答（12 名、55%）が多く挙げられている。

・「設問④「北芝」の特徴」からは、「多様性」のことを挙げた人が、12 名（55%）で一番多かった。そのほか、「ふところの深さ」、「フラットな組織・チーム」、「チームの仲のよさ」、「組織の原点」、「スタッフの自立・自主性（⇔継承、育成）」等が示された。

2）第 1 回の事後アンケート調査（14 名の回答）

・12 名（85.7%）から、概ね「話し合いの場としてよかった」という感想が寄せられた。とくに、「ほかの職員の考えに触れたこと」や、「新たな一面がみえた」など、お互いの理解が深まっ

たという内容が多い。なお、「日常的な場の必要性」、「語り合う場の重要性」、「こういう機会がない」等の指摘もあった。
・グループワークの中で「コミュニティ運動」について活発に話し合われた等を含めて、3 名からは、「運動」という言葉をあげての感想が述べられている。
・CRTP と北芝との関係や、内容の難しさなど、より丁寧な説明が必要という指摘もあった。
・ワークショップだけではなく、その後のマイカードの整理によって、自分のふりかえりが進んでいるという声もあげられている。

３）第 2 回の事後アンケート調査（14 名の回答）
・第 1 回ワークショップの事後アンケートに回答した人のうち、第 2 回ワークショップの事後アンケートに回答した人は 6 名であり、8 名は初めてのアンケートの回答者である。
・「言語化」するということの意味を考えたり、「職員同士での話し合う機会」について触れている内容があげられている。なお、仕事、業務、組織、職員同士、職場でのコミュニケーション、共有などの言葉が目立つ。

４）今後にむけて
・自分のふりかえりから言語化や発信すること、共有のための対話すること、そのことを繰り返していくことで、省察されることになる。その繰り返しという練習（トレーニング）が必要ではないかという場面が多くあった。
・北芝での 3 回のワークショップから、ふりかえりを繰り返すことの重要性が新たに認識された。ふりかえり（省察）を深める練習ができるような環境づくりのワークショップが必要ではないか。
・今後、ふりかえりからの省察を通じて自分で学んでいく環境づくりとして、コミュニティワークのリフレクションのトレーニングの場を工夫していく必要がある。北芝の中でも、そのようなことを継続して検討することが求められるのではないかと思われる。

第２章　事例によるリフレクションのトレーニング

―３つの事例を通したリフレクションのトレーニング

リフレクションのトレーニングは、どのように行われるのか。ここに、ＣＲＴＰ研究会の場で展開された事例からのリフレクションを、例示（※）として３つ紹介する。

※数回に渡る研究会の場を通じて行われたが、ここではそのプロセスを経た完成版を示す。

「１　地域づくり版わらしべ長者物語－鳩のフンから女子大生！？」は、明石市で長い間在宅介護支援センターで働いていた永坂美晴さんが提供したリフレクションの例である。永坂さんは、研究会での議論から引き出された事例の想いを、モノガタリ、コミュニティ組織化の１０段階、フローチャートという３つのツールを用いて、リフレクションを進めた。一番最初に、提示されたのがモノガタリの形式で、それをベースにコミュニティ組織化の１０段階、フローチャートづくり等に展開された。リフレクションはＣＲＴＰ研究会の場で共有しつつ何回も繰り返して行われトレーニングされていった。つまり、リフレクションは、多様なツールを用いて繰り返す中でトレーニングできるのである。

なお、永坂さんが提供したモノガタリは、『地域アクションのちから』の各章（コミュニティ組織化の各要素や段階）に当てはめるリフレクションの演習事例としても活用することができる。ＣＲＴＰ研究会では、岡本晴子さんを中心に、その例を示してみることができた。

「２　あきらめない、見捨てない コミュニティワーク」は、土佐町社会福祉協議会の山首尚子さんが提供したリフレクションの事例である。社協職員がともにリフレクションするプロセスを経てまとめられた例示であるが、事例の時系列的変化に沿って、ワーカーのつぶやきと地域住民のつぶやきが区別され、その変化がみえていることが特徴である。

「３　役割が転換・循環する「ごちゃまぜ」空間」は、箕面市北芝地区のＮＰＯ暮らしづくりネットワーク北芝の地域ささえあい推進事務局のメンバー(尼野ほか)によって行われたリフレクションの事例である。この事例の例示については、提供された事例をもとに、ＣＲＴＰ研究会メンバー（永坂、岡本、荻田、宇城）がリフレクションを促す現地ヒアリングの場を設けながら、上記の２の土佐町社協の事例で示された時系列的変化のリフレクションによる再編集も行われた。

リフレクションによって可視化される内容がある。さらにそのリフレクションを繰り返すこと（≒トレーニング）によって、可視化されるものの質は深まっていく（省察）。上記の３つのリフレクションの例示を共有していく中で、ＣＲＴＰ研究会のメンバーはリフレクションのトレーニングを経験した。なお、そのプロセスの中で、ＣＲＴＰ研究会のメンバーは、「関係性の変化」や、それに伴った「コミュニティの形成」が展開される組織化方法のポイントについて改めて気づく。

１．地域づくり版わらしべ長者物語－鳩のフンから女子大生！？－

事例提供：永坂美晴（明石市社会福祉協議会）

■物語の舞台となる地域の状況

物語の舞台は、駅から徒歩圏内に古い住宅街と公営住宅が立ち並ぶ「美晴が丘小学校」区域である。この区域には、自治会、老人クラブ、こども会、民生委員・児童委員等の地域組織の他、25 年前に結成されたボランティアグループがある。このグループでは、制度で対応しきれない通院介助やこどもの支援などを活発に行っている。

古くから住む住民同士のつながりが深く、便利で暮らしやすい地域に見える「美晴が丘小学校」区域だが、大きな課題を抱えていた。1 つは、新しく就任した公営住宅の自治会長とボランティアリーダーの確執である。もう一つが、高齢化に伴う課題だ。50 年前に公営住宅に入居した住民が一斉に高齢化し、エレベーターのない階段の昇り降りができなくなって閉じこもりがちになったり、独居や認知症、貧困等で様々な問題を抱えた世帯が増えてきたりしている。ボランティアの後継者不足も深刻だ。

この区域を担当する在宅介護支援センター（※）のＡワーカーは、個別ケースへの支援と合わせて、地域づくりにも積極的に関わってきた。特に、Ａワーカーが数年前から関わってきた地域住民による「地域劇」（※）の創作は、地域のリアルな問題を出し合い、どうやって解決するかを話し合うステップをふむことで、地域づくりを進める起爆剤になっていた。

※在宅介護支援センターとは、老人福祉法に基づいて設置される機関で、主に地域の高齢者に対し、保健、医療、福祉の総合相談窓口としての役割を担っている。

※「地域劇」はＡワーカー発案で、数年前からこの地域で年に 1 回、開催している。住民が集まる座談会にて劇のテーマと台本内容を話し合い、配役にあたった住民は演技練習を重ね、地域住民の前で披露する。

■物語の登場人物

美晴が丘自治会の会長

民間の一流企業で長く勤めていた。一年前から自治会の会長を担っている。真面目であるが、地域のボランティア活動への理解が乏しく、ボランティアとの関係は良くない。

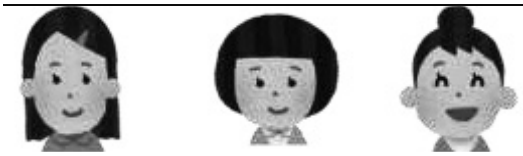
地域座談会に参加する住民

公営住宅の高齢化 70%で、自治会役員たちもほぼ 65 歳以上。
25 年前に結成されたボランティアも平均年齢 75 歳。熱心に様々な地域活動に取り組んできたが、高齢化と後継者不足で大きな不安を抱えて

大学の実習指導教員

数年前からＡワーカーの引き合わせにより、美晴が丘自治会に学生を送り、地域看護を学ばせている。

美晴が丘自治会に実習にくる女子大生たち



在宅介護支援センターＡワーカー

（１）物語スタート

１）座談会で住民から出された問題にたじろぐＡワーカー

今年も「地域劇」の台本を作成するために、Ａワーカーの呼びかけで地域の座談会を開くことになった。集まったのは、自治会長や民生委員・児童委員、老人クラブやこども会の役員、一般高齢者であった。今回の座談会は少しいつもと様子が違うことをＡワーカーは感じ取っていた。というのも、就任して間がない自治会長は、「何をさせるつもりだ」と言わんばかりの憮然とした表情で座っている。ボランティアリーダーも、自治会長の参加が明らかに不満な様子。子どもの声が「やかましい」という現自治会長の意見で、子ども支援の活動が縮小を余儀なくされた過去があるからだ。

座談会の冒頭、Ａワーカーが「地域の一番の問題は何ですか？」と口火を切ると、自治会長が「鳩のフンや」と言う。「えっ？鳩のフン？」「そうや、鳩のフンがたいへんなんや」。驚いたことに、自治会長だけでなく、ボランティアリーダーもその他の住民も、口々に鳩のフンがいかに大変かを話し始めた。

Ａワーカーは困ってしまった。福祉問題ではなく、環境問題が出てきた。この後、どうしよう…。

２）住民の声の裏側にある本当の課題

Ａワーカーは住民に聞いた。「なんでそんなに鳩がくるんですか？」「公営住宅にエレベーターがないやろ。高齢者はもう階段があがれん。高いとこには住めん。いま 500 戸ある公営住宅の 100 戸は空いている。そこに鳩が住んでフンがえらいことや」「100 戸も空いているのですか！」。

公営住宅の高齢化率は今や 70%を超える。築 50 年以上の公営住宅問題を市は改善せず、自然に入居者が減れば解体しようと考えている。鳩のフンの問題も高齢化を含む社会問題が背景にあった。ならば、と地域劇にこの課題を入れることにする。そうすると、この課題以外にも「ボランティアの高齢化」や「地域に秋祭りがないこと」「こどもの遊び場がないこと」などの声が次々に上がってきた。

３）大学との出会い

この地域では、看護学を学ぶ大学生 10 人を実習で受け入れている。Ａワーカーは、実習の説明に来た大学の先生に、鳩のフンの話をしてみた。「高齢化で人が住めなくなった公営住宅の高層階に鳩が住みつき、フン害がこの地域の一番の課題。若い人が住んでくれないかと願っているがかなわない夢」と。

すると、先生がふともらした。「うらやましいです。駅に近い公営住宅がこんなにたくさん空いているなんて。全国から来る学生は、物件がないから、仕方なく家賃の高い駅近辺に住んでいるんですよ。それで親の仕送りでは足りないから、夜遅くまでバイトをして、授業中に居眠りをするんです。ここに住めたらいいのですがねえ」。Ａワーカーは、家賃が高くて困っている学生や大学と、鳩が住みつく公営住宅に悩む地域住民とをつなげられないかと考えた。

４）夢が見えてきた

自治会長と大学の先生を引き合わせて話をすると、「そんなことが実現したらええなぁ～。やってみよう」と意気投合。しかし、県営住宅に学生が住む事例はあるものの、市営住宅ではまだない。夢のまた夢だと誰もが考えた。しかし、地域劇の様子が少し理解できてきた自治会長はあきらめなかった。「今度、副市長を呼んで、みんなで口説き落とそう！みんな、参加してや！」と、ボランティアリーダーにも協力を仰ぎ、地域の住民たちに声をかけだした。

７月には、数年前の地域劇がきっかけで開設された地域の居場所で、「赤ちょうちん」と銘打ったコミュニティ農園の収穫祭を開催した。自治会長をはじめ座談会メンバーは、大学の先生や学生、副市長を呼び、このプランを熱く語った。すると、副市長は「何とか考えましょう！」と約束したのである。

11 月には、「学生がこの地区に暮らし始める」という夢を地域劇として演じた。大学の先生や大学生も参加したこの劇は、地域住民を夢に向かって駆り立てる力となった。対立していた自治会長とボランティアリーダーの溝もいつの間にかなくなっていた。

翌年２月、夢はかなった。大学生を受け入れる協定を大学と市は結んだのである。

５）夢をカタチに－プロジェクトが始動－

ボロボロの市営住宅は見違えるほどにきれいに改築された。破格の家賃の代わりに、学生は地域貢献をすることが条件である。

そして迎えた４月。3 人の女子大生がこのまちにやってきた。地域は大喜び、沸き上がった。いかに大学生を迎えるか、地域になじんでもらうか、何度も会議を開いて住民みんなで考え、70 代後半の世話役のおばあちゃんも決まった。

６）若者と地域住民の出会いへの関わり

ある日、Ａワーカーは、学生の入居ではりきり、学生による地域貢献の内容を考えていたまじめな自治会長が、「こんなことをしてもらおうか」と女子大生にとっては少しハードルの高い役割を担ってもらうつもりでいることを知った。会議の場でも、せっかく来てくれた女子大生たちは「お客様」の雰囲気のまま。みんな、自治会長には意見が出しにくいようだが、果たしてこれでいいのだろうか。

思案したＡワーカーは、事前に学生から話を聞き、自治会の役員会で、女子大生らに得意なことを話させた。「ピアノが弾ける」「ダンスが得意」「放送部だった」。いきいきと話す女子大生を目の前に、自治会長は集会所のピアノで演奏してもらえばいいのではと言い始めた。ダンスが好きな学生は盆踊りを子どもたちに教え、放送部だった学生は祭りや敬老会の司会に抜擢された。地域と学生のマッチングである。自治会長も学生に何をしてもらってよいのか悩んでいたのだ。

学生が加わり、毎月の活動や夏祭り、敬老会等、地域はこれまでになく活発に動いている。世話役のおばあちゃんは学生とラインをし、学生から「恋バナ」（恋の相談）をうけ、「おこぱ」（お好み焼きパーティ）を開き、ピンクの服装で若々しく変身している。学生に困りそうなことが起きると、世話役も自治会長も大騒ぎしながら、その都度会議を開催する。女子大生は、ボランティアとともに「地区音頭」を復活させ、夏祭りでは認知症の高齢者から子どもまでが踊った。自治会長は、長年の夢だった神輿をみんなの寄付で手に入れ、秋祭りを復活させた。このままいくと、地区は女子大生が行き交うまちになるとみんなは妄想している。今、地域高齢化と後継者不足の話が出にくくなった。

「鳩のフンから女子大生」が生まれた「地域づくり版　わらしべ長者」、効果は絶大である。

（２）コミュニティ組織化の 10 段階にみる展開

『地域アクションのちから』のコミュニティ組織化の 10 段階（組織化に必要な要素）を参照しつつ、事例の文脈に合わせて 10 段階を再解釈して用いた。なお、ここでの組織化は、地域課題などへの人々の力を合わせることとして理解する。

表 6　コミュニティ組織化の 10 段階にみる「鳩のフンから女子大生」事例

10 段階	事例の展開
1 現場に入る ・現場の選択 ・予備調査	美晴が丘小学校区域は公営住宅が多く、50 年前に入居した住民が一斉に高齢化し、独居、孤立、認知症等の問題を抱えている。ボランティア中心に福祉活動は盛んでいたが、後継者不足が課題となっていた。また、ボランティアと自治会や高年クラブ等との関わりが希薄になる中、市が進めるまちづくり協議会の編成により、自治会長が新しく就任した。
2 住民と出会う ・関係づくり ・コミュニティ理解	自治会長とボランティアリーダーはこれまでの経験の違いから、お互いに戸惑う場面が多かった。これまで地域の活動や歴史を詳しく知らずに就任した自治会長の困惑と長年活動してきたボランティアの意識の違いが表れたのである。その中で、ボランティアがかかわってきた、地域活動の一環である「地域劇」を行うことが決まっていた。
3 組織化のスケッチを描く ・課題の発掘 ・解決案の構成	ボランティアリーダーは「自治会長に今までのことをわかってもらいたい」とワーカーに訴えた。ワーカーは、固い議論の場は柔軟な活動を伝えるには難しいと考え、この町のことを知ってもらう物語の作成に取り組むことにする。それぞれの話を引き出し、地域での役割やつながりを理解・共有するためである。
4 コミュニティリーダーシップを形成する ・場づくり ・学習	自治会長を含む住民等で、「地域劇」のシナリオ（物語）づくりのために、第 1 回の座談会を開催した。ひとりの住民が「うちの地域では鳩のフンが一番の問題や」と言い出し、座談会は他の住民も加わって「鳩のフン」で盛り上がる。福祉問題ではなく、環境問題が出てきたと思ったワーカーは困惑した。住民が何度か集まっていく中で、自治会長は○○大看護学部学生の住宅事情を聴いたり、地域の居場所に足を運んだりして、さまざまな解決しにくい課題を知ることになる。このことは自治会長のやる気に火をつけた。地域劇の座談会が地域の深刻な課題のことを考えていることを理解すると、自治会長の取り組みの姿勢も変わる。今まで参加しなかったまちづくり協議会の役員を「地域劇」やワーカーの会議に参加させ、アンケートや学校との交渉も自ら行った。
5 行動計画を立てる ・調査研究 ・計画作成	高齢者から子どもまでアンケートを行い、孤立や居場所の拡張等について意見を求めた。すると、神輿や地域の音頭の盆踊りの復活を望む意見が多数出る。これらの意見や、大学生が市営住宅に入れたらという意見も物語に反映した。さらに、実現に向けて、みんなの気持ちが一つになるように、年 1 回の地域全体の交流会で、その夢を語ることにした。住民の会議や議論では実現し難い。まずは夢をつなごうとした。
6 住民を集める ・住民との対話 ・動機付け	交流会では、女子大生を公営住宅に呼ぼうという目的が加わる。自治会長はまちづくり協議会の役員、PTA、副市長、小学校校長、大学の先生や学生、社協等に声をかけた。住民と多団体が参加しての熱く語り合う大宴会となる。これは多くの住民にとっても地域の課題と方向性を知る機会となる。行政への糾弾や要望でもなく、夢を語り合うことも可能なことだと知る。一番、嬉しそうに語っていたのは自治会長であった。
7 住民が行動する ・住民の集い ・実践的な行動	「鳩のフン」からさまざまな課題を意識付け、地域の孤立、祭り、子どもの遊び場、居場所等々の課題が盛り込まれた物語が出来上がり、住民の言葉がそのままシナリオになっていった地域劇を約 2 か月間、夜間遅く、休日返上で何度も練習を重ねて舞台にあげた。その間、シナリオは何度も書き加えられた。特に、地域劇の第 3 幕はこれからの地域の方向性を白紙から検討しながらみんなで完成させた。そして、地域は「地域劇」を絵に描いた餅にしないため、大学生を市営住宅に呼ぶための活動を始めた。
8 評価する ・成果の確認 ・フォローアップ	数か月後に市と大学が協定をむすぶ。市営住宅の改築だけでなく、家賃、世話役、入居後の世話役、地域での役割等々、地域は「わがまちに女子大生がやってくる！」と明るい情報に歓喜した。そして 3 人の学生が来ると、自治会長を始め、各団体の関係者が活気づく。しかし、地域は女子大生への期待から、学生の声を聞かずに役割を依頼しようとした。学生が自然に地域になじめるようにワーカーは学生たちの得意なところを事前に聞き出し、学生の特技と地域での役割がスムーズにつながるように調整した。このことにより、学生のやる気と地域活動がつながったのではないかと感じる。
9 省察する ・学びの確認 ・価値の共有	この活動は、地域の活動を知ることと、物語を共有することで、自治会長を中心に住民がまとまっていく過程を生み出した。人と人がつながり、夢を語り合い、力を合わせていくことで　まちに新しい関係が出来上がっていく過程をみんなで共有することで、関係性が変わり、地域の方向性が定まっていくというこれまで経験したことのない学びが自然に行われた。そして、地域劇の練習は、会議や議論と違い、誰もが同等であり、役割があり、物語を通して自分が地域の中の一員であることを認識していく、住民の学びの場となっていく。
10 組織化の持続可能性 ・ビジョンつくり	新たな地域づくりに向き合い、危機を迎えていたこの地域は「鳩のフン」から議論を避け、お互いが夢を語り、楽しみながら「女子大生」がくる過程を経験し、地域の組織はまとまっていった。ある若いおかあさんはつぶやいた。「夢が次々とかなう。次はどんな夢を見ようかしら」と。

（3）フローチャートによるリフレクション

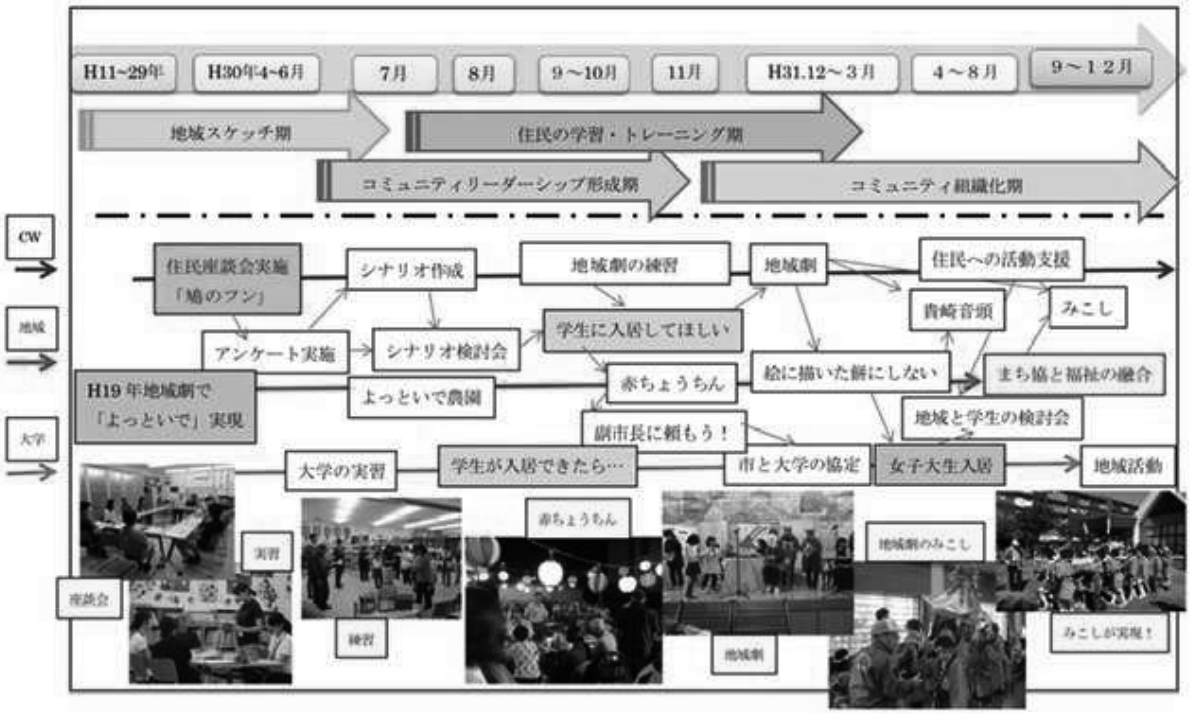


図２　時系列に沿った３主体の取り組み

フローチャートの作成においては、①時系列の展開に沿って、②3 主体（ワーカー（ＣＷ）・地域・大学）を想定し、③どのような場（座談会・よっといで・赤ちょうちん・地域劇練習・地域劇・役員会・公営住宅）において、④どのようなプログラム（座談会・赤ちょうちん・地域劇・シナリオ検討・学生入居）が用いられ、⑤どのようなプロセス（地域の関係性・シナリオ作成・地域劇までの経過・住民活動へ主体移行・学生の活動支援）が展開されたのかを示す（図 2）。

なお、フローチャートの作成においては、上記の形だけではなく、さまざまな形の工夫があり得る。例えば、図 3 は、時系列の展開に沿って縦軸のフローチャートを描いたものである。実際の現場でのプロセスは、主体・場・プログラムの関係性がより複雑に絡んでいる。そのことを示すために、縦軸のフローチャートも試された。

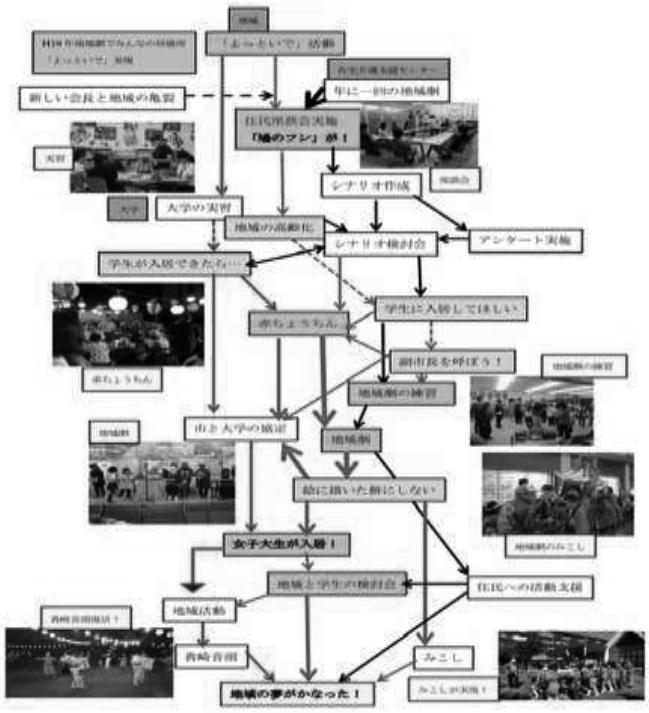


図３　縦軸の時系列に沿った展開の例示

（4）リフレクションの演習

表７　物語からのワーカーの視点・思いのリフレクション演習

ｾｸｼｮﾝ	ストーリー	ワーカーの視点・思い
0	美晴が丘小学校区は、古い住宅地と公営住宅立ち並ぶ地域である。地域では、自治会、老人クラブ、こども会、ボランティア、民生委員等が活動している。なかでも、25年前に結成されたボランティアグループが、助け合い活動を続けていて、制度では対応しきれない通院介助やこどもの支援等も活発に行っている。しかし、50年前に入居した住民が一斉に高齢化し、階段、独居、認知症、貧困等、様々な問題を抱えている。ボランティアの後継者不足も深刻な課題である。	
1	この地域を担当する在宅介護支援センターのＡワーカーは、個別ケースへの支援と合わせて、地域づくりにも積極的に関わってきた。特に、Ａワーカーが数年前から関わってきた地域住民による「地域劇」の創作は、地域のリアルな問題を出し合い、どうやって解決するかを話し合うステップをふむことで、地域づくりを進める起爆剤になっていた。	
2	今年も「地域劇」の台本を作成するために、Ａワーカーの呼びかけで地域の座談会を開くことになった。集まったのは、自治会長や民生委員・児童委員、老人クラブやこども会の役員、一般高齢者であった。座談会の冒頭、Ａワーカーが「地域の一番の問題は何ですか？」と口火を切ると、「鳩のフンや」と言う。「えっ？鳩のフン？」「そうや、鳩のフンがたいへんなんや。」「鳩のフンですか…」それから口々に、鳩のフンがいかに大変だったか、そして、それをきれいにしてくれた○○さんがどんなに素晴らしかったかと延々と話題がつづく。Ａワーカーは困った。福祉問題ではなく、環境問題が出てきた。このあとどうしよう…。	自治会長や声の大きなボランティアリーダーだけではく、これまで出会ったこともない住民の声が聞きたい。 困った！えらいことになった！ 鳩のフンは環境問題で、地域劇のネタにはならない。なんでこんなに盛り上がるの？
3	Ａワーカーは聞いた。「なんで　そんなに鳩が寄ってくるんですか？」「公営住宅にエレベーターがないやろ。高齢者はもう階段があがれん。高いとこには住めん。いま500戸ある公営住宅の100戸は空いている。そこに鳩が住んでフンがえらいことや」　「100戸も開いているんですか？」公営住宅の高齢化率は70%を超える。築50年以上の公営住宅問題を市もあえて改善せず、自然に入居者が減れば解体しようと考えている。 鳩のフンの問題も高齢化を含む社会問題が背景にあった。ならば、とＡワーカーは地域劇の中にこの課題を入れることにする。	そうか！階段があがれない、降りられない。いつも聞いている相談だ。 公営住宅に申し込んでもなかなか入れないのに、100戸も空いているのはおかしい。 新しい自治会長はこれまでの福祉活動者とまだなじんでいない。福祉だけでなく新たなテーマがあれば、地域になじめるのでは？
4	この地域では、看護学を学ぶ大学生10人を実習で受け入れている。Ａワーカーは、実習の説明に来た大学の先生に、鳩のフンの話をしてみることにした。「高齢化で人が住めなくなった公営住宅の高層階に鳩が住みつき、フン害がこの地域の一番の課題。若い人が住んでくれないかと願っているがかなわない夢」…と。すると、先生がふっともらした。「うらやましいです。こんな近くに公営住宅がたくさん空いているなんて。全国から集まった学生は、家賃の高い駅近辺に住んでいる。親の仕送りでは足りないから、夜遅くまでバイトをして授業中に居眠りをするんですよ。ここに住めたら…」Ａワーカーは、家賃が高くて困っている学生や大学と、鳩が住みつく公営住宅に悩む地域住民とをつなげられないかと考えた。	もしかすると、地域とのつながりのある大学に声をかけると何とかなるかもしれない。 両者をうまくマッチングできたらいいな
5	両者に話をすると、自治会長も先生も、「そんなことが実現したらええなぁ～。やってみよか」と意気投合。でも、実際には県営住宅で学生が住むという事例があるものの、市営住宅ではまだない。調べてみると、県と協定を結んだ難しそうな書類が住民の前に出てきた。しかし、自治会長はあきらめなかった。「今度、副市長を呼んで、みんなで口説き落とそう！みんな、参加してや！」	この自治会長、なかなかやるな
6	この地域では、これまでも幾多の課題を地域劇の台本に落とし込み、皆で解決方法を考えて、実際に取り組んできた。今回も同じようにやってみようと考えた。大学の先生も参加した地域劇の座談会、台本づくり、大学生も加わった劇の練習を進めた。	この課題をみんなで話し合って、取り組んでみよう
7	7月には、みんなの居場所「よっといで」で「赤ちょうちん」（コミュニティ農園の収穫祭）を開催し、その場で大学の先生や学生、副市長を呼んでこの案をみんなで熱く語った。副市長は「何とか考えましょう！」と約束したのである。11月には、「学生がこの地区に暮らし始める」という夢を実現させた地域劇を演じた。そして、翌年2月、夢はかなった。大学生を受け入れる協定を大学と市は結んだのである。	みんなの気持ちが一つになった。 後は、地域劇にして地域全体で共有しよう。副市長にも劇に参加してもらい既成事実にしよう
8	ボロボロの市営住宅は見違えるほどにきれいに改築された。破格の家賃の代わりに、学生は地域貢献をすることが条件。そして、4月、3人の女子大生がこのまちにやってきた。地域は大喜び、沸き上がった。いかに大学生を迎えるか。地域になじんでもらうかと何度も地域会議を開いて考え、世話役のおばあちゃん（70歳代後半）も決まった。	世話好きなこの人に、これまでの経緯を伝えておいてよかった。 穏やかで、中立的な人が選ばれてよかった
9	ある日、Ａワーカーは、地域貢献の内容を考えていた自治会長が、固い役割を女子大生におしつけようとしていることを知った。思案したＡワーカーは、自治会の役員会で、女子大生に得意なことを話させた。すると、自治会長は、ピアノが得意な学生のために、捨てられそうになっていた集会所のピアノを残し、居場所で活躍してもらうことにした。ダンスが好きな学生は、夏祭りの盆踊りを子どもたちに教える。放送部だった学生は夏祭りや敬老会の司会に抜擢。地域と学生のマッチングである。	えらいことや！ やらされ感では楽しめない、学生がいやになるかも。 得意なことを活かせるように調整したい。
10	学生が加わり、毎月の活動や夏祭り、敬老会等、地域はこれまでになく活発になっている。世話役のおばあちゃんは学生とラインをし、学生から「恋バナ」（恋の相談）をうけ、お好み焼きパーティを開き、ピンクの服装で若々しく変身している。学生が困りそうなことが起きると、大騒ぎしながら地域会議を開催する。 女子大生は、ボランティアとともに「○○音頭」を復活させ、夏祭りでは認知症の高齢者から子どもまでが踊った。自治会長は、長年の夢だった神輿をみんなの寄付で手に入れ、秋祭りを復活させた。来年も女子大生を追加して受け入れる。このままいくと、うちの地域は女子大生が行き交うまちになるとみんな妄想している。今、地域高齢化と後継者不足の話が出にくくなった。	

「鳩のフンから女子大生」につながる物語から、ワーカー（永坂）のリフレクションをどのように共有することができるのか。ワーカーとの話し合いの中で共有されることが、研究会の場を通じて実現されたが、より広く共有できる方法もあるのではないか。そこで、物語となったリフレクションの事例を共有する方法が模索された。

その一つが、リフレクションの演習事例としての活用である。表 7 で示しているように、物語の内容を、いくつかのセクションに区分し、そのときのワーカーの視点や思いを、自分の経験から想像しリフレクションしてみることができる。

なお、本の小見出しを用いて、物語の内容に当てはめてみることができる。例えば、本の「第３章コミュニティワーカーとは」や、「第７章コミュニティ組織化のスケッチ作成」の小見出しをセクション区分した物語の内容に当てはめる。その一部の例を示す（表 8）。

表 8　本の各章の小見出しを活用したリフレクションの演習（例示）

	物語（ストーリ）	３章ｺﾐｭﾆﾃｨﾜｰｶｰとは	７章ｺﾐｭﾆﾃｨ組織化のｽｹｯﾁ作成
3	ワーカーは住民に聞いた。「なんでそんなに鳩がくるんですか？」「公営住宅にエレベーターがないやろ。高齢者はもう階段があがれん。高いとこには住めん。いま 500 戸ある公営住宅の 100 戸は空いている。そこに鳩が住んでフンがえらいことや」「100 戸も空いているのですか！」。公営住宅の高齢化率は今や 70%を超える。築 50 年以上の公営住宅問題を市は改善せず、自然に入居者が減れば解体しようと考えている。鳩のフンの問題も高齢化を含む社会問題が背景にあった。ならば、と地域劇にこの課題を入れることにする。そうすると、この課題以外にも「ボランティアの高齢化」や「地域に秋祭りがないこと」「こどもの遊び場がないこと」などの声が次々に上がってきた。	05 住民が住民意識を持つように介入する人である 09 社会は常に変化する 18 住民の状況に共感する	05 コミュニティ組織化のための課題を選択する 08 コミュニティリーダーの発掘計画を構想する 09 住民の意識が成長し、力が発揮できるようにする 14 組織化のための課題を選択し、目標を立てる
5	自治会長と大学の先生を引き合わせて話をすると、「そんなことが実現したらええなぁ～。やってみよう」と意気投合。しかし、県営住宅に学生が住む事例はあるものの、市営住宅ではまだない。夢のまた夢だと誰もが考えた。しかし、地域劇の様子が少し理解できてきた自治会長はあきらめなかった。「今度、副市長を呼んで、みんなで口説き落とそう！みんな、参加してや！」と、ボランティアリーダーにも協力を仰ぎ、地域の住民たちに声をかけだした。	06 住民が自ら行動するように支援する人である 12 ワーカーは全面には出ない 14 コミュニティリーダーを見出し養成する	06 コミュニティ組織化の目標を立て得る 10 コミュニティ組織化への信念が感じられるようにする

こうした作業を通じて、リフレクションを演習することができるし、それをもとに意見交換を行い共有することができる。つまり、リフレクションが一人作業で終わるのではなく、共有する作業として展開することで、省察が深まるということである。そのためには、一人作業のリフレクションをどのように共有するかといった、リフレクションした内容の「みえる化」が課題となる。ここで示している一部の例示は、さまざまなリフレクションの共有作業である。

２．あきらめない、見捨てない コミュニティワーク　ー限界集落における CW

事例提供：山首尚子（土佐町社会福祉協議会）

全国各地の町が「過疎高齢化」を課題としあらゆる施策を展開しているが「コミュニティ」の真の実態をみつめて、再生に向けたワークに価値を見出している町は少ないのが現実ではないだろうか。

「地域で支える」という言葉が、安易に使われる場合が多々あるが、容易なことではない土佐町社会福祉協議会は、地域のかかわりが減退していく中、廃校となった旧小学校区におけるコミュニティワークを実践し、地域に入り住民と共に悩み活動を続けてきた。

コミュニティ再生に取り組み１０年、いわゆる限界的な集落が紆余曲折ありながらコミュニティを取り戻した時、地域から疎遠になっていた方々を受け入れ始めたことが嬉しい変化である。

小さな活動を積み上げていく事で、「地域で支える」ということが具体的に見えてきたことが、社会福祉協議会のＣＷとしてのやりがいを実感できた。

CRTP（コミュニティワークリフレクショントレーナープロジェクト）においてそれぞれのワーカーがどういう思いで、どういう悩みと向き合って来たのか、また住民とのやり取りの中から、何が生まれ、どう育ってきたのかを振り返ることが出来た。

地域力が低下し、リーダーの存在や地域活動を担ってきた人材が次々と病気や老々介護でリタイヤしていくような状況は、ここ数年一気に加速している。

住民の主体性を引き出すには、人口が減少した地域福祉のフィールドとしての条件は過酷になるばかりである。しかし、意図的なアプローチを継続的におこなっていくことで、ふと住民がつぶやいた言葉が動きに代わっていく瞬間がみえてくる。

言い換えれば、意図的アプローチと内発的な力が接点をもつためには、継続的に地域に寄り添い、アプローチのタイミングを逃さないことがポイントとなっている。

写真　三集落合同の花見や敬老会が始まった A 集落

ワーカーのつぶやき	集落の時間的変化	地域のつぶやき
●冷たい空気の地域に入るのがなんだかしんどい ●わたしが育ったところへの愛着を感じるし恩返しがしたい。過疎高齢化、限界集落というような言葉にワーカーが翻弄されすぎていないか。もっと単純に考えることで、喜びの瞬間をつくりだしていけるのではないだろうか。 ●学校のあとをどうするかを一緒に考えて行くことで地域福祉ができたらいいなあ ●この人たちは、地域のことは、議会議員や、地区長を通じて行政に要望するという道しか、無いと思っているのではないだろうか。 ●社協は、地域福祉をやってるようでやっていないのではないか。本当の意味で地域に入れていない。 ●議会議員が、「地域を良くしよう！」という話し合いに価値を感じないとは、職員の仕事の意味もわかってもらっていない（落胆） ●社協職員に対する対応がかわってきた話を聞いてくれる	▼2003 年第 3 次地域福祉活動計画における、座談会に入り始めたころ、大学生がフィールドワークである地区に来て、住民との意見交換を行った。 若者と言える世代は、その集落にはいなかったが、その日の住民の顔は笑顔がいっぱいだった。 　また、ALT の M 氏が日本の集落に興味をもち、ある集落に連れていった時、高齢の男性らが、目を輝かせて地域の歴史を 話して聞かせ、 ▼小学校統合に伴い地域の閉塞感が高まってきた中、2008 年 4 月　土佐町社会福祉協議会「以下社協」は第 4 次活動計画策定にあたり、旧小学校区のミュニティを再生することを目指した。 ▼2009 年より活動計画策定のため座談会を実施し旧小学校区でのコミュニティ再生に取り組みを始め、学校区ごとの座談会を開催していた。これまで、T 地区には防災に関する座談会や、老人クラブ活動支援のため地域に入り、住民の方々と接することはあったが、地域づくりについて真剣に向き合うことは出来ていなかった。 ▼2010 年 4 月第 4 次地域福祉活動計画を策定。T 地区は小学校がかつてあった集落であったが、規模も小さいため、大きな M 地区と一体化した座談会を開催することとしていた。 座談会の説明を地区長会で実施したが、M 地区の地区長と議員から、「そんな会をしても無益！」という声があがり、活動計画を議会議長を通じて真剣に考えているということを訴えた。 ▼2010 年より活動計画の推進にむけ旧小学校区に入るとともに、同年 9 月～あったかふれあいセンター事業がスタートしたが T 地区にはまだ入れていなかった。 ※学校区におけるコミュニティデザインが見えてきた。	●今日は高齢化とはいわれない 若い者は、おらんけんど、 地域のことを真剣に考えてくれる若者がおることが嬉しい。 ●いままで俺らあが先輩から引き継いで、地域を守ってきた話をこんなに話して聞かせる人がおらんかった。 ●学校がなくなって地域がさびれる、寂しくなる ●どうせ　おんしらあ（あなたたち）は事業がおわって予算がなくなったらぱたりと来なくなるんじゃろうが ●T 地区は、行政から（やしべられた（軽くあしらわれ）地域じゃ。誰も真剣に入ってこない ●また　行政のおんなじような会じゃ！こんなことやったち無益じゃ

ワーカーのつぶやき	集落の時間的変化	地域のつぶやき
●この地区の思いや現状をシートに書き込み、初めてこの地区で、将来にむけての話ができ、向き合えた感があり、仕事が楽しいと感じた ●はじめて、住民の声を聴いた気がした。 話し合いがいよいよはじまった！！　やった！ ●地域の人々が集って話す内容は、地域の昔のできごとや民話だったり、地域を知ることはこういうことなのか。 知らぬ間にわたしたちは「おとしより扱い」をしていたのではないか ●支援金は、地域で話し合いを始めるための、いい試金石となったけれど、地域支援金（助成金）をこの時点で、出したのは本当に地域のためになったのか	▼2012 年あったかふれあいセンターにおける住民の主体的な取り組みを目指して、T 地区にアンケートを実施し、「我が集落」ならではの意見に向き合っていくため、ワークショップ形式で T 地区の好きなところ、ここで暮らし続けるために何が欲しいのかなど、話し合いをすすめた。この地区にとって初めてのワークであった。各旧小学校区として T 地区を M 地区の領域からはずした。 　また、全地区に年 2 回は座談会を開催していく事を目標にし、足をむけ同じ目線で話をしていった。地域の声を真正面に受け止めるため、学校の愛校作業（草刈り）やイベント等にも出かけ、地域との信頼関係をつくっていくことに努めた。 ▼「地区で暮らし続けて行くために」をテーマにワークショップを重ねたが、依然として地域づくりは自分たちがすることではなく、役場がすることという意識も根強かった。過去を嘆いていたが、先をみたワークショップをはじめてできたことが大きかった。 ▼あったかふれあいセンター担当の CW は地域の事はほとんど知らず、投げ込むかたちしかないのが現状であった。しかし地域の方々は、堰を切ったように、地域の話を聞かせ、地域の事を教え始めた。そこで、CW は地域の昔話を聞き取り紙芝居にして絵を住民が塗り絵をして完成させ、小学校に読み聞かせに行ったり、福祉大会での発表をするなど、発信ができるようになってきた。昔の話を聞かせることが、形となり、取り組みとして表現できたことは、「活動」が見え、住民にとって実感できるものとなった。 ▼2015 年第 5 次地域福祉活動計画策定 ※４次は社協主導であったので、５次はもう一歩次にすすめたい ▼2015 年 1 月 T 地区懇談会において、地域づくりを進めていく団体組織の立ち上げにむけた協議をし、社協の地域支援金を活用して事業を進めて行くこととした。この頃になると、T 地区の住民は、これまで意見をいうことを遠慮したりしていた方も其々の発言をし始めた。	●T 地区は M 地区にいれられても、しっくりこない やっぱり私たちの集落だけで話し合いをしたい ●それでなくても地区長はなにもかもしなくてはいけない。応援をするが、続けて行くのは困難 ●いったい、何をやっていったらいいのかわからん みんなあの負担ならんようにしたい ●地域福祉活動は、やらせられているみたいではないのか。本当にやってみたいことなのか ●リーダーはがんばってくれているが、私たちがやりたいことはこんなことじゃないもっと自由にやりたい ●社協さんには本当にお世話になって、有難う ぼくらあもがんばるき助けてよ ●家の事、地域の事、なにもかもが大変で疲れてきた（リーダー）

ワーカーのつぶやき	集落の時間的変化	地域のつぶやき
●リーダー役への支援が本当に大切になって来たと同時に、リーダーの熱意に対応する熱意が負ける。（正直大変）しかし、道路の事、ぜんまいの作業の事、など多岐にわたり社協は「地域活動支援センター」の機能を果たしていると言えるようになってきたなあ ●楽しいという声、やって良かったという声を地域に返していこう。 ●活動基盤ができることでこの地区は動いていけるなあ。しかし、リーダーにたよらないやり方をみんなで考えて行こう ●小さい集落ゆえの、しがらみが強いので、やりづらいなあ。あちらを立てればこちらが立たず、CW としてはどうしたらよいのだろう ●地域へのアプローチをしなかったらどうなっていただろう	▼座談会で話を進めていく中で、U ターンで故郷に帰ってきた方が、リーダー役となり、地域活動の事務局的な役割を担ってくれるようになってきた。地域の方々にとっても、この存在は大きく、これまでにない関係性をつくることとなった。 ▼あったかふれあいセンターの取組みと活動計画の取り組みを同時進行としながら、地域のコミュニティが整いはじめ、地域からやりたいこと、やってみたいことがあがるようになってきた。 そのためには、資金も必要となり、団体組織をつくって活動をしていこうということとなり、支援金や助成金を活用しよう、と動いた。 ▼2015年4月あったかふれあいセンター担当で長く地域に密着してくれていた CW が退職し、交代することとなった。これまで積み上げてきた関係性が壊れることも心配したが、地域の方々は、新しい職員を受け入れ、育てようとしてくれた。 ▼2016 年 5 月話し合いを重ねたのち「T 地区を元気にする会」が発足し、地域づくりにおいて地元議会議員が代表となり、総会において、自分たちに出来ることと出来ない事を整理し、できることから始めて行くという話し合いができた。中でも山道の整備や歴史を残していくということがクローズアップされてきた ▼2016 年新町長が進めた、役場職員地域担当制が動き始め、社協の座談会及び、地域活動に共に参加するようになった。 ※チームで地域を支援する体制をつくりたい ▼会の発足以来、地域での話し合いの上での活動、そしてその活動を地域全体に知らせていく広報活動が始まり、常に地域全体となって取り組んでいくという姿勢が見え始めてきた。また、地域の歴史を振り返るために、かつて、地域で楽しんでいたバレーボールの活動を掘り起し、インタビューを通じた記録誌を作成した。	●あそこの家にはかかわらないほうがいい、昔からいろいろあったので、安易にはいらないほうがいい ●私たちが死んだあと、障がいのあるうちの子の事をそろそろ考えはじめないと、私らも老いてきたから・・・ ●わたしらあにはどう接してあげたらいいかわからんかったけんど、普通にしたらえいんやねえ ●CW がはいってくれたからできたこと ●交流で、気の合う地域の人だけより、もっと気を使わん関係ができてきた

ワーカーのつぶやき	集落の時間的変化	地域のつぶやき
●認知症の方や、いろんな人と交流し、受け入れるという幅が広がって来たんじゃないか	▼地域において、活動ができるようになってくると、子どもたちとの交流も受け入れができるようになり、子どもたちや他の地域との交流ができるようになってきた。	
	▼地域のコミュニティ（話し合う場）が整い始め、集いへの人も増えて行ったと同時に、これまでになかった、意見の対立なども見えてくるようになって来た。	●あの家のことは昔から知ってはいたけれど、立ち入ることはできない
●排除しようとしているわけではなく、自分たちが対応できるという自信がないから、不安でありどうすればいいのかわからない	地域はこれまで、地域の中での諍いを避け、蓋をして、できるだけかかわらない、さわらないことで距離感をとってきていた。 　地域の障がいのある方の世帯も、同様、地域との距離をおきながら、互いにある距離をおきながら長い時間を経てきていた。 　Cw は地域の方から聞いた、集いに来ない人の事に耳を傾け、訪問をするようになった。	
●障がいのある子供は地域に慣れてきたけれど、親のわだかまりは消えていない。親は子供を手元から離すことに不安を	▼その際に、地域の方を連れて、声掛けをするようにしていき、はじめて地域に子どもを連れてでてきてくれるようになった。その際に、CW は親が決めるのではなく、子供が地域活動に参加したいかどうかを問うようにした。	●そろそろわたしたも、歳をとったき、障がいの息子のことを考えなあいかん年になった。
●地域のつながりを結んでいくと、孤立が見えてくる。	▼ある日、あったかふれあいセンターの前を通った男性に声をワーカーが声をかけたことがきっかけで、みんなで食事に行く、お金がなく、地域活動に参加を遠慮していたことから、暮らしぶりがわかり、今は、生活困窮者支援につながっている。	
●認知症総合支援事業を受けて、10 年とりくんできた結果が出てきている。以前は、「早く施設へ！」という声が聞こえていたのに、あたりまえにその場にいる状況が嬉しい	▼現在、ボランティアで活躍してくれていた方が、認知症となり集いに参加しているがその方を自然に受け入れている地域の姿を見るようになってきた。	●私は人に慣れていないから、出ていけないと思っていた親、今は、家でなんとかなっているから、社協にお世話になることに申し訳なさがある。
●まだまだ、つながっていないはざまにいる方との接点をつくりたいなあ 役割をつくりたい。	▼地域コミュニティが醸成してくると、一人一人を認め合い排除しない地域（受け入れる地域）ができ始めてきた。 ▼2019 年社会参加応援事業を開始し、社協の事務所にでてきてもらえる事業をスタート	

３．役割が転換・循環する「ごちゃまぜ」空間

事例提供：地域ささえあい推進事務局・尼野千絵他（NPO 暮らしづくりネットワーク北芝）

１）北芝の地域ささえあい推進事務局のメンバーによるリフレクション

■地域の概要

北芝地区のある箕面市は、大阪府北部に位置する人口約 13 万人の大阪都市圏のベッドタウンである。生活保護受給世帯の割合が高い大阪府内においては、所得水準は高く、保護受給率は府内においてきわめて低い地域である。しかし、このことが要因となって困窮世帯が点在する傾向にあり、またひきこもりやニートなどの経済的困窮予備群が潜在化（重篤化）していると考えられる（箕面市生活困窮者支援担当職員の発言）。また近隣市に比べて、就労の場が少ないことも特徴である。

この箕面市の中で北芝地区は、中央部に位置しており、約 200 世帯 500 人程の小さな被差別部落のコミュニティである。2015 年の同地区住民の生活実態調査では、ひとり親世帯、高齢者だけの世帯、低所得者世帯など生活に何らかの困難や課題を抱えている層も少なくなく、周辺地域外から移り住む困窮者も多く混住している。

■事業の概要

「なんでもやったる DAY」は、2015 年からスタートした、若者の就労体験と地域の課題解決を掛け合わせた取り組みである。月に 1 回実施しているイベントで、主に高齢者世帯への生活支援サービスを若者たちが提供する。具体的には大型家具の移動や網戸交換、買い物代行など福祉サービスでは補えない部分を仕事として若者たちが請け負う。地域の中高年男性やリタイア層がボランティアとして関わり、若者たちに技術指導をしている点も特徴である。この取り組みは、ある若者の「なんでも屋さんを起業したい」というつぶやきから始まっており、現在はイベントから発展し、一般社団法人として起業した。地域内外から仕事の依頼を受けており、社会的企業とみることができる。また、隣保館で実施している生活相談ではキャッチできない課題を発見することもあり、地域のセーフティネットとしての役割も果たしている。

■事業化の背景

北芝地域で生まれ育った当時 10 代の若者（男性）が高校中退し、「地域でなにかやりたい」「なんでも屋さんをやりたい」とつぶやいたことが始まりであった。そのときすぐには形にならなかったが、数年後、若者支援事業チームが NPO 法人内に発足し、若者たちが気軽に参加出来る事業を、ということで事業を企画した。その際、細かく事業計画をたてるというよりは「まずやってみよう」と、おおまかな事業の枠組だけをつくり、事業を開始した。若者たちには「みんな来るからおいで。ごはんはあるから」とボランティアを前面に押し出すのではなく、気軽に参加できるような声かけをした。ターゲットとした若者は主に 10 代後半～20 代前半の男性である。地区

で生まれ育った者もいれば、地区外の若者もいた。共通するのは、なんらかの生活課題（高校中退、ひとり親や生活保護家庭の出身、非行傾向など）や、発達特性やコミュニケーション課題が要因の生きづらさを抱えていることである。一概には言えないが、社会のなかで孤立したり仕事でのつまづきなどのリスクが比較的高い層だと考えられる。一方、地区内では高齢化が進み、家の中のことが自分たちだけではできなくなっている高齢者の姿があった。それらを組み合わせることで、地域の中のつながりをつくろうとしたのが「なんでもやったるＤＡＹ」である。

■若者たちの変化

ボランティアや地域の活動に関心があって参加する若者はほとんどおらず、多くの若者は友人や NPO 職員からの誘いで参加している。気軽に参加できるよう、明るく和気あいあいとした緩い場になっていて、日中の活動時間には起きることができず参加しないが、夜の打ち上げ（会食）には参加するといった若者も少なくない。「来れるならなんでもええんや」と関わる大人たちが受け入れていることが若者たちの参加のハードルをさげている。

事業開始当初から、中心的に関わっていた若者たちがゆくゆくは事業の運営を担っていくことを目指して、そのきっかけづくりを様々な形でおこなってきた。しかし、参加する若者たちはやる気に溢れる時期と、活動に参加できない時期とを不定期に繰り返す傾向にあった。地域や NPO の職員から期待をかけられるとプレッシャーに感じて参加できなくなったり、反対に期待されないと「自分は必要ない存在」と落ち込む。体調や私生活での出来事にも影響を受けやすいため、計画したとおりに事業を進めることが難しかった。そのため、個別のペースやモチベーションにあわせて事業を組み立てる必要があり、職員は試行錯誤を繰り返した。若者たちの主体性を引き出すために、助成金申請の企画段階から巻き込んだり、研修の位置づけで東京や北海道の類似事業をおこなう団体へ派遣するなどした。現時点でも若者たちには活動参加のモチベーションの波があり、比較的安定した若者たちが継続して参加する傾向にある。自分の力だけでチャレンジしたり、継続することが難しい若者たちの主体的な参加を促したいが、それには時間がかかりそうである。

■関わる地域住民

若者たちだけではスキルもないため、日曜大工などの技術をもつ地域の男性（30 代～60 代）の参加を当初から促した。彼らは自分自身や、子どもたちが地域のひとたちに育てられたという実感があり、地区の人たちにその恩返しをしたいという気持ちや、若者たちを応援したいという気持ちがあったという。若者たちや地域住民の立場に寄り添い、事業担当のスタッフとは違う視点での関係性を構築している。また、「若者たちががんばるなら」と、食事を用意してくれたり、顔つなぎで住民の家を若者と一緒にまわって営業してくれるなど、地区の女性たちも関わってくれている。

このように若者を応援するということが入り口になっているが、この事業を通して、これまで出会っていなかった地域住民とのつながりがうまれたり、長らく顔を会わせていなかった住民と出会いなおすなどの場面があった。事業スタート時から参加している 50 代の男性は本事業以外の地域のイベントに参加する機会が大幅に増えており、この事業を通して地域での役割と居場所を獲得したといえる。

また、普段はなかなか集会などには参加しない層は NPO 職員も顔がつながっていないが、同じ住民としてこの事業につなぐことをきっかけに生活課題を発見するなど、コミュニティワーカーといえるような動きを自然におこなっている。

また、事業を利用する住民（お客さん）もサービスを利用することで若者を支える立場になっているといえる。

■ワーカーの気づき

この事業はワーカーが支援者としての役割だけで入ろうとすると、うまく場になじめない。ワーカーが一方的に場をつくるというよりは、住民や若者の力なしでは事業が成り立たないためである。自分自身もひとりの参加者（住民）としての立ち位置でいることが一番自然な関わりといえる。一緒に技術を学んだり、地区の家庭を訪問して作業にあたったり、食事をともにすることで、ひとりの人間としての対等なつながりがうまれる。その関係だからこそ聞き取れるつぶやきや、見える気持ちのゆらぎなどが地域や住民を理解し、ワーカー自身を育てることにつながったといえる。

■まとめ

この事業では、若者、住民、ワーカー、それぞれの本来の役割が入れ替わることが頻繁に起きる。若者たちの気持ちに寄り添い言葉を代弁するといったことはワーカーよりも住民の大人たちのほうが得意であったりするし、若者たちも仲間たちの変化に敏感に反応しつぶやきを拾っていたりする。利用者である住民たちもサービスを利用したり、食事をつくってあげたりすることで若者たちを支えている。担い手として関わる男性たちも、若者を支える一方、この事業自体が居場所となっている。若者たちもサービスを利用する住民も、日常のなかでは「支援が必要なひと」と見られがちなひとたちだが、その役割が転換し、人を支える立場にまわる。多様なひとたちが当たり前に存在し、タイミングや相手によって立場が入れ替わる、それが地域での生活である。この事業はそういった「当たり前の地域生活」を可視化している事業だといえる。

2）ＣＲＴＰ研究会メンバーの現地ヒアリングによるリフレクションと物語作成

※以下の内容は、永坂美晴さんの編集によって作成された。

支援者の思い	事　　柄	住民の思い
若者支援 なにか事業につながらないか。 おかねは払えないが飯は食わせられる。 彼らに合う仕事がない。どうすれば良いのか？せめて、終わったあとの楽しみで距離を縮めよう。 地域の男性が集まってきた！ 色々なところと結びつくことができるのは支援者の役割	**「なんかしたいねん」と「めしくわしたる」** 北芝で若者支援のための事業を始めようと考えていた時に、高校を中退した青年 Ｙ のつぶやきを聴く「なんかしたいねん」。このつぶやきを聴いた職員の中村は、「形にするから手伝ってくれ。その代わり、飯は食わしたる」。こうして始まった「やったるでい」は、最初は手づくりのチラシをまいて団地の集会所で待っていたが、ほとんど仕事がない。仕事がなくても、その夕方にはみんなでバーベキューをして騒いだ。そして、2 回目は高齢者のボランティアグループにサロンを開いてもらい、声をかけたがだれも来ない。こんなことがあったが、若者と話をする機会が増えたころ、地域の中にいろいろな要望が出てきた。 働きだした若者から「外で同じ仕事して、飽きたらどうする？」と聞かれた。それなら、色々なことができる仕事「あきない仕事」が「あきない商い」事業になった。拠点はらいとぴあ（地域内にある人権文化センター）の前にあった倉庫。田んぼをやめた農家から格安で借りた。しばらくはこの倉庫はたばこを吸ってたむろっていた若者たちのたまり場になっていた。そこにいつのまにか地域のおじさんたちも加わり、この事業に北芝のたのもしい男性たちが仕事の加勢をしてくれるようになる。 仕事が増えて朝の集合時間に最初にやってくるのはおとなたち。その後、徐々にいろいろな背景を抱えた若者たちが集まるのである。でも、みんな素人。仕事途中にスマホでやり方を調べることは日常茶飯事。ここ数年は、これではあかんと東京にまで同じような仕事をしているところに研修に行く。これは、若者は行く先々でさまざまな関係性をつくっておいて、なにかあったとき、そこに逃げ道があった方が良いとも考えられている。	学校や仕事もしていない若者のことが気になる。 子どもたちが何か事業を始めたそうだ。どんなことをしているのか。 地域の困りごとならわしらの方がよく知っている。住民の要望は聴いてこよう。わしらのできることもなにかあるか。 この地域で若者の仕事をつくってやろう。 自分が若いころ悪さをしたときに地域は帰って来いと言ってくれた。

支援者の思い	事　　柄	住民の思い
えらい強力な人が加勢に来てくれた。 どんな人も愛する。子どもは特になつく。本当に愛情深い人。奥さんはもっとできた人	**強力な応援者現る：不思議なおっちゃん、かずゆきにい** 「やったるでい」を始めてしばらくすると、倉庫の若者にたまり場をのぞいていたかずゆきにいがこの事業に加わる。そして、一番支援者が苦慮していた仕事集めをかずゆきにいは地域住民に気軽に、やや半強制的に「これやらしてくれ」と仕事を取ってきたのである。それも、料金も「あすこからは取ったらあかん」「こっちはもっととってもええ」と料金の査定付で受注をどんどん増やしたのである。 かずゆきにいは、昔は少しやんちゃだったらしい。でも、北芝の人たちは「帰っておいで」と受け入れた。なおかつ、妻になる彼女も大切に面倒を見てくれたそう。このことを軸にかずゆきにいは地域の誰をも愛する。特にこどもたちへの愛は人並みを外れて深いものがある。常にポケットに飴をしのばせ、色々な行事やキャンプに誘うそう。 いつもかずゆきにいのまわりにはこどもが集まる。また、かずゆきにいを頼ってほかに相談に行けない住民たちがやってくる。そんなときは家にあげて話を聞き、その後北芝の職員に「なんとかしたれ」と指示したことがあったそう。若者の仕事がうまくいかないことがあっても「ええやないか、来るだけでもええ。今度、頑張れ！」と声をかけるのである。 また、若い時から同じように北芝の人たちに支えられたかずゆきにいの妻もかずゆきにいの上を行く素晴らしいひとらしい。かずゆきにいがチラシを配っても要望を出せない人たちの声を拾っていくのがこの妻の役目だそう。支援者が妻のことを声そろえて「スーパー住民ワーカー」だという。かずゆきにいはこの事業の側面で若者たちを支援する。他の大人たちのつなぎも行う。 かずゆきにいは言う。「自分が困った時にこの地域は受け入れてくれた。自分はこの地域からでられない。でも、子どもには罪はない。若者は素人や。だから、資格を取れと言っている。そして、若者が外に就職しなくてもこの地域で働けるようになることが夢だ」と。また「この地域を大人は子どもにやさしい、こどもたちが困った時に戻れるまちにしたい」という。	頼りなさそうなやつ。だけど、人は悪くなさそう。一緒にいても気にならない。でも、あいつ、大丈夫かな。

支援者の思い	事　　柄	住民の思い
いままでの支援のやりかたでは信頼関係を築けないかも。 どのように接したらよいのか。距離感の取り方は？	**もう一つの出会い：あいつが気になる：青年Ｋとやなせ** 北芝の支援者もさまざまな背景の持ち主である。北芝に生まれ育ったものもいれば、この北芝の姿勢に惹かれ就職した者もいる。築瀬はどちらかと言えば後者の方である。高学歴で力仕事よりも事務仕事が得意系の男子。 この築瀬が就職して間もないころ、ある住宅のベランダの鳩のフンの掃除に青年Ｋと行った。そのときＫが築瀬に怒った「水の流し方が違う！」築瀬は「あえて仕事ができない振りをした」と強がるが…。その日の夕方のバーベキューでＫは得意そうに「かしこくて勉強ができても仕事ができんかったらあかんな」といった。このことがあって以来、Ｋと築瀬はともに行動することが多くなった。 築瀬はいう、「あるとき、ペンキ屋に勤めていたことのあるＫがペンキを塗るしごとをしていて、他の人の不真面目な仕事ぶりをみて「遊びなのか、仕事なのか」と怒って帰ってしまったことがあった」と。築瀬はＫとフラットの関係と感じているが、Ｋは「現場仕事では築瀬より自分の方ができる」と感じているだろう。 こんなＫだが、なにかあったのか酒で酩酊してもらいとぴあの前をウロウロしている反面、こっそり築瀬の自転車を修理していたりする。築瀬が、自転車の調子がよくなっていたのに不思議がって「自転車がなおっていた」というと、Ｋが「俺がやっといた」とぽそっという。そんなＫは、築瀬のことを「あいつ大丈夫かな？」とよく心配する。また、「築瀬からは怒られない。こうしないとだめとはいわない」ともいう。 このふたりの関係は「支援する側」「支援される側」の関係を越えて、同じ地域に暮らす若者同士が互いを心配し見守っているようにみえる。支援者は、よく、立ち位置や距離感を気にするが、ひとりの人間として向き合う、こんな関係が支援には必要なのかもしれない。	

第３章　リフレクション・プロジェクトのふりかえり

１．マイカードづくり

CRTP 研究会メンバーは、研究会の場を通じた自分のリフレクションから、コミュニティワークに関連した小見出しづくりを行った。第１章で紹介したカードワークショップにおいて、参加した個々人がふりかえりのまとめ作業としてマイカードづくりを行うが、CRTP 研究会メンバーも本報告書めまとめ作業の一環として、自分のマイカード（小見出しづくり）を作成した。小見出しのカテゴリー化は、岡本春子さんと荻田藍子さんによって編集された。

Ⅰ　コミュニティ運動の理解

１．「人が生きる」原点を探る問いが社会運動の原点に立ち返る

人間らしい生き方とは？という一人一人の住民が、どう生きるかという人間としての生き方の原点を探る問いを持った時に、社会や政治のあり様に視点が移り、自分の意識が社会変革していく必要性を持つことにつながる。今までの、そうして勝ち取ってきた社会運動が、人が人らしく生きるという原点に立ちかえっているからだ。（人権と幸福権）

２．コミュニティは常に変化しており、コミュニティ運動に完成はない

「できあがっている」コミュニティはない。その特性はあったとしても固定化しているわけではなく、常に変化をしており、その時々の課題が生まれている。コミュニティに完成形はなく、住民が自らの課題に向き合い、解決をはかるコミュニティ運動が終わることはない。

３．コミュニティ組織化とは住民のチカラを結集し発揮するための住民による営みである

住民には大きなチカラがあるが、そのチカラは波のように満ちたり、時には分散したりすることがある。住民にとって大切なことを語り合い、チカラや思いを結集し発揮する器がコミュニティ組織化であり、それは住民によるていねいな営みが実を結ぶことでもある。

４．生きづらさを感じた方に問題があるのではなく、それらを取り巻く社会に問題がある

地域で起きる社会問題は、問題として認識している本人に起因することではなく、それらの問題を起因させている社会自身の問題としてとらえ、コミュニティワークを行うことが重要。また、社会問題となっている事実をとらえる見方として、大事な視点である。

５．地域社会の変化は動と静の繰り返し

地域社会が変化する時は、ニーズ、課題を発見した時に大きな力が生まれる。その力が時として、動的なアクションを起こし、静的なアクションを起こす。動的なアクションばかりであった

ら、外部への波及は起きるが、怒りとなり、冷静な判断に至らない傾向がある、静的なアクションだけであれば、外部への波及を生み出さない。

６．地域社会には、力、命、機会が常に流れている

地域の歴史と現実は、地域の流れの繰り返しである。昔から、命を守る（生活）、力を合わせる（協同）、機会（場）を作り出すを繰り返し、様々な地域課題を解決し、社会資源が生み出される。従来からある地域の流れを見つけ出すことがコミュニティワークにおいて重要なアプローチの視点となる。

Ⅱ　コミュニティワークの技術

１．省察を繰り返すことで、コミュニティワークのスケッチ作成ができるようになる

省察（振り返り）は日ごろの業務で見落としている「もう一つの現場」を探す時間と行為である。つまり、コミュニティワーカーにとっての理念や、地域の目標等を見失いがちになる日常の業務から立ち止まり、再度、枠組みを確認しながら丁寧に地域を眺め、住民の声を聞き取り、ブレをなくしていく作業が省察であり、それを繰り返すことから地域づくりのスケッチの全容が明らかになる。

２．専門職とは、地域と対話し、住民を豊かにする技術を持つものをいう

コミュニティワーカーに限らず、専門職は、地域を知ろうとする努力を怠らず、なおかつ地域の住民への関わりや対話、活動、支援、情報提供により、住民を安心できるようにさせることは、技術である。資格があるとかないとかの安易な基準ではない。その技術は、常に自ら学ぶ姿勢がなければ身につかないものである。

３．地域の座談会は住民にふりかえる機会を提供する場である

地域で開かれる座談会などで、ワーカ―はただ住民の話を聞くのではない。地域の環境や参加者の関係性を知ったうえで、さらにまだ表出されていない部分に焦点が当たるように話を組み立てていく役割が求められる。

その場の関係性に問題が見受けられれば、質問によって話や雰囲気が変えられるように仕組むことがワーカーの役割である。住民にとってふりかえりができるような機会をつくるということである。今まで見てなかった、新たな見方を引き出すことができれば、そこから地域での新しい関係性をつくる（または関係性を変える）可能性も高まる。

４．地域に入るコミュニティワーカーには、コミュニティワークのスケッチ作成が求められる

たとえば、座談会等の話し合いの場で話を聞くことに終始し、記録を書いて終わりになっていないか。ワーカーの役割としては、自分の中で地域環境や人間関係を咀嚼し、俯瞰的に眺めなが

らスケッチすることが求められる。そうすると、よくわからないところが出てくる。そこを確認するために地域に入っていく。そしてまたスケッチを続ける。

スケッチ作成は、何度も書き直しながら住民と夢を描きだす協働作業である。地域アセスメントといって用紙に情報を書いて思考停止になっていないか。地域課題といってどこにもある課題を数値化し、解決することもなく、住民の不安をあおっていないか。ワーカーにこのスケッチができていなければ地域への関わり方は定まらない。医師が診断するのに触診・聴診等の診察や検査を繰り返してから診断名と治療法を決定することに類似する。

５．個別支援と地域支援は連続線上にある

阪神淡路大震災のとき、人と人がつながって元気になる、人によって人が変わっていくことをみた。当時、地域には何もなく、ボランティアが自分たちで多様な支援をしていた。ワーカーは仮設住宅を毎日回り、1 年半経ってからみんなが出てくるようになった。そのような地域の関係性ができてから、まちが変わっていく。

ワーカーは、個別支援の限界から地域支援につながる。個別支援の対象者を「地域の中に住んでいる人」としてみないといけない。個人の支援ばかりではない。その人の周りを元気にすることが、個別支援を受ける人の幸せにつながる。そのことを住民に伝えていく中で、地域支援につながる。

ワーカーは住民の視点で考えてみる。住民の中に視線を同じくして入り、地域の生活環境などをみる。ワーカー自身の見方を変化させつつ、住民の話を引き出す。住民も話を聞いてもらう中で変わっていく。住民が自分たちで考えてやると、それが個別支援にもつながる。

専門職の支援とは異なる力が住民や地域の中にある。（制度は 3 割、住民の力が 7 割でいいと思う。）専門職は個別をみることと同じく地域をみる。

６．個別の支援と地域の支援は循環している

個別の支援を行う際に、真剣に本人の訴えを聴き、アセスメントを行うと、本人のニーズは制度やサービス等だけでは解決できないことが判明する。なぜなら、従来の個別の支援とは専門職や専門機関、サービス等の基準に当てはめることが優先するからである。本来の個別の支援とは、全人的に見つめて多角的に広域的にアセスメントされた課題に対し、一人の人の課題がみんなの課題になるように地域で話し合い、学び合いながら地域力をつけていき、お互い認め合いながら暮らしていける地域づくりのなかに含まれるものである。このため、個別の支援を行えば、地域づくりへの支援が必要になり、地域づくりが出来ると必然に個別の支援は可能になってくる。

７．地域に出る時には２つのアンテナを高く持つ

地域に出る時に「アンテナを高く持て」とよく言われる。地域に必要なアンテナとはなにだろうか？地域の情報を収集して分析する地域アセスメントのことであろうが、それだけでは足りな

い。地域の文化・環境等についてのアセスメントも必要であるが、もう一つは人の感情を伴う関係性の理解が必要である。

ワーカーは、地域の人の関係性を壊さないように入りながら、地域の文化や環境を理解しつつ、見えていない人の心理等を引き出し、新しい関係を形成する視点がなければ地域へのアンテナとは言えない。地域の文化・環境等をみる枠組みと、人の関係性をみる枠組みの二つが、ワーカーが高く持つアンテナとなる。日常的にこの二つの視点を持ちながら実践する中で、「なぜ」とふりかえりを行うことができる。

８．地域活動が断片的に記憶の中にあるだけでは、計画化まで行かない（活動のストーリ化のふりかえりが必要）

実践者（コミュニティワーカー）は印象に残るものはストーリ化している。もしそうしない場合は、活動が断片的に記憶の中にあるだけで、断片がつながらず、計画化まで行かない。

個別事例の場合、ワーカーが追いかけていくと整理できるが、地域の中での活動は、断片的にしか見ていない。起きた事や訴えによって活動するとか、イベントによって動き出すとか、断片的にしか見ていない。

９．（コミュニティワーカーは）「うず」の中にありながら地域コミュニティと社会への波及をみる

地域には、常に住民一人ひとりの暮らしの「うず」がある。この「うず」は、安心と平穏と楽しみのある暮らしづくりである。地域には、自分の暮らしだけではなく、他者の暮らしにある生きづらさからの回復や、諦めざるを得なかった夢（目標）に自分との共通性を見出し、協同・協働により「うず」を大きなうねりにする力がある。

コミュニティワーカーの役割は、「うず」をつくるのではなく、まずは地域にある大小さまざまな協同・協同「うず」を発見することである。

そして、住民相互の関わりで生まれる「うず」に巻き込まれて、うずの中から見える景色から夢（目標）を住民と一緒に描く。一方で、「うず」から離れて全体を眺めながら、住民と共に「うず」の波及を地域コミュニティの内と外に働きかけることがコミュニティワーカーの役割である。

10．地域活動を行う上で住民間の合意を得たら、まず、実践し、その後、プロセスと活動を整理することが重要

地域課題を解決していくために、試行的に行動を決めるのは個人では限界があり、点でなく、線または面的に行動を起こす上では、組織的な行動を至るプロセスは、普遍的な取組の糸口となる。

11.「振り返り」とは自分を責め、悪いことを見つけて反省することではない

ほとんどのイベント・事業の「振り返り」は反省会であって、ありきたりな表立ったところを批判することで終始してしまう。本来の「振り返り」を、「リフレクション」と位置付け、意識をもって行動の振り返り・内省のトレーニングを行う必要がある。

12. 見えない空気を大切にする

「見えない空気」が、居心地の良さを作り出している。その見えない空気を作っているのは誰なのかを問い、まずは、私こそが、人を大事にしているという思いや愛、丁寧さや感謝を紡ぎだす存在だと気付くことで、その居心地の良い「見えない空気」を作り出すことができる。

13. 理論と行動を結びつけるために、思い（事例）を話すほうが腑に落ちる

分かり合っているという錯覚に気付くために、自分の話をする場がとても大事である。話すことでの自分自身の整理、プロセスの整理、そして、次への展開、見立て（アセスメント）につながる。スポーツや将棋などに例えるなら、1 手、2 手、3 手、先を見る訓練にもなってくる。

14.「化」（プロセス）こそ、変化、気づき、成長、学びの宝庫だ

組織化の「化」がプロセスを意味するのであれば、その「プロセス」に重要な意味があり価値がある。そこに、住民の力を掘り起こし、引き出し、自覚していくのだと。成功体験での喜び、自分への自信、自分の承認など、に気付いていくことで、住民の力が増していく。「自己肯定感（=今の自分の OK）」「自己効力感（=自分はできる）」「自己有用感（=自分は必要とされている）」。である。特に、「自己有用感」は、誰かのために役にたっているという生きる目的が生まれてくる。

だからこそ、住民が自分の力を自覚していない時は、組織化のプロセスの中で自覚化していかなくては意味がない。

15. 仲間づくりは仲間外れをつくる

グループ、事業、組織、すべては、仲間づくりではあるが、仲間意識が膨れ上がるほど、新しいメンバーの獲得が難しくなってくる。なかなか、新しい仲間が増えず、メンバーが固定化され、活動がマンネリ化してしまうスパイラルに陥る事あるが、常に、風通しのよい環境、意識を備えて、組織化を進めていくことが必要。また、出入り自由の平場（対等）の関係を意識する。

16. 地域理解は、多くの人の五感を通して見えてくるものである

住民によるコミュニティ理解は最重要であるが、訪問者や日常から離れた者が多角的、他覚的にまちを見ることで俯瞰的に捉えることができる。点で見てしまわないように、面、立体として地域をアセスメントすることが大切である。

＜解説＞　多くのまちを訪れたとき、そのまちそれぞれの強み、弱みを感じる。これは、そこに住み続けてきた住民には見えないものであったりもする。自分の顔を見たことのない自分がいることを理解するようなものである。

特に、感性でキャッチした事柄の多くを大切にしてほしい。そこに住む人々は、訪問者や外部から見てくれる人の情報を丁寧に読み解く必要がある。

例えば、あるまちに入った時、子どもからお年寄りまで道で出会う人が、必ず挨拶をしてくれた。非常に気持ちが良かったし、セキュリティーの観点からも安心を感じた。のちに住民に聞くと、当たり前にやっていることで特別だとは感じていなかった。しかも、学校教育や地域活動の中で当たり前のように伝えている習慣だとうことも分かった。そのまちの性格を表すもので、多くの可能性や、汎用性をも感じた。他にも、ある地域では、必ず美味しい食事でもてなしてくれた。何度も訪問したが、必ず食事に呼ばれ、美味しい地元の味に心が動き、美味しいと必ず思った。五感で感じた感触を忘れない。その地域の人はあまり特別と感じていなかったことも加えておく。地元で採れた新鮮で美味しい食材や地域に伝わる調理方法がそれらをつくりだした。

このように、それぞれのまち、地域にある特徴（長所・短所）は内部から見えることと外部から見えることを総合してアセスメントすると、地域が立体に見えて豊かなアセスメントが可能になる。特に弱みに関しても、外部からの指摘は大切にすべき者である。「見る、聞く、話す、食べる、匂う、触る、食べる、感じる」どれも、大切なアセスメント手法だと改めて感じる。

Ⅲ　コミュニティワーカーの信念・姿勢

１．円ではなく「縁」を単位にして、「人」という地域財産を創る人である

コミュニティワーカーは、地域住民の「縁」を大切にし、地域の「人」という財産を創っていくことに価値観をもつことが出来る人である。コミュニティにおける様々な活動のかかわりの中でつないだ「人」を単位とした財産価値を見出してくことが重要である。

地域内外をつなぎ、関係人口・交流人口が多くなることで、知力・地域福祉力が向上し、地域活動の持続性や広がりをつくることができる。振り返った時に、資金や施設は豊富でなくても、人の繋がりを財産だと思える地域をつくるお手伝いができることが大切である。

２．住民（地域）が映る鏡を立てる人である

前に向いて進んでいこうとする時に、まず地域の現状から目をそらさず、覚知していくことが重要である。住民はあたかも地域の現状が把握できているかのようであるが、実は表面的なものしか見えていない事が多く、課題や原因、さらには資源やマンパアワーを認識できていない状況にある。地域の現状をしっかり見つめることが出来るようなまずは、鏡を立てる（地域の課題や財産をみせる）役となって、住民が目をそらさず、地域を見る目（気づき）をつくっていくことが大切である。

３．過去⇔現在⇔未来を繋ぐ人である

住民が住み慣れた土地に愛着を感じるのは、これまで積み上げてきた時間の重みを知っているからであり、新たに住民となった（結婚・移住・転居）人もこれまでの歴史や時間を知る機会があるかどうかで、地域への愛着がわいてくる。未来へ向けて協働していくためには、現在から過去を知る機会をつくることが大切である。

４．地域に蓋のない空箱を置く人である

誰もが開封が自由であり、空箱であるからこそ、そこに新しいアイディアや新たな「事」をつくっていくことができてくのである。新たに空箱があるからこそ、そこに何を入れて行くのかを住民が一から考えるのであり、何も入っていない（何も決まっていない）箱をもって地域に入ることができるかどうかが大切である。

しかし、地域はこれまで地域が積み重ねてきたものや、捨てきれていない物が多く取り除くこともできない状況にもある。やりたい事が出来た時、住民の後押しをしていくことが大切である。

５．地域から投げられた思い（悩み・課題・希望・夢）をしっかりと受け止め、もう一度地域へ投げ返し、キャッチボール出来る人である

地域の方々が発した言葉をきちんと受け止め、ワーカーとしてどのように取り組むかを考えた上でもう一度その言葉を地域に投げ返すことで、互いに胸に落ちて行くものである。

よくある「ご意見をおうかがいしたい」という言葉で始まりそれで終わる座談会は、住民にとっては価値を感じない。自分の発した言葉がどのように受け止められ、返ってくるのかを実感できる関係性をつくっていけるかが大切なことである。

6．コミュニティワーカーとは、まっすぐに住民のチカラを信じる人である

住民にはチカラがある。そのチカラは、時に見え隠れすることはあるが、かならず地域のなかにある。コミュニティワーカーが、それを疑うのであれば、そこから立ち去らなければいけない。ただただまっすぐに住民のチカラを信じ、地域とともに歩く人がコミュニティワーカーである。

7．私欲は捨てるのではなく、周りに分け合う

行動の動機は私欲である場合もあり、自らのニーズが地域のアクションを生むこともある。住民が主役であることは当然ではあるが、自らが住民視線で物事を考えることができる場合には、私欲を捨ててしまうのではなく、周辺・近隣へ伝えることで、新たな気づき、解決の糸口を導くことがある。

8．「ふくしは誰のもの？」と常に問う訓練をする

福祉はすべての人に関係する。「ふだんのくらしのしあわせ」ということに気付き、幸せになる

ための権利（幸福権）を求めることができる目（力）を持つことである。同時に、住民が、ふくしと自分がつながっているということに気付けば、主体性をもち、社会を見る目が変わってくる。

9．変化を恐れるな！変化は常に起こっている

時代が変われば、社会も地域も変わる。自分の歳もとる。

昨日の自分と今日の自分はすでに違っている。さっきの自分と今の自分も違っている。を受け止めて、変わることは必然的でそれを恐れることはない。だからこそ、地域の組織化も変化を受け止めながら、常に変わっていくことを楽しみながら、そして次の世代にバトンを渡す工夫をしながら、同志を拡げ、持続可能・循環型の組織にしていく。

10.「○○」である前に、まず住民

地域にかかわるとき、その地域の専門職には専門職としての見方を期待してしまうが、専門職としての目線を聞くと、その地域の住民を気遣ったり、地域の課題を解決したい、という発言に偏りがちになる。専門職という鎧を脱ぎ捨てて、地域の一員としての見方を聞くと、地域の持っている力を誇りを持って話してくれ、その誇りが、次の活動の源になる。居住という枠にこだわらず、住民であっても専門職であっても、まず地域の一員としての目線を聞き、そこを出発点として次のステップを考える。

11．川下で起きている事象は、川上で何が起きているかを知り、元を断つことに意識を向ける

川下に流されている困りごとに対応することが求められ、そのことに追われていると、次から次へと流されてくる困りごとに疲弊さえ感じる。

実は、川下での対応をしながらも、その要因・原因・元になる川上に目を向けなければならない。そこ（川上）に意識（目）を向けたときに、川下で起こっている本質的な要因・原因となる元が見えてくる。そして、その見抜く力を持ち、何をすべきかを考え、行動につなげることがワーカーの本分である。

Ⅳ　コミュニティワークと住民との関係

１．住民は仲間であり、師である

コミュニティワーカーにとって、住民はともに考え、ともに活動し、ともに悩みながら苦楽をともにする仲間である。さらに、地域で起こりうるさまざまな出来事に関しては長期間に経過した歴史や背景があり、解決に関しても繊細で微妙な人との人の関係性を操れるさまは芸術に近いところがあり、その技を目の当たりにするとわれわれ専門職は到底他市打ちできないことを思い知ることになる。師と仰げる住民と出会うことはコミュニティワーカーにとっては幸運なことである。

２．コミュニティワーカーは住民から学び、相手を重んじる姿勢をもつ人

コミュニティワーカーが住民から学び、相手を重んじる姿勢をもつ人である。だからこそ、素直に分からないことを尋ね、住民を知ることに熱心である。だからこそ、住民の内なる願いや志、あるいは不安を敏感に感じ取る。

３．地域での人の関わりが困難を豊かな資源に変えていく

地域にはさまざまな課題がある。どの課題も一見解決しないものとみえることがある。しかし、地域では根気強くかかわり、氷が解けるように関係性を紐解きながら構築していくときがある。その関わりの先には、我々専門職では想像もできなかった豊かな変化を見ることがある。それこそ資源とよべるのではないか。

４．コミュニティワークとは住民だけでなく、職場、家族、自分の住んでいる近隣等も大切にすることから始まる

コミュニティワークの基本は、人と人の単位であると考える。身近な関係性の家族、近隣、職場等を大切にできないものは　さらに大きな単位の関係性を大切にはできないのではないか。常に人に向き合い、人の幸せを祈られる大きさを備える必要があると考える。

５．コミュニティワーカーは住民の立場と支援者の立場を意識しながら生活を観て、理解する

地域課題を解決していくためには、住民や専門職の立場で課題を実感し、自分ごとのように、アセスメントすることが大事。万人の生活を見ることは困難であるが、より近く理解するために、物事を多角的に観察することが大事。

６．相反する共感を融合し、住民の関係性を暖めていく

住民同士のトラブルに寄り添うことは、お互いの相反する気持ちや感情に共感しながら距離を縮めていく作業である。そして、それぞれの共感を融合しながら、その関係性を暖め、新たな関係性に紡いでいくことで、コミュニティの再構築が可能になる。

Ⅴ　住民との対話

１．地域に夢と目標が定まれば、不可能はない

地域には不思議な未知の力がある。夢を語り合い、目標を定めるとその力はさまざまなものを引き付ける。

２．地域での対話や協議の場があれば、社会問題の発見とその解決を見出すことが可能となる

個々人の活動には限界があり、情報発信、情報収集するにしても、他の方々のつながりの中で、親身になった対話や話し合いが問題発見の基盤となる。またそれらの行動は社会問題の解決に導

く可能性を生み出す。

３．主体には能動と受動の主体がある

「見守り活動」と「見守られ活動」という主体。どこかで、（支援）する側の立場でしか考えないところがあるので、自分が助けられる立場（主体）で考える工夫も必要。

４．日常の暮らしが「生きる力」を付けていく

人の暮らし（営み）は、ただ平たんではなく、いくつかの事柄が起こっている。大なり小なり起こる事柄に、どう対応（対処）するかで、生きる力や思考が養われていく。いかに対応（対処）するため、情報（法律・制度・機関・人など）を得ることが必要だとわかってくると、暮らしの中で、その情報を得るために、学びの時間を持つことになる。国は、その学びの時間を保障しなくてはいけない（学習権）。

２．研究会の場のふりかえり

以下は、2019 年 11 月 16 日の CRTP 研究会での話し合いをもとに、宇城絵美さんが編集した内容である。ただし、一部の内容については、これまでの研究会の記録等をもとに編集されていることを断わっておく。

朴：昔は共同体という人のつながり方がありましたが、現在はその様態は変化してきています。箕面市の北芝地区は北芝なりの、高知県土佐町は土佐町なりの独自の方法を模索していることが CRTP の研究会でも明確になり、いろいろな事例も発掘されてきました。

「地域アクションのちから」は、方法論ではなく、哲学あるいは社会の考え方として位置づけたいということも、同義であるのだと思います。人のつながり方を、新たな社会にむけてどう考え、発信していくのか、という考えでこの研究会を進めてきました。

■土佐町での事例から

山首：コミュニティへのアプローチに価値・視点を置いて実践を進めている社協は、残念ながらあまり多くはありません。コミュニティワークそのものへの価値が低いと感じています。

「地域で支える」とは、言葉でいうほど容易なことではありません。今回は、A 地区での 10 年間の関わりを事例として共有しました。この間、住民と悩み、限界集落と呼ばれ、紆余曲折があってようやくコミュニティを取り戻すという経験をしました。小さな活動を支えることで、A 地区から疎遠になった人がふたたびそのコミュニティに戻り始めました。結果、そうした積み重ねが「地域で支える」ことにつながっていると、具体的に見えてきました。

事例では、地域のコミュニティやつながりが増えてくると個の支援が見えてくるということを描きたいと考えていました。ワーカーのつぶやき、職員の思い、地域からの衝撃的な一言、そして出来事を時系列で書き出しました。地域コミュニティが醸成してくると、一人ひとりを認め合い、排除しない地域ができはじめました。地域の声を継続的に聴ける人がいて、その積み重ねがあることで、アプローチの瞬間を逃さない。こんな地区が土佐町内に 10 か所あり、すべての地区で物語が書けます。

山本：中山間地では地域基盤がそのものぜい弱化しています。組織化といっても、ないないづくしの中山間地では難しい。土佐町社協のコミュニティワークは、基盤づくりを進める中山間地のロールモデルとも言えます。また、福祉的アプローチをしない、と明言されているのも土佐町社協の特徴です。

「組織化」に住民主体という考えがあるのはもちろんですが、ことに中山間地、高齢化社会の住民主体は、決断と判断だと思っています。そこで「決める」ということが主体性です。そのなかでも社協の役割は、継続して住民の話を聞き続けるということに尽きるのではと思っています。

明石：土佐町社協の事例は、住民自身がなにをもってこの村で暮らしていくのか、いわば地域住民の哲学の共有が狙いだったのではと感じます。

私がいま住んでいる名古屋市東区で地域福祉に取り組むのは、自分がここで育って幸せだと思ったから子どもたちにもそう思ってもらいたい、住みやすいまちであり続けてほしいという思いが根本にあります。たしかに、地域福祉の仕掛人としてワーカーは配置されていますが、それよりも住民がここに暮らし続けるために大切なものはなにかを考えることが主体性と言えるのではないでしょうか。土佐町社協のように、この 10 年間を振り返ることで住民がどう変化したのか、変化があるなかでも代々受け継いでいるものがあって、それが哲学であり、社会の価値です。そうした確固たるものが人間として必要で、生き方、暮らし方の意志と言えるのだと思います。

山首：研究会の振り返りをとおして、私たちがこう考えて地域づくりに取り組んできた、この地区ではこの 10 年間にこんなストーリーがあった、こうしたことを住民に向けて話していなかったことに気づかされました。いろいろな意見があり、紆余曲折の経過があり、いまのこの地区がある。住民と社協職員が一緒に汗を流してきたこのストーリーが地域福祉だ、ということを、地元だからこそ、照れくさくて言えていませんでした。住民にとっては自然な流れのなかに生まれたことかもしれませんが、その価値を共有する必要性を感じています。

■北芝の事例から

朴：暮らしづくりネットワーク北芝（以下、北芝）では、運動性をしっかりと打ち出していて、それが北芝の強みでもあると思います。

尼野：北芝でのワークショップでは、職員が研究会のメンバーに褒めてもらい、悩みや気づきをフィードバックすることでの自己有用感を育んでもらえたり、外部の人の意見を聞けてよかった、という感想がある一方、リフレクションが手法となってしまったり、自分と異なる経験や考えを共有するのではなく他人事になってしまう人も一定数いるのだと、ワークショップ後のアンケートを見て感じました。それぞれのスピード感や意識の差と丁寧に向き合いたいのがいまの状況です。

研究会で取り上げた事例は、けっしてうまくいっている事例ではありません。事例に登場する若者は、最近は調子が悪くてあまり顔を見せていませんが、それも北芝らしさです。この事例に対して、私たちは、支援者目線、若者目線、と切り取るストーリーを想定していませんでした。どの側面から１つの事例にアプローチをするのか、という考え方が新鮮で、地域へのアプローチの違いから見る職員の変化も象徴的でした。

ワークショップで職員の思いや考えを引き出していただき、研究会では１つのエピソードを丁寧に掘り下げました。そのときの気持ち、職員の働きなど、多面的にできごとを見て、新しい視

点や関わる他者の動きを「こういうことが必要だった」と対話をとおして生まれてきました。北芝では、そうした経験をあまり積んできていないことに気づかされました。

「地域アクションのちから」に出てくる言葉でも、「大事だよね」と思う人もいれば、「100%納得できない」という考え方もあります。そのコミットの深さは人それぞれですが、その状況を一度みんなで受け入れよう、と考えています。「あなたはそのままで役に立っている」といっても納得感が得られにくいので、言語化した概念をつくり、なぜ必要なのか、どういう役割を果たしているかを明確にしたいというのが長期的な目標です。単発なリフレクション講座で終わらせるのではなく、日常のなかにどう落とし込んでいくかを考えています。

山本：外部の人だから話せる、という側面はもちろんあります。永坂さんにリフレクションの力があり、物語が書けるのは、藤井先生が丁寧に聴き、その意図を引きだすというスーパーバイズを続けてこられたからこそです。内省的なものを導くトレーニングが必要な一方、確信に迫るトレーニングは定期的に外部が関わり、継続して続ける必要があります。

明石：仕事や役割としての肩書と、認めていかなければならない個々のキャラクターがあります。役割のなかで自分が取り組んでいることを整理するときには、私は書くことを心掛けてきました。それもリフレクションであり、積み重ねはトレーニングです。

５Ｗ１Ｈ の記録もありますが、たまには心情を書いたりつぶやいたりも残しています。それが自分の力につながってきました。

朴：形式的な記録では意味はなく、自発的な記録が必要ですね。

■研究会の場の振り返りとこれからの展望

池谷：『地域アクションのちから』は、地域アクションのちからになり得るのか？この疑問は今後継続して持ち続けるべきものであると実感します。それは、多くのコミュニティワークやコミュニティデザインと言われるものが、固定化したイメージや手法論が確立すればするほど、まちづくりの哲学を学ぶことが止まることを意味するのではないか、自問自答し、この本を読み続けリフレクションすることが求められます。

CRTP 研究会はそれを補完する機能として徐々に受け皿を広めていく可能性を持っています。「個」としての省察と「集」としての省察を繰り返すことが、本来、CONET の求めていたことではないでしょうか。また、私が活動する北芝地区では、これらの蓄積が地域を超えた相互認知やささえあいの取り組みとして、広がっていくことを中期的な展望にしています。

山本：研究会のメンバーは、さまざまな背景を持っています。そのなかで共通言語を見出すのは難しいことでしたが、その過程をとおして内省的な気づきにつながっています。

最初はワークショップを体験したり、「地域アクションのちから」の読み解きを行い、１年かけて共通言語を導き出し、「何が起きるんだろう」という時間と空間と場を共有してきました。そんな経験をとおして、内省的な気づきがあるこの場がそれぞれにとって非常に大事な場になったのだと思います。

さらにここで出た気づきを各組織に持ち帰って、どううながしていくか。それがメンバーそれぞれに問われています。

細井：私にとっての「地域づくり」は、思い起こせば 2006 年に遡ります。この年の介護保険法の改正は、「地域支援事業」の創設、「地域包括支援センター」の設置、「介護予防」の導入を主としており、2000 年当時の介護保険法が謳う「介護の社会化」は、6 年を経て「地域福祉に回帰」したのだと痛感した年でした。

私は、ケアマネジャー等の専門職に「介護予防」の概念をお伝えし、ケアプランチェックを実施する傍ら、地域包括支援センターの職員と共に、「地域課題を地域で解決する仕組みづくり」にも取り組まなければならなかったのですが、私の戸惑いは、「地域を知らない。」、「住民が何に困っているのか知らない。」のに、どうして課題解決に結びつくの？であり、自分自身が地域に出向いていかないことには何もわからない、つまりは、「自分事」にしないと何も始まらない、わからない・・・という感覚でした。

私は、この研究会を通して、2006 年当初の自分自身に再び出会ったように思いました。

「鳩のフンから女子大生」も「限界集落」も「北芝」も、すべての事例を「自分事」として聞いていれば、それは、自分の住む町、働く町にも起きていることであり、その「気づき」によって地域が変化するきっかけにつながり、そのきっかけは人との「出会い」、「つながり」を生みます。「地域づくり」は、「だれもがだれかとつながっている」ことの実現や、私たち専門職が「つなぎなおし」に関わらせてもらえる好機だと思えてなりません。

朴：研究会としてのこの場は終了しますが、トレーニングは継続する必要があります。地域の歴史を抑えつつ新しいまちづくりにチャレンジするほかの地域でも同じ課題があり、そのつながりを強くしていきたいと願っています。

【参考資料】

1．平野隆之・穂坂光彦・朴兪美　編訳著（2018）『地域アクションのちからーコミュニティワークリフレクションブック』（韓国住民運動教育院著）CLC.
第１章「住民の力によるコミュニティ組織化」の小見出しカード

2．研究会の記録等

コミュニティ運動は
住民自らが行動する
運動である

1-05

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ運動は
住民の組織化された
力で行動する運動である

1-06

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ運動は
住民が地域を変えていく
組織的な行動・活動である

1-07

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ運動は住民
自らが組織化された力で
地域を根本的に変化させ
ていく運動である

1-08

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

自分の生活と自分が住んでいる地域の変化を望むのであれば、できるだけ多くの人々が力を合わせる必要がある。一人で始めることはできても、変化を一人でつくり上げることはできない。住民の力は「コミュニティ組織」を通して体系化・具体化されていく。自分たちの組織体がないと、力を発揮することはできないため、コミュニティ運動は「コミュニティ組織化」を前提とする。組織化された住民が、自分の組織を通して行動することが「コミュニティ運動」の本質である。

1-06

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

「住民のための」運動はコミュニティ運動ではない。コミュニティ運動は「住民による住民の」運動である。コミュニティ運動における住民とは、自分が地域の「住民」であることを自覚し、自ら動く「主体」である。誰もが「住民」になれるが、すべての人が行動する「主体」になるわけではない。コミュニティ運動は主体としての意識をもつ住民が自ら行動する運動である。「住民のために」ということで一方的に支援することは、住民を非主体的・依存的な存在にするだけである。

1-05

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

自分の生活に影響している問題を解決するために、住民はコミュニティ組織をつくり、コミュニティ運動を展開する。その過程を通じて、直面している問題だけではなく、様々な問題が自分の生活に関連していることを理解する。コミュニティ組織は、個別コミュニティを越える、より広く深い地域課題に関心をもっていくことで、地域の根本的な変化を進める。なお、コミュニティ組織は他の組織や団体とも連携・協力しつつ運動を展開する。

1-08

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

「地域の変化」は地域課題が解決され、よりよい状況になることである。コミュニティ運動は、住民が住んでいる地域を変えていくために起こる。コミュニティ組織が親睦と利害調整中心の活動にとどまるのであれば、それはコミュニティ運動ではない。コミュニティ運動は住民が関心をもつ地域問題を解決し、地域変化を引き起こす組織的な運動である。地域課題によっては、地域自治運動、地域経済運動、地域教育運動、地域文化運動、地域福祉運動などがあり、主体によっては、女性運動、青少年運動、ホームレス運動、障害者運動、高齢者運動などがある。

1-07

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

主体的な生き方——
私たちの生活を
私たち自身が責任を負う

1-09

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

共同体——
人間は他者とともに
生きていく

1-10

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

民主主義——
すべての権力は
住民から出る

1-11

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

自分と地域を
正しく認識し、
住民意識をもつ

1-12

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

人間は、共同体として生活することが基本である。互いに交わり生きる存在である。しかし、資本主義社会は絶えず人間を個人化させ、人間関係を分裂させる。互いに頼り協動しながら生きる共同体としての生活が難しくなる。共同体は住民が生きていくうえで、知恵ある生活様式である。コミュニティ運動は、住民を個人化・個別化させる社会に立ち向かい、共同体によって人間関係を回復させる。

1-10

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

住民が自分の力で課題を解決しないと、当事者である住民が対象化され、解決する主体に従属することになる。それだけではなく、外部の力や努力によって与えられる変化は、一時的なことにとどまる。住民はその変化を自分のものと見なさず、それを持続する力もない。コミュニティ運動は、住民が主体的に生きるときに可能となる。

1-09

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化は、どのような状況で自分が生きているのかを住民自身が知ることから出発する。住民は自分の生活と地域の現実に直面する。地域の現実について無関心であれば、変化は起こらない。これは自分が地域の住民であることをあきらめることである。

1-12

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

民主主義とは、すべての国民が主権をもって、その主権を行使することである。資本家だけが権力を行使するのは、本当の民主主義ではない。貧しくて力も無い者の民主主義が成り立つとき、本当の民主主義が達成される。運動は地域住民の力を組織し、社会的影響力、すなわち民主的な自治力をつくっていく。つまり、コミュニティ運動は地域から民主主義を実現していくプロセスである。

1-11

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

地域が直面している事案や
問題の解決のために
住民の力を結集する

1-13

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

住民自ら行動する
実行力のある
コミュニティ組織を
立ち上げる

1-14

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

多くの活動団体と連帯・
協力し、他のコミュニティ
組織とともに
連合組織を立ち上げる

1-15

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

意識化―
住民意識が
主役・主体をつくる

1-16

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化は住民を集め、力を発揮することにとどまらない。住民が自ら行動できる「組織的構造」としてコミュニティ組織をつくり上げることが重要である。コミュニティ組織は問題意識を共有し、それを解決するために行動する力の実体である。自治のコミュニティ組織が成り立たないと、完全なコミュニティ組織化とはいえない。

1-14

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化の根本は、住民自らが変化の力を結集することである。組織化の過程で住民は自分の無関心・無気力を乗り越えることを学ぶ。住民はすでに力をもっているのだが、それは潜在しているのである。住民が住民意識をもつようになると、潜在していた力が出てくる。住民には意志と信念の力がある。そして、生活の経験からくる知恵の力がある。このような住民の力を結集することがコミュニティ組織化である。

1-13

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

意識化とは、現実を意識することによって、新たな意識を生み出していくことである。自分が置かれている状況や構造は簡単に変わるものではないと認識している住民が、組織化の過程に参加することで、自分の生活や地域の現実を新たに意識するようになる。さらに、自分の歪曲した意識について悟るようになると、住民は地域変化の主役・主体となっていく。

1-16

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化は、より根本的な変化のために最大限の力を結集することを目指す。住民に役立つ地域内外の多くの活動団体と協力し、力を最大化する。さらには他のコミュニティ組織とも連帯した組織を立ち上げ、住民が主役・主体となる社会をつくっていく。

1-15

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

パワー化（力を発揮する）―
結集した力が
変化をもたらす

1-17

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』（CLC）

人間化―人間は
人間らしい暮らしを
しなければならない

1-18

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』（CLC）

コミュニティ組織化は
住民自身の利害関係から
出発する

1-22

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』（CLC）

「住民自ら成し遂げること
ができる」
ということを信じる

1-23

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』（CLC）

貧困・疎外・競争・差別など、絶えず人間を非人間化させる構造の中で生きている人々が多くいる。コミュニティ組織化は、非人間化させる生活構造についての問題意識から始まる。住民は自分を抑圧する社会構造や矛盾を直視しながら、その中で生きている自分の姿を自覚する。コミュニティ組織化とは、非人間化に抵抗し、人間らしい生活に向けて、住民が自ら新しい生活を創造することである。住民は、その過程の中で人間として享受すべき権利を守り、自尊感情を獲得していく。

1-18

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化の最終目的は、住民が望む変化をつくり上げることである。それが一人でできるのであれば組織化はいらない。コミュニティ組織化とは、分散している住民一人ひとりの力をひと固まりにして集団的な力をつくり、パワー化することである。地域には、影響力をもつ多様な既成勢力がある。そのような既成勢力は変化に向けた住民の努力に友好的なときもあるが、新しい力を警戒し、分散・分裂させようとするときもある。だからこそ住民は、パワー化したコミュニティ組織で自分を守り、力を発揮し変化をつくり上げなくてはならない。

1-17

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化のプロセスでは、住民が私欲や他者への不信などを示す場合もある。そのような状況においても、コミュニティワーカーは簡単にあきらめてはいけない。時に住民が見せる否定的な姿の多くは生活の経験からつくられてきたものである。ワーカーは、どのような場合においても住民が自分の生活を変化させる潜在力と可能性をもっていることを信じるべきである。住民が自らできることをワーカーが肩代わりして実施してはならぬ、というのは、アリンスキーによる鉄則である。

1-23

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

住民は基本的に自分の利害関係に敏感である。住民が自分の利益に大きな関心をもつのは当然なことであるために、住民の正当な利害関係は組織化のきっかけとなる。そして、組織化の過程に参加することで、住民は自らの利害関係にとどまらず、意識と行動を成熟させていくことになる。ほとんどの場合、個人の利害関係は地域の利害関係となる。要するに住民が問題だと感じる背景には、地域の政治、経済、社会的利害関係があるといえる。

1-22

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

住民は学習とトレーニングを通じて組織される

1-24

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織にとって、不条理に対する抵抗と闘いは不可避である

1-25

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

直面する地域争点のための組織化

1-40

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

日常的な地域生活課題のための組織化

1-41

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ運動は、住民が組織化された力で多くの問題を解決し、よりよい地域をつくっていくことである。問題解決は住民自らが代替案をつくり実践することで実現される。場合によっては、不条理な状況に抵抗し、要求行動をとることで成果が得られることもある。不条理が蔓延し、権力と社会構造が住民の生活を翻弄させるとするなら、抵抗と闘いは不可避である。抵抗と闘いの方法は集会やデモだけを指すのではない。住民の多様な経験からくる様々な創造的方法がある。住民の経験を越える抵抗と闘いの方法はかえって住民を不安にさせる。

1-25

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

緊急な事案に直面してコミュニティ組織を急いで立ち上げることがある。あるいはコミュニティリーダーやコミュニティワーカーが、自分の経験蓄積や自己誇示・自己満足のために組織化することがある。こうした場合、コミュニティ組織化は概ね失敗する。また、普遍性や公共性が弱く、ビジョンが不明なときにも失敗する。失敗を防ぐ唯一の方法は、徹底した学習・トレーニングを通して、組織化の目的や目標・ビジョンを明確に共有し、普遍性と公共性を確保することである。充分な学習・トレーニングの過程なしにはコミュニティ組織化は成功しない。

1-24

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

地域の日常的な生活課題のための組織化は、教育、健康医療、社会福祉、地域文化など、日常的関心によって住民を組織化することである。そのために、日常的な生活課題と関わる住民の意識を醸成し、住民が自らの日常的な関心事を扱っていけるように支えるのである。住民の意見や解決案を中心に住民を組織すべきである。その例としては、住みやすいまちづくり、協同組合づくりなどがある。

1-41

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

地域が直面する課題や争点のための組織化は、生活を脅かす問題の解決のために当事者である住民を組織化することである。強制撤去、有害環境、通学路安全のような具体的な課題から、国の制度や政策による課題に至るまで、その課題は様々である。地域が直面する課題の組織化は、住民生活と直接的に関連している問題を中心に、多数の住民が参加しやすい組織化の方法である。その例としては、住民による対策委員会活動などがある。

1-40

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

戦略的なコミュニティ
開発のための組織化

1-42

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

戦略的なコミュニティ
開発のための組織化

1-42

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

戦略的なコミュニティ
開発のための組織化

1-42

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

戦略的なコミュニティ
開発のための組織化

1-42

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化は、住民が望む方向へと地域を根本的に変化させることを目指す。戦略的なコミュニティ開発のための組織化は、そのために住民を組織化し、制度・政策を開発し実践する過程である。多くの場合に、「直面する地域争点のための組織化」や「日常的な地域生活課題のための組織化」も「戦略的なコミュニティ開発のための組織化」へと進む。つまり戦略的に持続可能な地域変化をつくっていくことである。その例としては、地域ネットワーク活動などがある。

1-42

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化は、住民が望む方向へと地域を根本的に変化させることを目指す。戦略的なコミュニティ開発のための組織化は、そのために住民を組織化し、制度・政策を開発し実践する過程である。多くの場合に、「直面する地域争点のための組織化」や「日常的な地域生活課題のための組織化」も「戦略的なコミュニティ開発のための組織化」へと進む。つまり戦略的に持続可能な地域変化をつくっていくことである。その例としては、地域ネットワーク活動などがある。

1-42

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化は、住民が望む方向へと地域を根本的に変化させることを目指す。戦略的なコミュニティ開発のための組織化は、そのために住民を組織化し、制度・政策を開発し実践する過程である。多くの場合に、「直面する地域争点のための組織化」や「日常的な地域生活課題のための組織化」も「戦略的なコミュニティ開発のための組織化」へと進む。つまり戦略的に持続可能な地域変化をつくっていくことである。その例としては、地域ネットワーク活動などがある。

1-42

『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

コミュニティ組織化は、住民が望む方向へと地域を根本的に変化させることを目指す。戦略的なコミュニティ開発のための組織化は、そのために住民を組織化し、制度・政策を開発し実践する過程である。多くの場合に、「直面する地域争点のための組織化」や「日常的な地域生活課題のための組織化」も「戦略的なコミュニティ開発のための組織化」へと進む。つまり戦略的に持続可能な地域変化をつくっていくことである。その例としては、地域ネットワーク活動などがある。

1-42

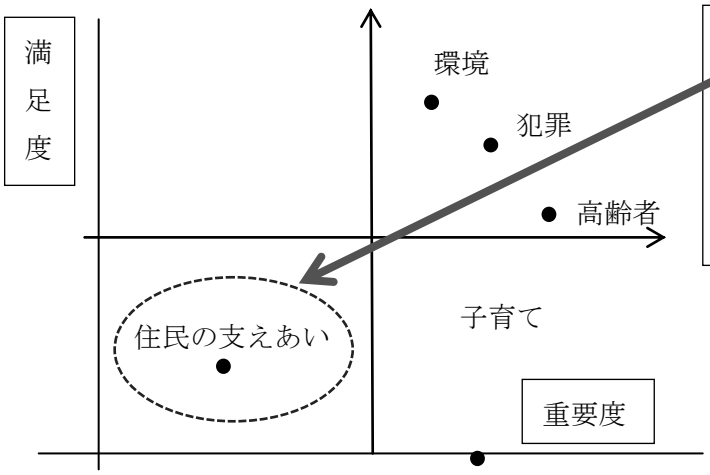
『地域アクションの力-コミュニティワーク・リフレクションブック』(CLC)

「コミュニティワーク・リフレクション」トレーナー・プロジェクト≒CRTP
第1回（20180908）

記録：明石

☆平野先生の挨拶と「地域アクションのチカラ」の活用について

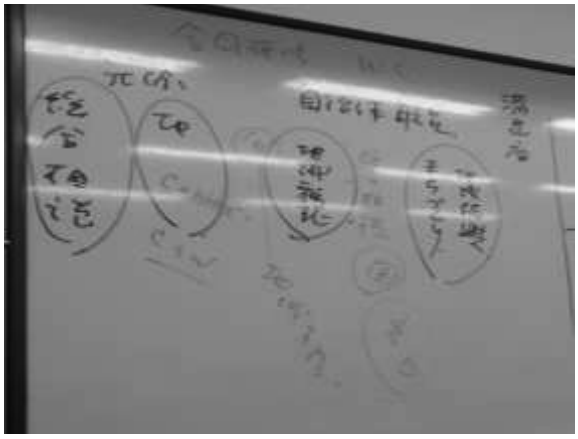
例えば・・・・　〇〇市での総合計画アンケートから

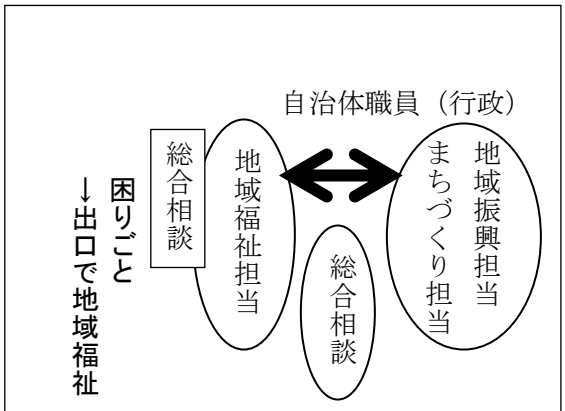


住民の支え合い⇒重要度も満足度も低い
⇒納税額高い「行政がやれば」という感覚
⇒重要度満足度上げるのは、社協の仕事で・・・・住民リーダー公募・・・意識は？？
「重要度」高いという前提で行うことが重要

ムーブメント

うねり





「地域づくり型相談業務」があってもいい

☆自己紹介（上記で、参加者として肩書きの紹介は済）

ーここでは、書籍「・・・チカラ」のコメントを箇条書きで紹介ー

池谷：コネット：北芝　議論を続けている　難しい

岡本晴：「・・チカラ」：テクニック⇔哲学・学び⇔伝える・・・は、乗り越えられるか

山首：小さな町の問題：一人ひとりの重荷、日本のこれからの問題

荻田：哲学をどうシェアしていくか？文面化　出会い　経験　プロセス

山本：社会福祉と地域福祉の違い

北川、宇城、朴：冊子をいかすために・・・

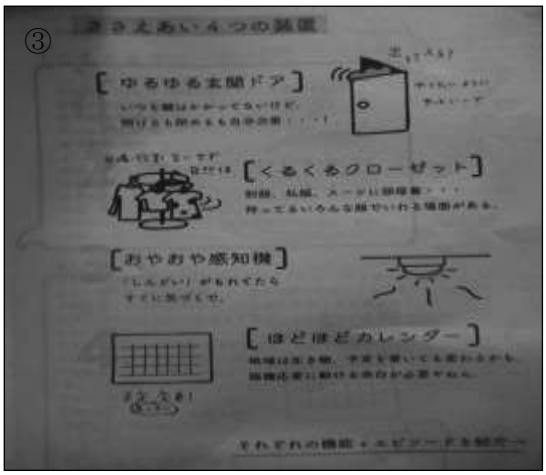
☆取り組みのプレゼンこの場をどう進めていくか意見交換：総合アセスメント

—池谷）・「コミュニティリーダー」と「コミュニティワーカー」を行ったり来たり。

・地域の人には「よそ者」、外部の人からは「地の人」、言われる。

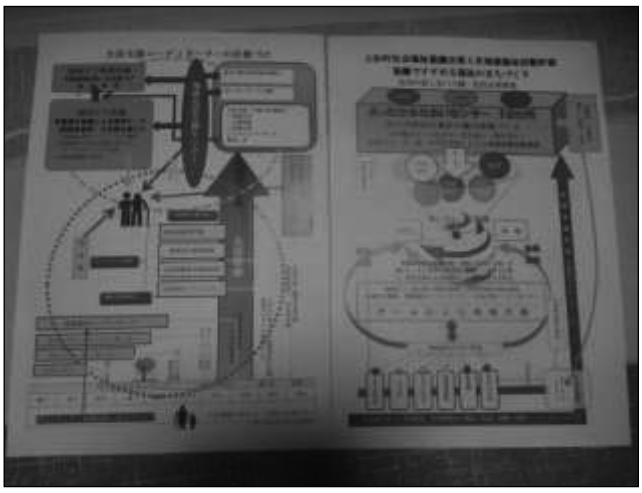
・部落解放後の、2015 年度地域全体を視野に入れてまちづくりに。

・ささえあい　4 つの装置
　1）ゆるやかなドア
　2）くるくるクローゼット
　3）おやおや感知器
　4）ほどほどカレンダー



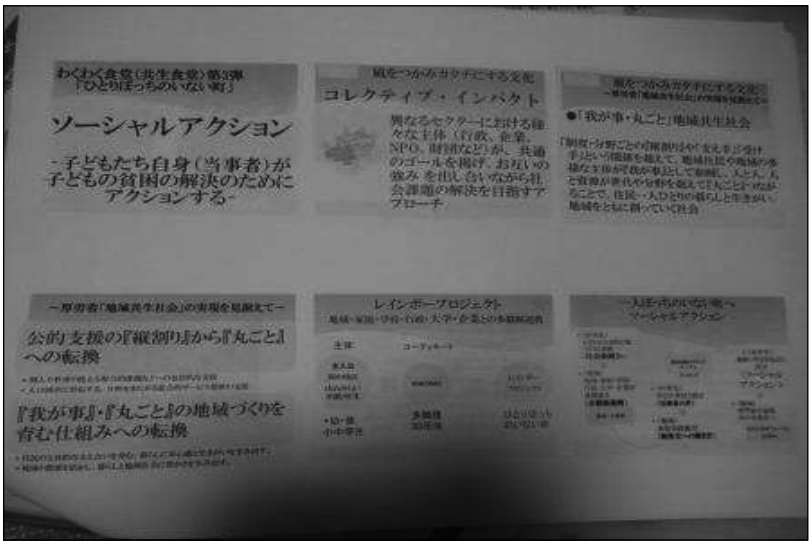
—山首さん：高知県社協としての取り組み
・動画視聴
・社協：座談会に、行政職員、地域行政職員 OB
・小学校10校から1校に。600人から100人に。
・中学校も8校から1校。小中連携校。
・住民の困りごとは、生活全般（イノシシが出る、お茶畑など）
→「地域支えあい」から「市民活動支援」みたいな・・・
・学校区に子どもを返す取組
→夏休みに、家からふれあいセンターへ
→子どもを預けたい親も喜び、子どもとふれあう高齢者も喜ぶ
・背蓑（せみの）
→下瀬戸・黒丸、南川地区では以前は背蓑の作り手がたった一人しかいなくなり、「背みのづくり保存会」というのを作って、その技術を教えてもらうとりくみ
（「とさちょうものがたり」https://tosacho.com/annderu/より）
・案山子でまちおこしも
・地域福祉は、住民自治

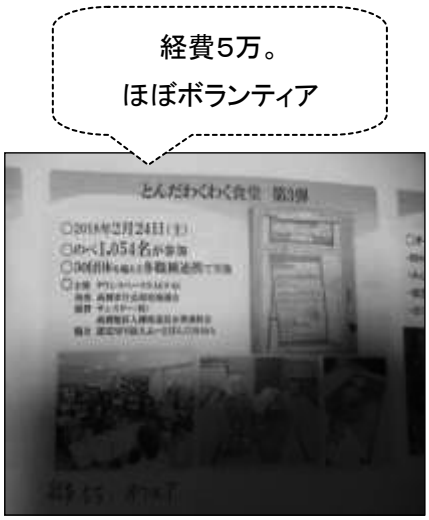
土佐町 HP から
＜土佐町の人口＞
男　性：1,866 人
女　性：2,051 人
合　計：3,917 人
世帯数：1,959 世帯
（平成 30 年 8 月末現在）



—岡本エさん「ひとりぼっちにしない町づくり」
・大阪府高槻市富田町　タウンスペース WAKWAK　1400万円弱規模の予算
・NHK 地域づくりアーカイブ「2018 年 4 月 22 日 － 課題解決ドキュメント・ふるさとグングン！」大阪府高槻市富田地区「ひとりぼっちのいない町」の第 2 弾放送
https://www.nhk.or.jp/chiiki/program/180422.html

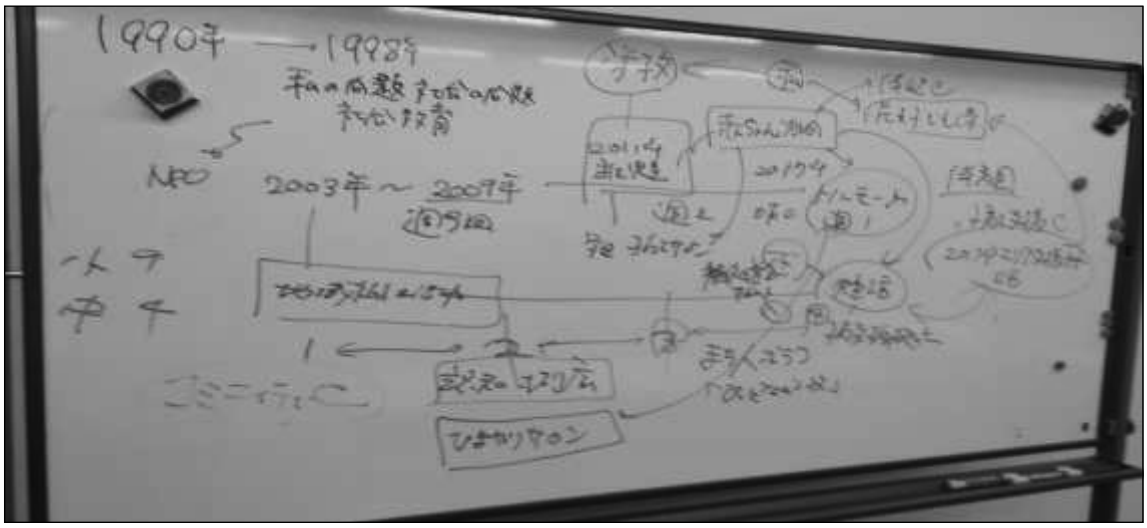
・





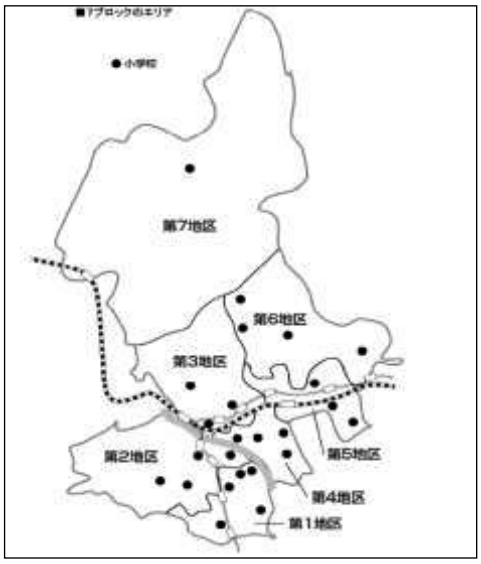
・子どもたちに「福祉教育が必要」と言いながら、教科書通りの学習を教えている。
「福祉」の問題を抱えている子もたちが大勢いるということを考えないといけない。

―明石
・バックボーンとして、夫との死別、労災、周りの助け、社会教育、女性学、NPO
・40過ぎたら社会に還元　1995年阪神淡路大震災　オウム地下鉄サリン事件
　「私の問題は社会の問題・政治の問題」
　「他人事でなく紙一重」（追加分）
　「万が一は、そうでないこととの1／2の確率」（追加分）
・つながることの大切さ→先輩の言葉、助言、背中
・現場が大事。ボランティアは「実践と学習」の両輪で社会を変える→野村文枝先輩（故人）



・今後は、ステージを変えながら変化しながら活動をすすめていく

―山本さん
・事業型社協「社会福祉」
・1995年阪神淡路大震災後の「地域福祉」
・個別支援は「地域福祉」⇔地域支援は「社会福祉」
・7つのブロックに地区担当配置（平成10年～）　自由にやってもらっている



・個別支援できる職員に
・生活支援コーディネーター→国のモデルは×　人材養成講座のツール

☆「アクションのチカラ」の活用方法の提案としての意見やコメントのまとめ

・5ページずつ読みながらメンバー間で共有（池谷）
・ぱっと開いたところを選んで確認し合う
・山首さんプレゼン時、意見交換時質問として「社協職員が地域福祉を進めるうえでの評価の仕方は？」という問いに対に対して、土佐町での「社協職員の地域支援評価」シートを紹介

「社協職員の地域支援評価」

①主体的な活動	昨年より住民主体の取り組みがなされたか
②地域住民の参加	一部の関係者だけでなく、幅広く地域の方々の参加が得られたか
③関係機関との連携・協働	行政・教委・学生・企業・NPO　などとの連携・協働することができたか
④活動計画の周知	地域住民が、活動計画の取り組みを意識して活動できているか

・そもそも、社協の職員はコミュニティーワーカーとしての自覚あるのか？
・コミュニティワーカーって？コミュニティーワーク（≒地域援助技術？）って？
　→CW　CSW　CO(コミュニティ・オーガナイザー≒地域組織化）　マネージメント
・「ムーブメント」「うねり」のとらえ方として
　→住民が主体的に活動しても、周りが固定化してしまう。「あんたたちがやってるから、ありがとうね」ではなく、波（ウェーブ）みたいに、地域福祉が拡がっていく様に、「拡がる」「拡げる」イメージ。もしくは、ゲリラ的に、あちらこちらで局地的に起こしてじわじわと広がっていくイメージ？
　→三角形のイメージ
・学校で個別支援が必要な子どもがいるのに、全体的に福祉教育を行うジレンマ

「コミュニティワーク・リフレクション」トレーナー・プロジェクト≒CRTP
第2回（20181006）

記録：明石

◆開催日時：2018年10月6日（土）
◆会場：日本福祉大学鶴舞キャンパス7階会議室

◆内容

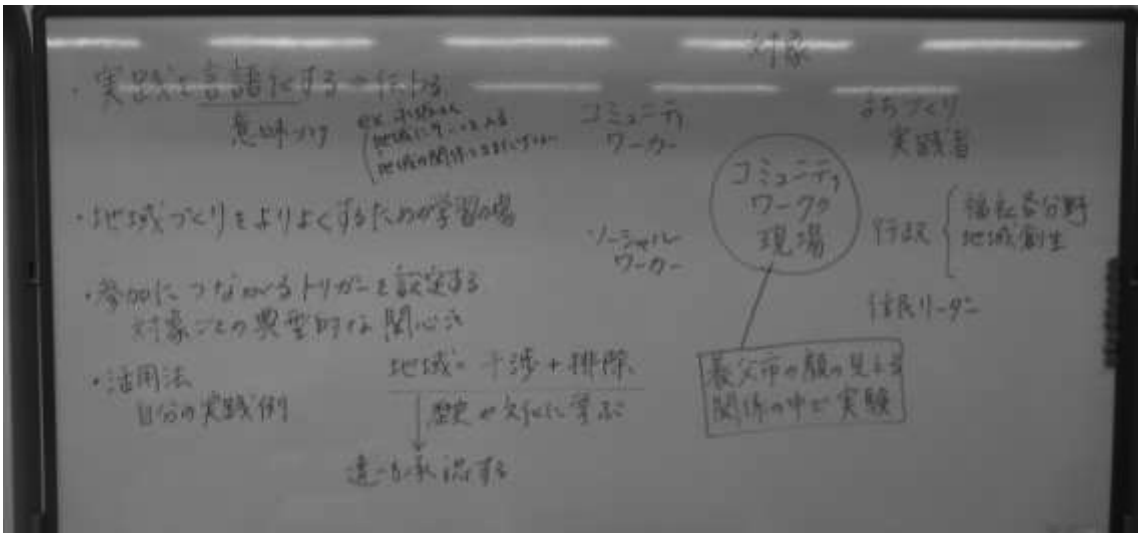
☆自己紹介

新しい参加者として、椿さん　永坂さん

☆取り組みのプレゼンこの場をどう進めていくか意見交換：総合アセスメント

①岡本晴さん　レジュメ参照

・県社協ワーカーとして、現場からは離れているが、できるものがある。
・県ワーカーとしての現場は、実践者との出会い（小地域福祉活動サミット）の提供
　→現場実践者：実践を文章化し報告することやリフレクションの機会を提供することで、新たな気付きと次なる展開への発見
・行動記録の活用
・スケール（哲学）をもつこと
　→いきなり哲学をとなると武勇伝を聞いている感じがする。実践を基にすすめ、無意識を意識化することで哲学的なことが伝えられる



・質疑応答

……

②永谷さん　レジュメ参照

・明石市望海地区での取組紹介
・質疑応答

……

③椿さん　口頭での取り組み紹介

☆「**場の方向性の議論**」気になった言葉を箇条書きに

・日本の現場
・ガイドラインの提示：A）B）C）→誰に向けて？
・場の媒介者≒トレーナー→（1人のワーカーを育てるレベル）
・気づけない人が来る、自己分析を整理できない（苦手）な人
・ワーカー、リーダー、住民・・・その場で変わる
・コミュニティワーク×コミュニティマネジメント
・「地域福祉」の固定化
・社協でなくてもよい
・システムある中で、求められるコミュニティワーク
・無自覚な人へ
・地域の生の声がないと・・・
・わかる言葉に置き換える重要性：言語化

「地域の中に“そっ”とはいる」→「地域住民の関係性をこわなさいで」

私もワーカー？

☆**WS 実践**（朴さん講義で不在）

進行（明石）が、進行表に基づき WS を進めた。 各メンバーも、「コミュニティワーク・リフレクション」メモに記入しながら進めた。 ★テーマ「第3章　コミュニティワーカーとは」 ★進め方 ワークシートの記入の説明 **①自己紹介** （すでに終えているので省く） **②カード選択** 本日のテーマであるカードを表向きに広げて黙読してもらいながら、「自分の気のなるカード」を心の中で決める **③カード選択の理由** 順番に選んだカードを手に持ちながら選んだ理由を発表（＠3分）。発表したら、カードはもとにもどす ・No.⑪「住民には自ら解決する力がある」×３人 ・No.⑬「住民と話し合う」 ・No.⑯「ｺﾐｭﾆﾃｨ運動のﾋﾞｼﾞｮﾝをつくって活性化する」 ・No.⑲「住民自ら行動するまで待つ」 **④グループカードの選択**　10分 メンバーが選んだカードだけ残す。（他はかたづける） 議論しながらグループで1枚選ぶ →・No.⑯「ｺﾐｭﾆﾃｨ運動のﾋﾞｼﾞｮﾝをつくって活性化する」 **⑤グループカードの深化**　10分 「グループのカード」を選んだメンバーが、そのカード	 ②気になるカード選択中 ③気になるカード発表

の裏面を読み上げる。その後、カードについて、内容の違いや類似性などを話し合う。

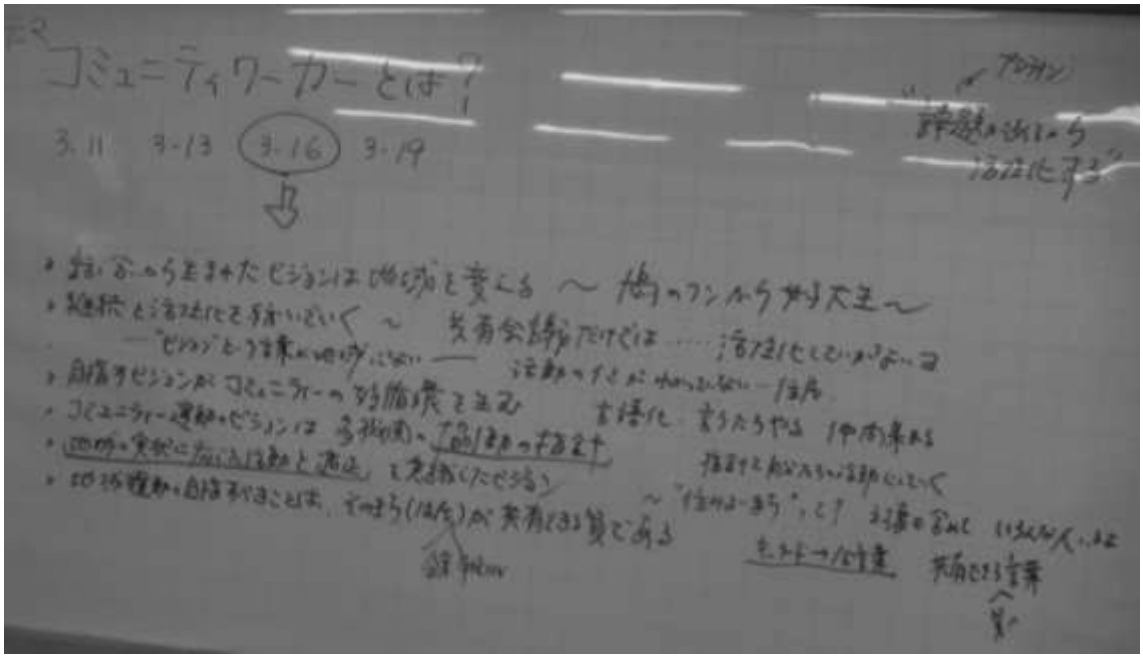
⑥新たなキーワードの提示（個人ワーク） 3分

5の過程を通して、グループカードと関連した新たなキーワードを作成

⑦報告（発表）

１人3分で発表。キーワードを板書する

⑦キーワードを板書



ふりかえり・感想（自分のふりかえり）

ここでは、WS 自体のふりかえりに加えて、WS の時間配分や手順のふりかえりやファシリテーターの進め方などについても意見交換を行った。

→宿題として、ワークシート、進め方シートを基に、気づきや提案を記入し、次回の定例会にて意見交換を行うこととした。

→また、6新たなキーワードの提示の際に、永井さんが話されたエピソードトーク「鳩のふん」については、次回の定例会で、再度話題提供をしていただきくことになった。

☆まとめの議論（場の方向性や次回の内容など）

「コミュニティワーク・リフレクション」トレーナー・プロジェクト≒CRTP
第3回（20181103）

記録：明石

◆内容

☆挨拶→前回のふりかえり＠3分

・明石：提出メモを参照ください

・山本：提出メモを参照ください

※気付きを醸成する研修を考えたい！！

※質問「水戸黄門の役割とは？」

→受講生にオチが見えるしかけ

・岡本晴：提出メモを参照ください

※奈良市都祁地域

福祉車両運行事業（移送サービス）は、福祉タクシーと違う！住民主体のとらえ方

→心動く職員　or　仕組みはどうなってるの？と聞く職員

・永坂：提出メモ参照

※若いワーカーは、実践をつんでいく中で、ノウハウだけを追う傾向にもなる。

やり方で右往左往し、縦割りの弊害

・朴：提出メモ参照

※クロノス（ルーティン・日常が流れていく時間）とカイロス（遮断して意味づけする）

・池谷：カードの WS は仲間とやってみて、どの場面でどう使うかは難しかったが OK。

C 対象に広げると・・・、意図が違うかな？やらされ感を持たれそう。

「あの人だからできる」「北芝だから」と思われないように WS を練ることが必要。

箕面は、社協と一緒にやってみたいので、平野さんに来てもらう。

・宇城：CLC には、講師依頼があり、派遣調整しているところだが、行政からは、「住民主体で進めたいけれど、住民の動きが鈍い」という声。

オチが見えていないのは？→　整理したい

・山首：コミュニティワークを“畑を耕す作業”とイメージして、どこの作業をやっているかわからないのではなく、「私、今、これやっているのよね」と言う職員同士のわかりやすさが必要。

あの人が事例発表することで発展

→困りごとの声をどうしていったかのエピソードの見せる化

・北川：全体像が見えてきて何ができるかがわかるのかな？

あちらこちらでカードを使ったゲームが流行っている（NPO カード、貿易ゲーム、ボードゲーム）ので、このカードを使った WS に期待

☆永坂さんから、改めて「鳩のフン」のエピソード提供

・永井さん作成の資料を基に、「地域版わらしべ長者”鳩のフン“」を提供

「みんなの広場」での聞き取り座談会→鳩のフン問題浮上→背景に高齢化を含む社会問題を見る→兵庫県立大学看護学部の存在→大学の先生に鳩のフン問題を話す→女子学生の家賃が高い問題→その公営住宅に女子学生を住まわせたい→自治会長が副市長に説き落とそうと提案→先生、女子学生を呼んで皆で赤ちょうちんで口説く→その夢を地域劇でも演じる→副市長から OK→3 人の学生がやってくる→自治会長「役割をふろう」とする→女子学生の得意をプレゼン→地域と学生のマッチング→地域に様々な変化が→その都度話し合い、解決しながら夢もかなう→来年も追加の女子学生を受け入れる→貴崎に女子学生が行きかうまちになる（妄想）→そして、地域から高齢化と後継者問題の話がでなくなったとさ・・・

以下、簡単に話の流れを記載します。

※意見交換

・つぶやき（鳩のフンが困る）の解決に向けて動く。

・適材適所、誰が話をするかで変わる。（ex 自治会長が副市長を口説く・・・など）

・親の立場から。女子学生にとっても、地域が暮らしのトラブル（病気、災害、困りごとなど）の支えとなり、助けてくれる人がそばにいたらとても心強く安心。

・学生が世帯主になっていないのでリアリティな地域感がない。

　→学生にリアリティを伝えるには、とても良い取り組み。住民視点が持てる。

・この住宅こそが、将来の保健師、看護師になる学生にとって、学びの場となりうる。

・ヒアリングからは生活支援は見えない→つぶやきひろい

・事例を物語にしていく事で、聴く側の記憶に残る。言葉の選び方。

・人と共に語ると夢がかなう

★本文中 2 ページの下から 4 行目からの部分、「自治会長が学生に地域の役割を押し付けようとした」時に、ワーカーが、学生の得意とするところを話させなければ、このお話はここで終わる。という視点を持つことも重要。

　→そういう読み取り方ができると、この事例が良い教材になる

※実は。。。この事例文章が、後半に・・・

☆カードワークショップの活用について

池谷さんから、欠席したメンバーへ、資料記録「WS 実践」を参考に、進め方の報告

岡本晴さんから、宿題提出資料から報告。参照ください。

明石さんから、宿題提出資料から報告。参照ください。

※意見交換

・シートで記入する際に、あえてキーワードを拾っていく作業は、スキルを身に着けるために必要ではないか。

・事例を分解して、文脈をどう読み取れるか、気づくか、そのために「深化」する作業と、報告の取りまとめは肝。

・空中戦での議論から結論に達した後、プロセスの要点が掴み取れるているか？

・そもそも、カードを利用することは有効で、空中戦でと読み取れない要点をカードが解説してくれることで、大事にしたい項目が見えてくる。
・「鳩のフン」の文章は、第 3 章「コミュニティワーカーとは？」を見ながら落としこんでいったら、一致してると確認できた。エピソードでのワーカーの動きの根拠になった。
・対象 C 学生新人職員は、第 1 部？それとも、第 2 部？
・ファシリの力量を問わずにできるなら、住民主導の事例検討、例えば「鳩のフン」を読んで、カードを落とし込むワークができないか。
・北芝の取り組みも、どこがどうスゴイの？と、紐解けば、ベタなことに気づく
・学生に試した時は、「⑤グループカードの深化」が難しかった→実践がないため
◆対象 A、B、C について、共有しましょう

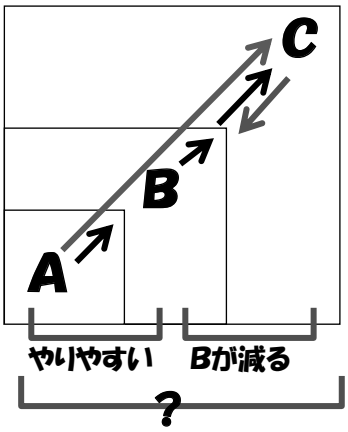
リフレクションワークショップの対象（想定）2018. 11.3

Aはコアチーム。韓国コネットは、30 人。

A コミュニティワークを一定理解しているワーカーや住民リーダー
※地域づくりをすすめている層

B 関連領域の専門職や行政（ex 包括）
※これから広げたい層（一緒にやっていく）

C 自治会、活動グループ、生活当事者
※目指す地域へむけた可能性を広げる



◆そもそも、コニュンティワーカーとは？コミュニティワーク・ワーカーの確認

コミュニティワーカー、コミュニティサポーター（名古屋市行政機関）は何をする人？
ケアマネージャーは、決まった名称で仕事が明確だが、ワーカーは？
　→自分のやり方でやればいい。
コミュニティワークは事例を提案することで具体的なイメージができること。そして「今、これ、やってんねん。」その積み重ね。
「わたしの問題は、社会の問題」という言葉がザワザワしている。だから、実践の場
行政は答えを求めてくるが、可能性を見出すため、可能性を探る手法としての道具
専門職ではない？「カーカー（ワーカーのこと）」ゆう（言う）たらあかん。
活動家（≒アクター）である／活動家は、場を創っていく事が必要
北芝スタッフが、韓国で「あなたは活動家か？」と聞かれ答えられず帰国。考えることが大事で、その後、彼は活動家と名乗る
　⇔「活動家」「運動家」の言葉が過激にとられる
制度が弊害？　制度ができるといろいろ言葉が氾濫して、本来の意味を邪魔する
理念を事業に／NPOは隙間を埋める活動／ボランティアの原点の話にも通じる
<u>冊子、最後保坂先生の解説を読んで落とし込んでいく</u>
職業としてのコミュニティワーカーの研修ならいくらかとれる。

・永坂さんの「鳩のフン」の事例文章は、第 7 章「コミュニティ組織化のスケッチ作成」につながるのでは。永坂さん自身も、日本福祉大学の講義で、事例を物語にすることを教えられた

→事例×カードの活用

☆次回の内容や場の方向性など

・兵庫県社協荻田さんからの提案で、WSを行う具体的な方向性について、グループライン「朴研究会CRTP」で、岡本晴さんが記したトピックスメモを転記します。

◆兵庫県でのWSの実施内容

①実施日程:2019 年 1 月 24 日(木) (25 日から韓国視察へ飛び立とう!!)

②会場:神戸市

③対象:B?→対象者は上記想定を参照

※実践経験の差について、カードワークが深まるかどうかは、メンバーの実践の質や量に影響を受ける。リフレクションが大前提なので、自分の選んだカードやグループカードに触発されて自分のエピソードを引き出せるか(引き出せるような整理ができているか)がキモになるか?

・工夫その①

リフレクションをする準備として、事前に、自分の実践上の課題を短くて良いので文章化してグループで共有する。

・工夫その②

好事例を使い、カードワークと組み合わせることは可能ではないか?

例えば、永坂さんの新作「鳩のフン」は第 3 章「コミュニティワーカーとは?」や第 7 章「コミュニティ組織化のスケッチ作成」で、紐解き意味づけすることができる。

経験の浅いメンバーでも、事例から触発されてカードを選び、そこに自身の実践での経験を呼び覚まされる?

事例を用いることで、トレーナーの腕力に頼らず進行できる。

その他

◆2018 年 10 月の研究会でのカードワークショップにて、出されたキーワード及びマイカード
・話し合いから生まれたビジョンは地域を変える～鳩のフンから女子大生～
・継続と活性化を紡いでいく～共有会議だけでは、活性化していかないよ
－ビジョンという言葉が地域にないー
・目指すビジョンがコミュニティの好循環を生む
　言語化・言うたらやる・仲間集まる
・コミュニティ運動のビジョンは多機関の協働の指針
　指針を自分たちの活動にしていく
・地域の実状に応じた活動と適性を意識したビジョン
・地域運動の目指すべきことは、そのまち（住民・企業・学校など）が共有できる質である

◆気づきメモ（2019.09.16）　山本
○組織のマネジメントで必要とされる視点：自組織を如何に客観的に見ることができるか？
自組織のマネジメントは人づくりだ！客観的に物事をみて、意見をぶつけ合うことが大事。
○専門性って；教える教わる関係ではない。対話を繰り返し、物事の核心に近づき、コンセンサスをとる。
○気づきの相乗効果：気づきを他者へ投げかけ、気づき。また、その気づきを他者へつなぎ、気づくを繰り返すことが、思考の基本。
○気づきは、自分を深め、さらに、自分を理解することができる。
○対話、会話が思考を生み出す、基盤。

CRTP（コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクト）研究会の展開

（２０１８年4月～２０２０年3月）

2018 年度※CRTP 展開

・準備会（2018 年 4 月）

・実験的なワークショップの実施（2018 年 6 月）

・準備会（2018 年 7 月）

・第 1 回 CRTP 研究会（2018 年 9 月）

・第 2 回 CRTP 研究会（2018 年 10 月）

・第 3 回 CRTP 研究会（2018 年 11 月）

・第 4 回 CRTP 研究会（2018 年 12 月）

・韓国フィールドワーク（2019 年 1 月）

・第 5 回 CRTP 研究会（2019 年 3 月）

※CRTP は、JSPS 科研費 JP16K04213（研究代表者：朴兪美）の助成を受けて実施された。

2019 年度※CRTP 展開

・第 1 回 CRTP 研究会（2019 年 4 月）

・第 2 回 CRTP 研究会（2019 年 6 月）

・北芝現地研究会第 1 回（2019 年 7 月）

・北芝現地研究会第 2 回（2019 年 9 月）

・第 3 回 CRTP 研究会（2019 年 9 月）

・第 4 回 CRTP 研究会（2019 年 10 月）

・第 5 回 CRTP 研究会（2019 年 11 月）

・北芝現地研究会第 3 回（2019 年 12 月）

※CRTP は、私立大学戦略的研究基盤形成視点事業（文部科学省）「重複化する福祉制度の設計と自治体運用に関する評価とフィードバック」（研究代表者：平野隆之）、および日本福祉大学 2019 年度公募型研究プロジェクト（A）「制度福祉システムの機能不全を補う中間組織による地域福祉推進のメカニズムの究明」（研究代表者：朴兪美）の助成を受けて実施された。

CRTP（コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング・プロジェクト）研究会・メンバー
（２０１８年4月～２０２０年3月）

明石雅世　名古屋市東区地域福祉活動計画住民ボランティア

尼野千絵　NPO 法人 暮らしづくりネットワーク北芝（2019 年度）

細井洋海　芦屋市（2019 年度）

池谷啓介　NPO 法人 暮らしづくりネットワーク北芝

北川郁子　七七舎

永坂美晴　明石市社会福祉協議会地域総合支援センター

荻田藍子　兵庫県社会福祉協議会

岡本晴子　奈良県社会福祉協議会

岡本工介　一般社団法人タウンスペース WAKWAK（2018 年度）

朴　兪美　日本福祉大学福祉社会開発研究所

鳥越雅也　芦屋市社会福祉協議会（2019 年度）

椿　佳代　災害ボランティアコーディネーターなごや、防災士、民生委員

宇城絵美　NPO 法人全国コミュニティライフサポートセンター

山首尚子　土佐町社会福祉協議会

山本信也　宝塚市社会福祉協議会

※平野隆之　日本福祉大学（協力研究者）

コミュニティワーク・リフレクション・トレーニング

―リフレクションによる共有の場を求めて

２０２０年3月

CRTP（Community-work Reflection Training Project）研究会　事務局

〒４６０－００１２　名古屋市中区千代田５－２２－３５

日本福祉大学名古屋キャンパス北館７F

福祉社会開発研究所・アジア福祉社会開発研究センター　朴　兪美

TEL：０５２－２４２－３０８２　/　FAX：０５２－２４２－３０７６

本研究は、JSPS 科研費 JP16K04213（研究代表者：朴兪美）、私立大学戦略的研究基盤形成視点事業（文部科学省）（研究代表者：平野隆之）、日本福祉大学 2019 年度公募型研究プロジェクト（A）（研究代表者：朴兪美）の助成を受けたものである。